第２節　近世の遺構・遺物

近世の遺構では、主に中城御殿跡に関連する遺構が確認された。遺構が形成されている造成土や遺構の構築状況などから、近世1（18世紀末～中城御殿移転まで）、近世2（18世紀代）、近世3（中城御殿跡創建～17世紀代）に大別することができた。

第１項　近世1（18世紀末～中城御殿移転まで）

近世1－A

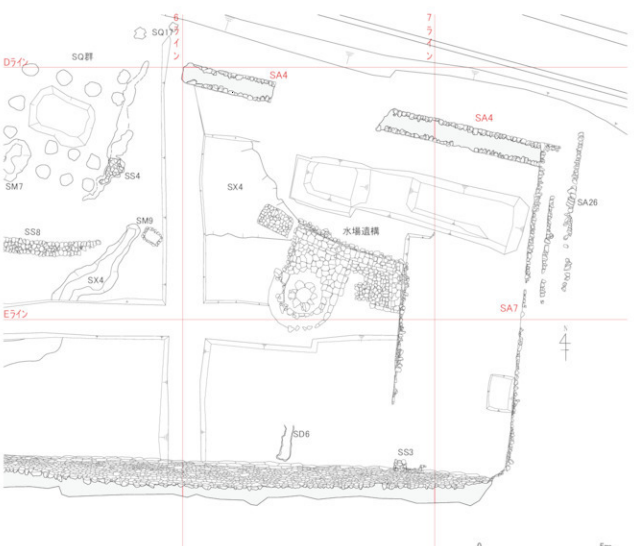
A：遺構

SA4

東側から西側にかけて緩やかに傾斜している遺構。天端は削平されている。SA7と関連がある遺構で、後述する水場遺構を取り囲むように形成されている。これらはⅢ区の中心部から北側部分と高低差があることから、通路等の横に配置された石積みと想定される。これらの石積みに伴う道跡などは検出できなかったため、削平されている可能性がある。

SA7

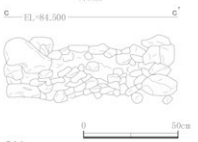
南側から北側にかけて緩やかに傾斜している遺構。天端や、石積みの一部は削平されている。SA4と関連する遺構で同一時期に機能していたと考えられる。



第16図 近世1-Aの遺構1

SA4 検出状況（西から）

SA4 半裁断面（西から）

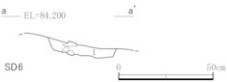


SA7 立面（西から）

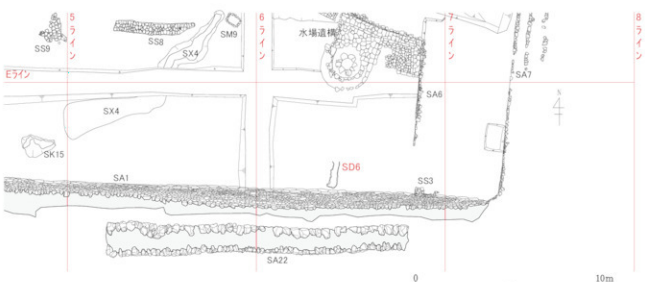
第 17 図 近世 1-A の遺構 2

SD6

非常に浅い溝状遺構。堆積層も1層のみで、用途不明である。



SD6 完掘状況（南西から）



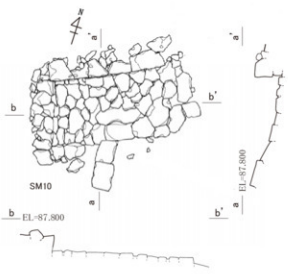
第18図 近世1-Aの遺構3

SD6 半裁断面（北から）

SD6 半裁状況

SM10

造成3上に形成され、長方形状の石組遺構で東側部分は後世の削平を受けている。遺構底部は石敷きがされている。遺構の南側には何らかの排水溝跡と考えられる石がわずかに残存し、遺構外から遺構内部にかけて傾斜している。外部から遺構への排水施設の一部と考えられるが詳細は不明である。



第19図　近世1-Aの遺構4

SM10 完掘状況（南から）

SM10 半裁断面（北から）

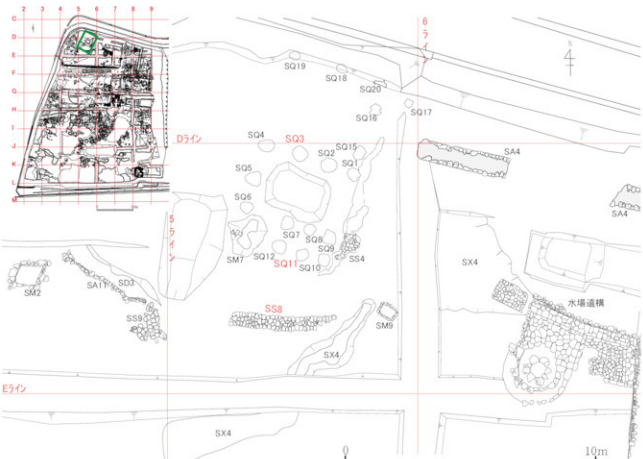
第20図　近世1-Aの遺構5

SQ3・SQ11・SS8

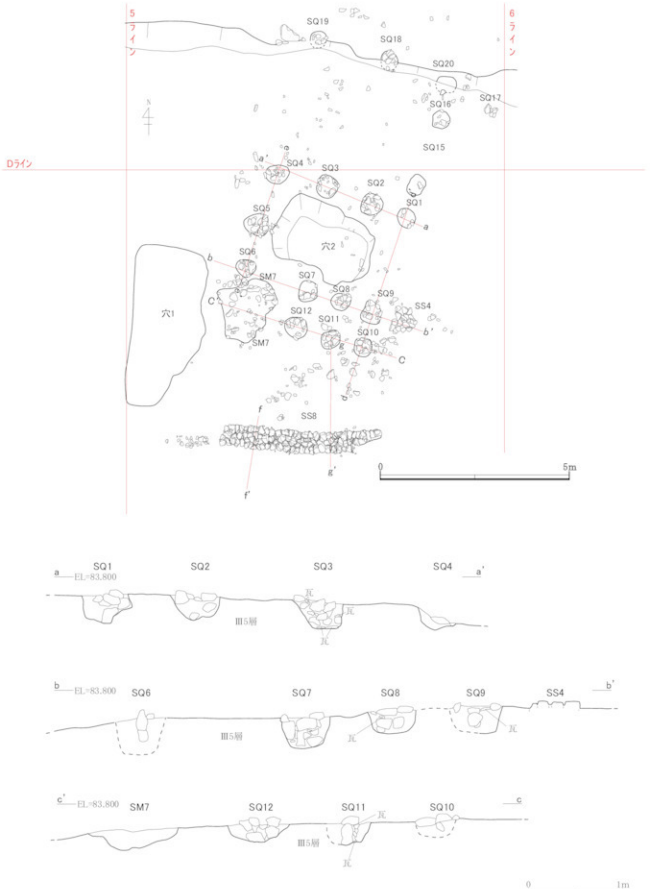
水場遺構の西側で確認され、SQ1 ～ SQ15（SQ群）は石組柱基礎跡で造成1に伴う遺構群である。直径40 ～ 50cmで石灰岩を円形に充填した遺構。石灰岩の他に瓦や漆喰なども多く混入している。遺構の断面を確認したが、明確に掘り込んでいる状況が確認できる部分と確認出来ない部分があることから、石組を形成しながら造成を同時に行っていた可能性がある。礎石を置くための基礎遺構と考えられるが礎石が残存しているものはなかった。これらの遺構の周囲に石敷き遺構（SS8）が一部残存していた。

遺構残存状況から総柱の建物跡があり、縁側部分には石敷きがされていたと考えられる。水場遺構とほぼ同一面で確認できることから、同時期に機能しており、関連性の高い遺構である。

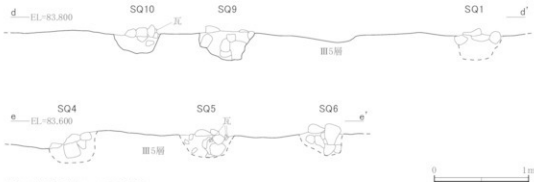
これらの遺構から外れた部分のSQ16・17の部分にも、石組柱基礎跡が確認された。この建物が北側部分まで存在していた可能性については、対となる遺構が残存していなかったため不明である。存在していた場合、建物の時期差については不明である。



第21図　近世1-Aの遺構6



第22図 近世1-Aの遺構7



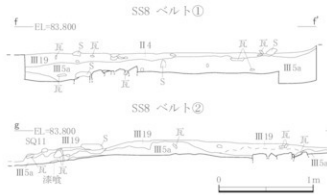
第23図 近世1-Aの遺構8

SQ1 ～ SQ12 検出状況（南東から）

SQ3 検出状況（北から）

SQ3 半裁状況（北から）

図版7　近世 1-A の遺構1

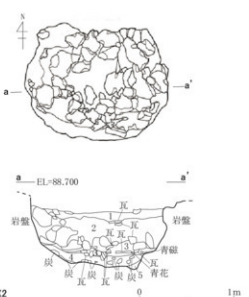


第24図 近世1-Aの遺構9

SS8 検出状況（北西から）

SX2

石灰岩の岩盤を掘り込んだ遺構。用途は不明。石灰岩礫や土が入り込んでいる。一度遺構が廃棄された後に、埋められたと考えられる。検出当初は、上部に撹乱土があったことと、周辺の関連遺構が不明であったことから、近世1の時期の遺構と考えていたが、遺構内部の出土遺物様相から近世3～グスク1の時期の遺構である可能性もある。特に第31図22は明末～清初の時期の中国産青花である。他遺物は瓦等が出土し、新しい様相を占める遺物が少ない。同時期遺構に比べ、堆積の様相が異なることから時期様相は保留としている。



第25図 近世1-Aの遺構10

SX2 検出状況（南から）

SX2 半裁状況（南から）

SX2 半裁状況（南から）

SX2 完掘状況（南から）

図版8　近世 1-A の遺構2

SX34

当初方形状の遺構が確認されたが、堆積が非常に浅く、遺構全形も不明である。用途は不明。

SX34 検出状況（東から）

SX34 検出状況（西から）

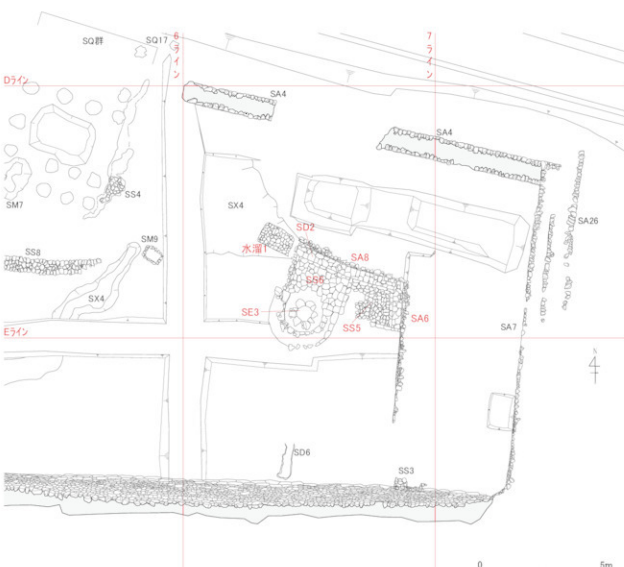
図版9　近世 1-A の遺構3

近世1－B

A：遺構

水場遺構（SA6・SA8、SD2、SS5・SS6、SE3）

石積みや石敷き遺構、井戸遺構からなる遺構群であることから水場遺構としている。それぞれの遺構から出土したもので特徴的なものを第26図に示す。井戸を中心として井戸を囲む石積み、何らかの作業を行う広場、排水溝が確認できる。SS5とSS6は階段状の構造をしており、石敷きに使用される石の大きさが異なることから、ある段階で増築されたことが想定できるが、どちらが先に構築されたかは不明である。SS5の一部に石敷きが残存していない部分があり、この部分は削平されたものか埋甕などがあったのかは不明である。SS5の階段部分とSS6の石敷きの接している部分は、階段石積みと石敷きの大きさが統一され、非常に意匠性が高いものとなっている。SS5の石敷きは多少凹凸が残存しているのに対し、SS6はかなり平坦である。井戸から水を汲み、作業後の水を排水溝に流し、水溜部分へと排水している。水溜部分の底部には石敷きがあることから、地面への自然排水ではなく、排水後の水も何らかの形で再利用していることが想定できる。井戸の内部は掘削を行っていないため、深度や構造形態などは不明である。



第26図 近世1-Bの遺構1

旧県立博物館跡地に所在していた移転後の中城御殿では、御殿で使用されていた井戸の写真が残されている（図版10上）。この写真と今回の遺構を見比べてみると、井戸の周りを囲む石積みの状況などが非常に類似している。このことからも、この水場遺構は移転直前まで使用され、井戸の構築方法などは移転先の中城御殿跡の井戸に引き継がれたものと考えられる。

1700年代に描かれる「首里古地図」にはこの水場遺構は描かれていない。この遺構は、SJ3（18世紀末）の上部に堆積された造成2上に構築されていることから、古くても18世紀末以降に創建された遺構である。この年代から考えると、「首里古地図」が描かれた年代が1700年前半であれば、描いた当時には水場遺構がなかったものと考えられる。1700年代後半に描かれている場合は、水場遺構を省いた理由などを検討する必要がある。後述するSS24（井戸広場跡）も「首里古地図」には描かれていない。周辺部にある井戸は描かれていることから、意図的に省略することは考えにくい。このように水場遺構のあった年代観や移転に加え、「首里古地図」の描かれた年代などを検討する上で非常に貴重な遺構である。

この水場遺構は確認当初から、現地保存の検討を行っていたことから、石敷きや井戸などの発掘は、断ち割り調査などを行わず、必要最低限に留めた。これらの遺構は全て現地に盛土保存している。

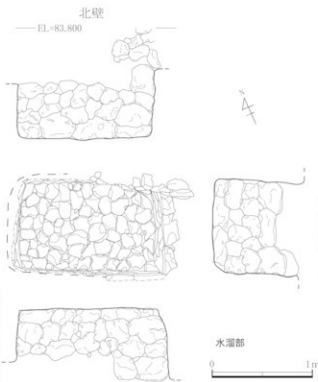
尚家の井戸（坂本万七撮影　日本民藝館 所蔵）

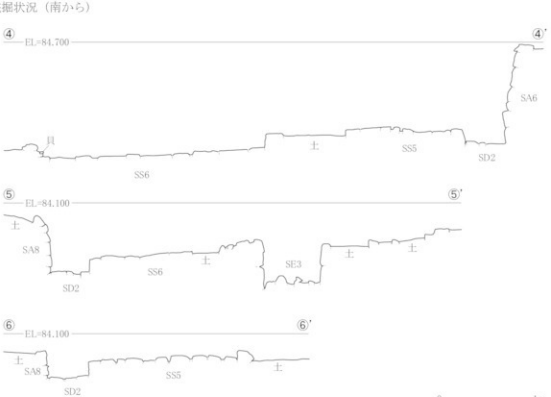
水場遺構 検出状況（南西から）

図版10 近世1－Bの遺構1

水溜部半裁断面（東から）

水溜部完掘状況（南から）





第27図 近世1-Bの遺構2

第28図 近世1-Bの遺構3

完掘状況（北から）①～①'

完掘状況（北から）③～③'

完掘状況（西から）⑦～⑦'

完掘状況（東から）⑨～⑨'

SS5 完掘状況（北から）

完掘状況（南から）⑪～⑪'

SD2東側 完掘状況（南から）

完掘状況（西から）⑮～⑮'

図版11　近世1－Bの遺構2

B：近世1－A、Bの遺物

近世1－A、Bの遺構からは、中国産陶磁器、沖縄産陶器類、本土産陶磁器類、明朝系瓦が出土している。SA4やSA7は上部に表土や撹乱層が堆積しており、上部からの混ざり込みも多く混入していた。SQ群や水場遺構は造成1で検出した遺構であるが、出土遺物は中国産青磁や中国産青花など古相の遺物が出土している。このような状況から、造成する際に別の場所から持ち込んでおり、その部分の遺物が混入したと考えられる。

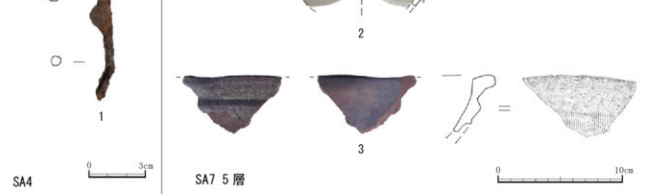
個々の遺物様相については第5表に記す。各遺物の参考文献等は本書末にまとめて記す。

第5表　近世1－A　出土遺物観察一覧a

挿図番号	遺物番号	種類	器種	分類	部位	法量（cm）			観察事項	出土位置	
						口径	器高	底径		遺構	層序
第29図	1	鉄製品	釘	－	完形	－	－	－	断面円形の釘。錆膨れが激しく、頭部形態など不明。	SA4	－
	2	中国産白磁	碗	－	口縁	13.2	－	－	口縁外反、玉縁状、内外面の一部釉剥ぎ。	SA7	5層
	3	沖縄産無釉陶器	擂鉢	－	口縁	－	－	－	口縁外側に広げ、口唇平坦に整形。11～12本の櫛目。外面口縁下部に一段設け、沈線が一部見られる。	SA7	5層

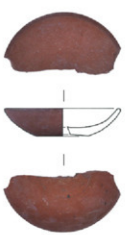
第5表　近世1－A　出土遺物観察一覧b

掘図番号 遺物番号		種類	器種	分類	部位	法量（cm）			観察事項	出土位置	
						口径	器高	底径		遺構	層序
第305図	4	明朝系瓦(灰色)	軒平瓦	–	瓦当	–	–	–	菊唐の文様が、片方不鮮明。上原：鎌系Ⅲb01～02式 石井：木曳Ⅲ	SA7	5層
	5	肥前産無釉陶器	灯明皿	–	口～底部	9.2	2.2	4.0	ロクロ整形。外底僅かに窪む。口縁やや外反。口唇成形し平坦。底部糸切り痕有り。	SA7	7層
	6	中国産青花	鉢	–	底部	–	–	7.6	高台施釉、高台～外底まで釉剥ぎ。畳付は僅かに三角形状に成形。内底中央部に釉が残存し、蛇の目釉剥ぎ。外面に文様。	SD6	1層
	7	中国産天目	碗	–	口縁	–	–	–	胎土灰白色、黒褐色釉。口縁直下に、外面口縁下部に僅かに残。内面口縁下部は露胎。	SD6	–
	8	肥前産施釉陶器	碗	–	口縁	–	–	–	外反口縁、透明感の強い釉が施釉される。	SD6	–
	9	陶質土器	火鉢	–	口縁	–	–	–	白化粧土を規則的に刷毛塗り、横線文状。口縁内側、口縁内部に器物をのせる突起を貼付。口唇～突起上部は煤付着。	SD6	–
	10	肥前産施釉陶器	鉢	–	口縁	–	–	–	ロクロ成形、口唇平坦に成形。胎土灰白色。灰オリーブ色釉。	SD6	–
	11	明朝系瓦(赤色)	軒丸瓦	–	瓦当	–	–	–	瓦当部凹ノ字成形。花芯周み(13本、文様は不鮮明。　上原：円覚Ⅲb01式 石井：内間御殿CorD	SM10	1層
	12	青銅製品	煙管?	–	–	–	–	–	円形の輪が連結。先端は青銅が挿び、輪が残存。	SM10	–
第311図	13	中国産青花	碗	–	口縁	12.8	–	–	ロクロ成形。口縁僅かに外反。外面に草花文?	SQ3	–
	14	陶製煙管	–	陶首雁型	雁首	–	–	–	八角形の雁首。幅広面取、僅かに研磨。陶首雁型（御内原分類）パイプ形/外無	SQ3	–
	15	中国産青磁	碗	V類	口縁	–	–	–	直口口縁、鏑刻連弁文。胎土は灰白色。釉はやや厚く、貫入あり。	SQ11	–
	16	中国産青花	皿	–	底部	–	–	5.2	蛸唐草、高台釉剥ぎ。内底連弁文内に文様。外面に唐草文。	SQ11	–
	17	中国産褐釉陶器	壺	5類	口縁	–	–	–	口縁部は断面方形状。胎土は緻密。口縁～頸部。	SQ11	–
	18	中国産青花	小皿	–	口～底部	8.0	1.9	5.0	外底部無釉で畳付部に釉有り。口唇、型成形。磁化窯系製品で19世紀代か?	SS8	–
	19	肥前産無釉陶器	甕	–	口縁	35.0	–	–	口縁方形状で口唇平坦に成形。口縁部及び肩部に沈線の横線を巡らせる。肩部には波状文様の一部が確認できる。	SS8	上層
	20	肥前産施釉陶器	鍋	–	口縁	13.0	–	–	口縁くの字状。把手の一部が残存。口縁内部は露胎。	SS8	下層
	21	陶質土器	灯明皿	–	底部	–	–	3.7	ロクロ成形。底部糸切り痕有り。内底部に煤付着。	SS8	下層
	22	中国産青花	碗	景徳鎮窯系(明末清初)	口～底部	10.9	6.3	4.5	型により口縁部を輪花形に成形する。芙蓉手文様を描く。畳付部は釉剥ぎ。口縁部は波状、内外面は6つの区画に分かれ、内面は同一意匠の文様だが、外面は各々別文様。内底及び外底にひび割れ有り。	SX2	4層
	23	ガラス製品	器種不明	–	口縁	–	–	–	口縁外反し、頸部が小、より肩部が張る器形。	SX34	–



第 29 図　近世 1-A の遺構出土遺物 1

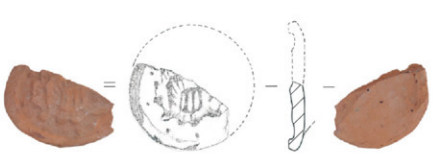
SA7 5 層



SA7 7 層　0　5cm

SD6 1 層　0　5cm

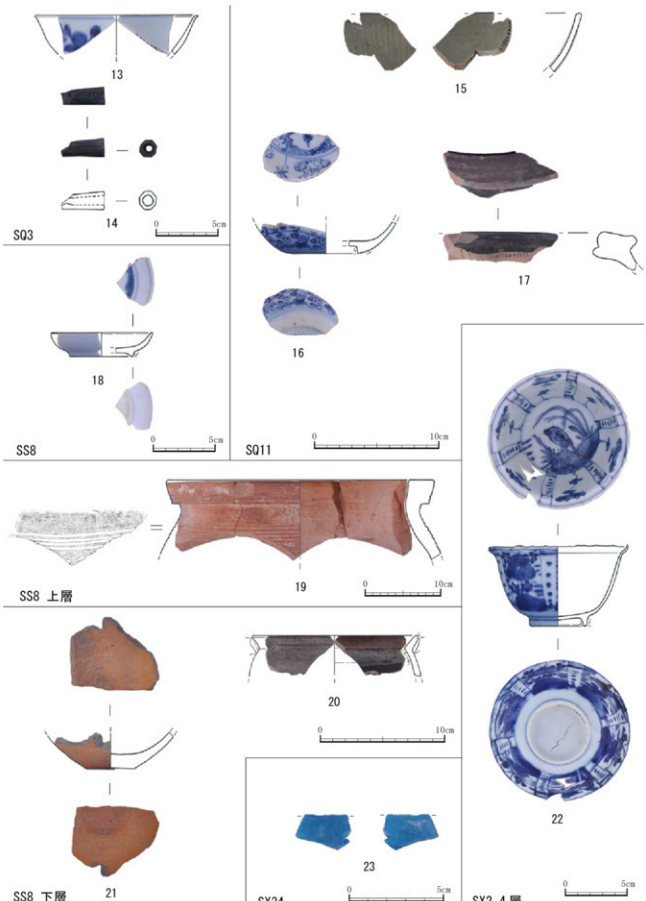
SD6　0　10cm



SM10 1 層

SM10　0　3cm

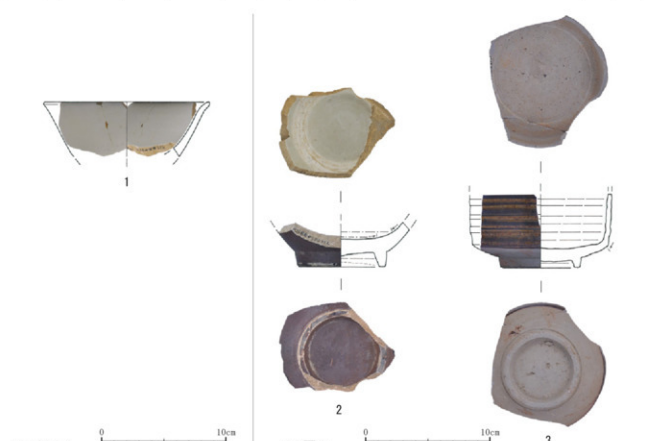
第 30 図　近世 1-A の遺構出土遺物 2



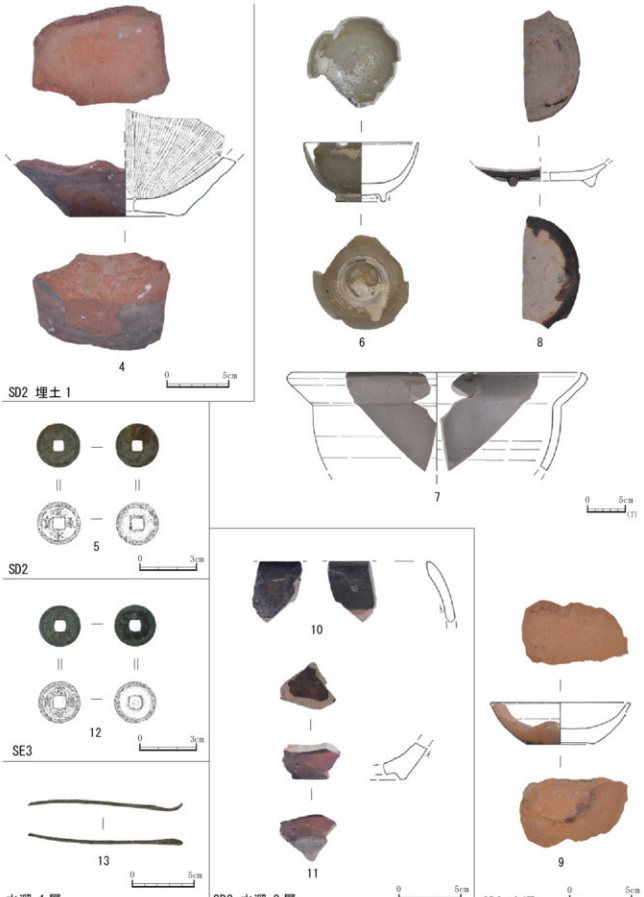
第 31 図　近世 1-A の遺構出土遺物 3

第6表　近世1-B　出土遺物観察一覧

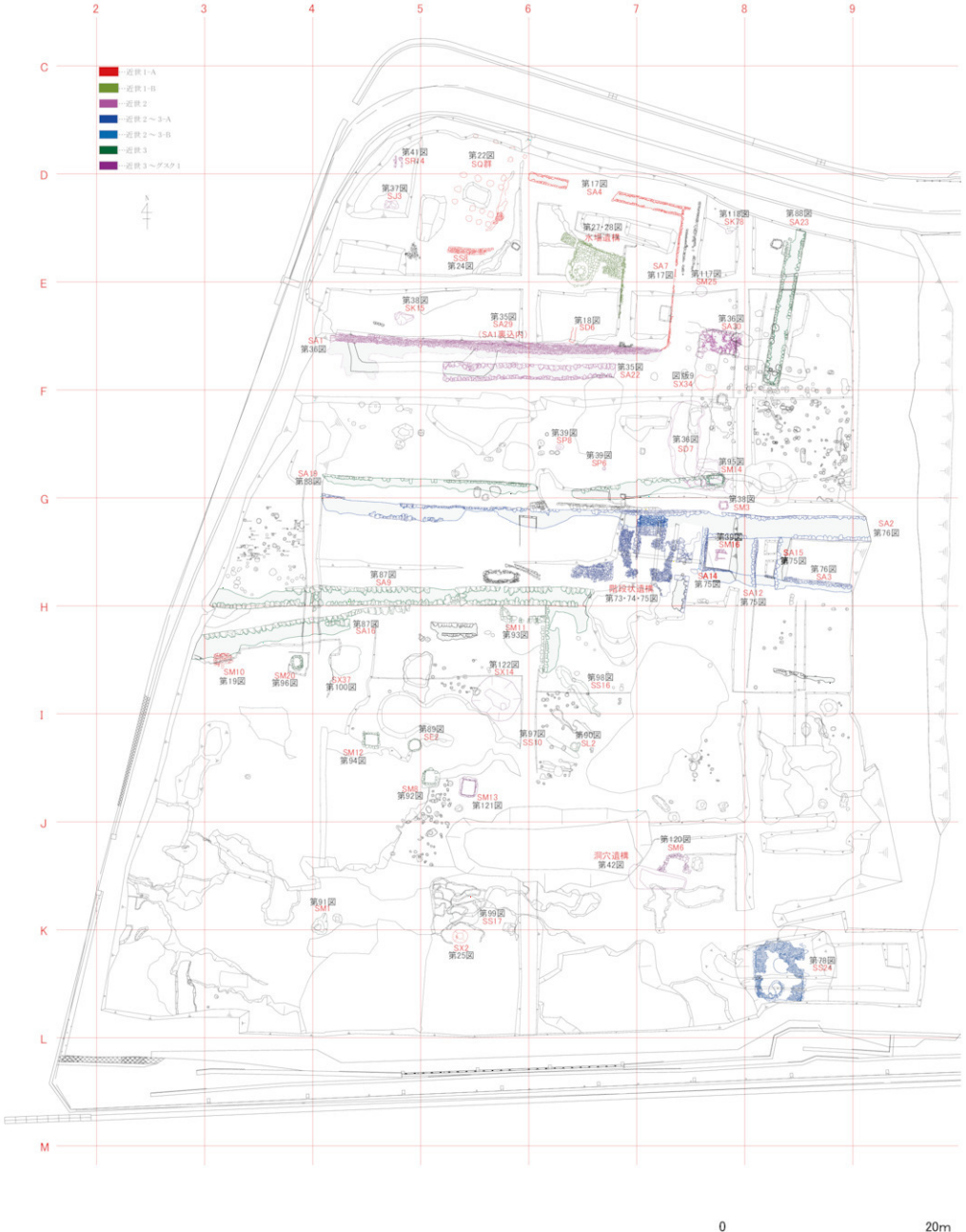
挿図番号 遺物番号		種類	器種	分類	部位	法量（cm）			観察事項	出土位置	
						口径	器高	底径		遺構	層序
第32図	1	沖縄産施釉陶器	碗	－	口縁	13.0	－	－	口縁外反し舌状。灰白色釉で貫入あり。	SD2	埋土1
	2	沖縄産施釉陶器	鉢	－	底部	－	－	6.9	外面灰赤色釉で施釉。貼付部は一部剥がれている。内面は白化粧土の上に灰白色釉を施釉。粒の目痕剥ぎ。	SD2	覆土
	3	沖縄産施釉陶器	火取	－	底部	－	－	6.2	外面腰部上部は褐色釉を施釉。内面及び外面腰下部は露胎。	SD2	覆土
第33図	4	沖縄産施釉陶器	植林	－	底部	－	－	9.6	内底全面に櫛目有り。外面一部施釉。外底部は凹凸している。	SD2	埋土1
	5	銭貨	－	（新）寛永通寶	－	－	－	－	寛永通寶。新寛永（3期：初鋳年1697）で背面無文。	SD2	－
	6	本土産陶器	碗	－	口～底部	9.0	4.7	4.0	ロクロ成形。施釉陶器。高台下部、貼付部の釉剥ぎ。底口口縁、内外面に灰白色の付着物が釉上に有り。	SD2	水溜
	7	沖縄産施釉陶器	甕	－	口縁部	40.0	－	－	ロクロ成形。頸部で屈曲し、その字状口縁。内面口縁は鍔縁状になる。	SD2	水溜
	8	沖縄産施釉陶器	急須	－	底部	－	－	6.2	内面露胎。外面腰部まで施釉。円錐形の脚が3か所残存。3脚のものと想定される。	SD2	水溜
	9	陶質土器	灯明皿	－	口～底部	11.0	3.3	5.2	内外面ともに煤粗している。外底部に煤が付着。口縁舌状。外底が窪む。	SD2	水溜
	10	沖縄産施釉陶器	火が	－	口縁	－	－	－	内湾口縁。内面胴部より下部は露胎。口縁から胴部へ丸み。口縁内部に強かに稜有り。	SD2	水溜2層
	11	沖縄産施釉陶器	壺	－	底部	－	－	－	底部から胴部にかけて外側に直線的に立ち上がる。腰上部から黒褐色釉を施釉。光沢がある。内面黒褐色釉で光沢少ない。	SD2	水溜2層
	12	銭貨	－	（新）寛永通寶	－	－	－	－	寛永通寶。新寛永（3期：初鋳年1697）で背面無文。	SF3	－
	13	骨製品	簪	－	カブ～竿	－	－	－	竿先端が欠損。カブ長2.2cm。竿本体は断面六角形。	－	水溜1層



第 32 図　近世 1-B の遺構出土遺物 1



第 33 図　近世 1-B の遺構出土遺物 2



第34図 各遺構（近世1、近世2、近世2～3、近世3、近世3～グスク1）

第２項　近世2（18世紀代）

A：遺構

SA1（SA1・29）、SA22、SA29

Ⅰ区とⅢ区の境目で検出された3列の石積み遺構で、東西方向に延びる石積みである。根石には約40㎝前後大の石材を使用し、石積みに用いられる石材は約20㎝前後大で、根石と石積みでは使用する石材の大きさが異なる。SA1の根石表面には僅かに凹凸が残るが、根石以外の部分は滑らかに成形されている。根石は造成土に埋まった状態で露出しておらず、それ以外の部分は露出しているため、成形方法が異なることが考えられる。SA1の一部には天端の上に積み増し部分が確認できることから、本来は現存より高さのある石積みだったと考えられる。

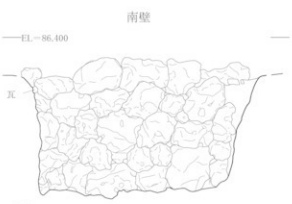
SA1 検出状況（北東から）

図版12　近世2の遺構

SA1は東西に延びる石積みだが、東側部分と西側部分では根石の築造される造成土が異なる。第36図は第5図③5ラインと④6ライン部分の拡大図である。第5図　③5ラインセクション図のSA1部分は、造成2上に根石が構築される。第5図　④6ラインセクション図のSA1部分は造成4上に根石が構築されている。この様相を基に立面図を見ると、西側の一部分から石の積み方が異なり、積み直し等があったことが判明した。

SA1とSA22の断ち割りを行った部分の堆積状況から両石積みの構築状況を観察すると、SA1の根石部分は造成4上に根石を構築している。その後造成を行い、SA22の根石とSA29の根石が構築される。SA22の石を1段積むと、その石の高さに合わせて造成を行っているため、調査時に観察した分層線と石の下部がほぼ同一層となる。この時、裏込を入れ、その部分に土を入れる方法を用いて、造成を行っている。この間、SA1も構築を進め、一度平坦部を設ける。この平坦部とSA1立面の積み直しが行われている部分の石積み目地が整合することが確認できる。その後、さらに上部へ石積みを行ったと想定できる。このような構築状況から、SA1はⅢ区とⅠ区の境目にあり、当地区の高低差を支えるための石積みだと考えられる。Ⅲ区は約2mの造成土が堆積しており、相当量の土圧がかかることが想定される。そのためSA22は大型の石を荒積みし、表面加工は行っていない。SA1内部で土圧を吸収するための役割を担っている。SA29はSA1の裏込中に検出されたもので、SA1を支える役割が想定できる。最後にSA1の石積みを構築し、表面を丁寧に加工している。以上のことから、SA22は中城御殿跡の階段状の屋敷配置を支えるための役目で、表面露出しているSA1は表面が丁寧に成形されることから、装飾性の高さを保つという役割を担っている。支え石積みと装飾性を保つという両方の技術を合わせて導入していることが考えられる。これらの石積みを構築する造成2及び造成4はSA2の前面部分まで広がることが調査中に確認できた。このことから、SA1を境として階段状の屋敷構造であったことの根拠とした。

SA1は「首里古地図」に描かれている北側石積みの一部だと考えられる。この石積みを境にして屋敷配置が異なることが判明したこともその根拠となるが、SA1の最西部に加工された切石を検出したため、この切石部分の西側には石積がなかったことが判明している。「首里古地図」でも当該部分に道のようなものが描かれることから、この部分を表現していると想定できる。しかしながら、「首里古地図」では中城御殿を南北に区画するように東端から西端まで延びる石積みが描かれるが、SA1は途切れており、東側部分は判然としない状況だった。SA1の東側部分では、根石が斜めに積まれてい



第35図 近世2の遺構1

SA29 立面（北西から）

SA22 立面　（北から）

SA22 立面　（南から）

SA1・SA22 平面（西から）

る状況から、地面の高さに合わせて積んだことが考えられる。また、東側部分には中城御殿の造成土が比較的良好に堆積していることから、発掘調査の成果からは、後世の削平などで途切れている状況を確認することは出来なかった。この部分の解釈については、調査中に解決できなかったことから、検討課題としている。

SA30

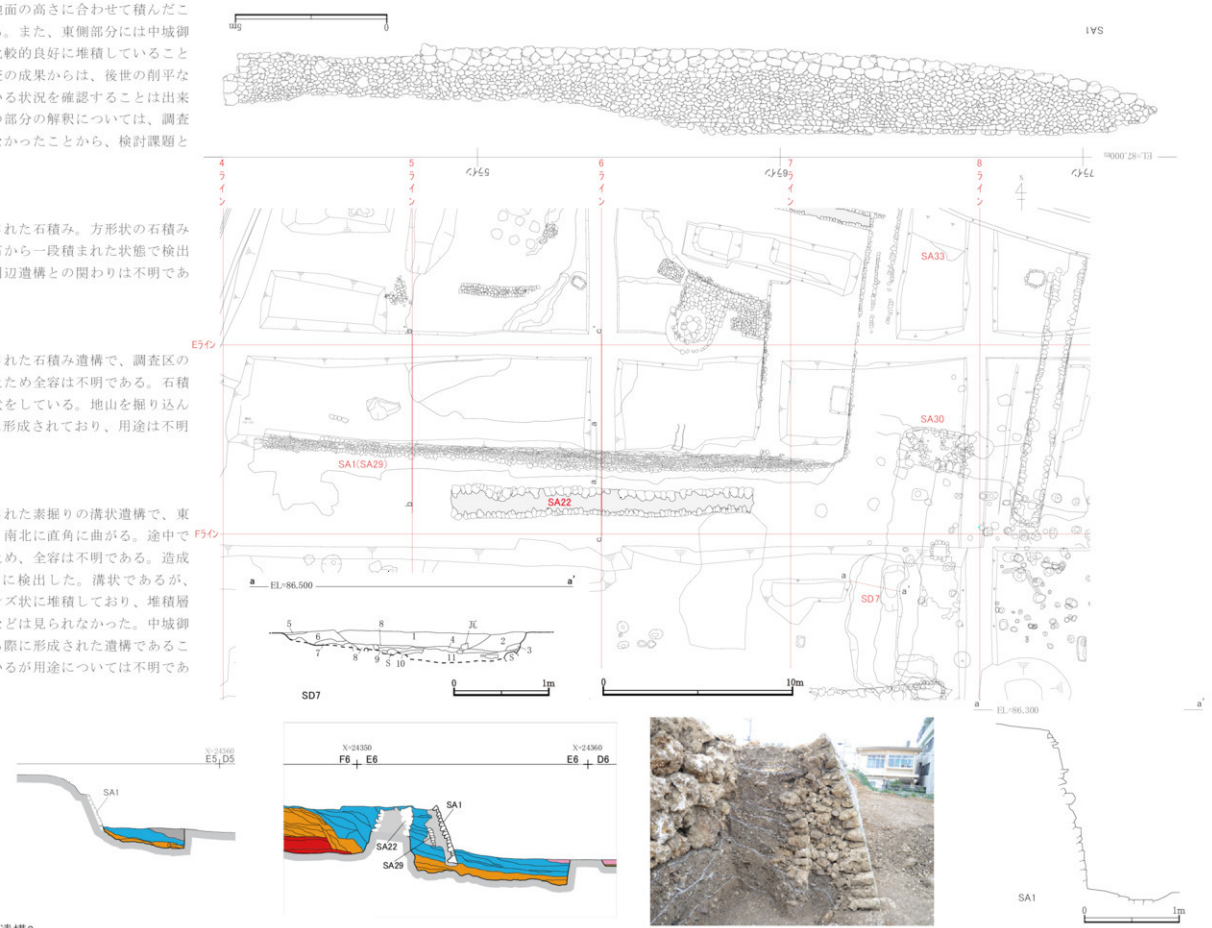
Ⅱ区で検出された石積み。方形状の石積みで、根石や根石から一段積まれた状態で検出されている。周辺遺構との関わりは不明である。

SA33

Ⅱ区で検出された石積み遺構で、調査区の端で検出されたため全容は不明である。石積みが崩れた形状をしている。地山を掘り込んだSK78の上部に形成されており、用途は不明である。

SD7

Ⅲ区で検出された素掘りの溝状遺構で、東西に延びた後、南北に直角に曲がる。途中で途切れているため、全容は不明である。造成2を掘削する際に検出した。溝状であるが、その堆積はレンズ状に堆積しており、堆積層にラミナ構造などは見られなかった。中城御殿跡を造成する際に形成された遺構であることは判明しているが用途については不明である。



第36図 近世2の遺構2

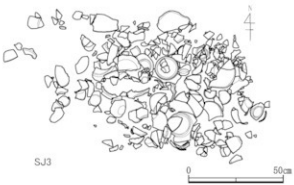
SA1 西端部検出状況（西から）

SA30 検出状況（西から）

SA33 検出状況（南から）

SA1・SA29 裏込堆積状況（東から）

SD7 セクション南壁



第37図 近世2の遺構3

SJ3

中国産陶磁器をはじめとする食器類が廃棄された遺構である。造成4を掘削中、地山に近い部分で検出した。調査当初は、地面に穴を掘り、そこに食器類を廃棄したと想定したが、平面検出時には、明確な掘り込み面は確認できなかった。SJ3は、陶磁器類のみが堆積し、非常に薄い堆積であったため、地表面にそのまま廃棄したことが想定される。遺物取り上げ時に、第70図218のガラス製品が出土した。このガラスは陶磁器の下部から出土しているため、上部からの混入ではなく、同時期に廃棄されたと判断した。廃棄年代は陶磁器の出土様相から18世紀後半頃と想定でき、遺物の詳細は第7表に記述している。

廃棄されている陶磁器の器種組成を見ると、碗、皿などの日常雑器に始まり、大皿などが出土している。供膳具は中国産、日本産の陶磁器が占めている。沖縄産の陶器も出土しているが、灯明皿、火取など器種が限られる。大型の製品や貯蔵具については出土していない。

SJ3を検出した部分は、造成2及び造成4がそれぞれ堆積する場所で、造成4を掘り込み、造成2が堆積している。この遺構の検出状況から、造成2と造成4を判別する根拠とした。造成4に構築される遺構、造成2に構築される遺構がそれぞれ確認できることからこの判別は妥当性がある。このことからSJ3の陶磁器類は、造成の境目の段階で廃棄されたものではなく、造成作業中に廃棄されたことが判明した。そのため廃棄された陶磁器類がパックされた状況で残存しており、造成2の造成時期を示すと考えられる。

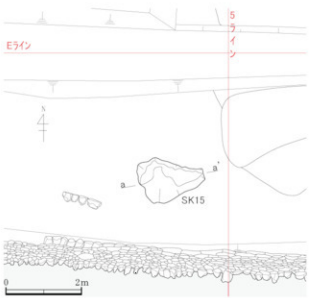
SJ3 検出状況（南から）

SJ3 半裁状況（北から）

SJ3 遺物出土状況

SK15

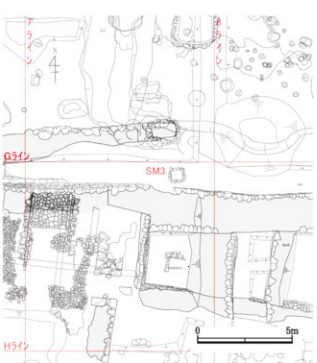
ニービ質の砂質土が体積している遺構。薄い体積で下部からは造成土の一部が確認できる。用途は不明である。

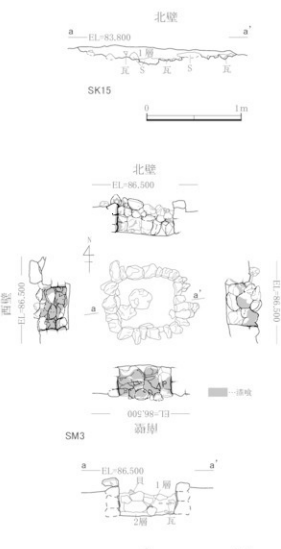


SK15 半裁状況（北から）

SM3

SA2東側の北側で検出した遺構。床面に敷石などはないが、石積み部分には表面に漆喰が貼り付けられている。遺構内部には石灰岩礫が多く混入していることから、廃棄時に短時間で堆積したと考えられる。水に関係する遺構と考えられるが、床面が素掘りであることから水溜とは考えにくい。一時的に汚水を排水するための施設である可能性がある。





第38図 近世2の遺構4

SM3 完掘状況（南から）

SM3 半裁状況（南から）

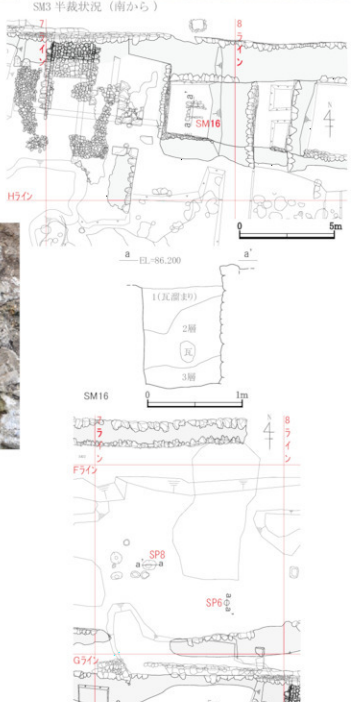
SM16

SA2・13・14に囲まれる部分に検出した石積土坑である。上部から下部に至るまで造成土の土と同様な堆土であるため、ある時期に一度に埋められた可能性がある。床面は素掘りであることから排水を目的とした遺構である可能性が高い。SA2・13・14が築造された際に機能が終了したと考えられる。

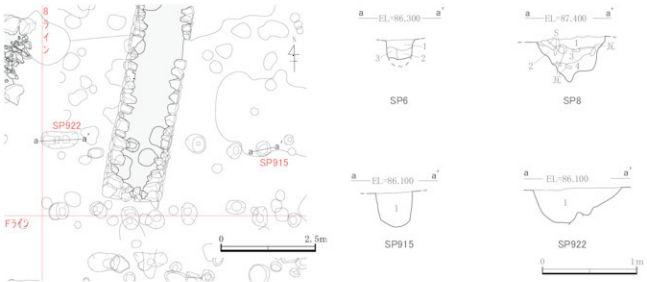
SM16 半裁状況（南から）

SP6・8・915・922

造成土中に検出した柱穴跡である。柱痕跡が見られるものもあれば、ほとんど確認できないものもある。埋土は炭、マージ粒、石灰粒などを多く混入し、造成土と同様な土である。数多く検出されたが、建物が想定できる部分はⅡ区の一部のみであった。SP6・915は柱穴の形状を保っているが、SP8・922は底部にくらべ検出部が大きく開いている。柱を抜く際に上部が崩れた可能性がある。



第39図 近世2の遺構5



第40図 近世2の遺構6

SP6 半裁状況（東から）

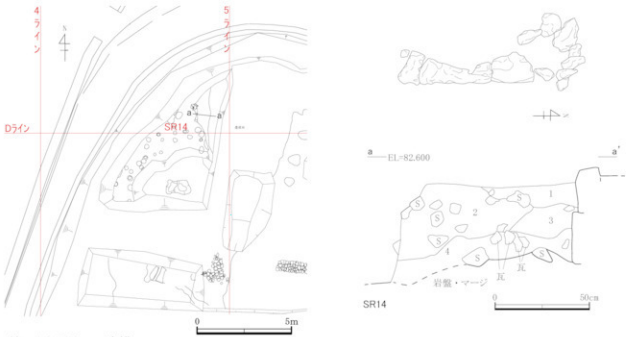
SP8 半裁状況（北から）

SP922 半裁状況（北から）

SP915 半裁状況（北から）

SR14

地山面と岩盤上に検出した石積み。わずかに石積みがカーブしていることが確認できるが、一部分の残存のみであるため、全形や用途等については不明である。



第41図 近世2の遺構7

SR14 検出状況（東から）

SR14 堆積状況（北から）

洞穴遺構

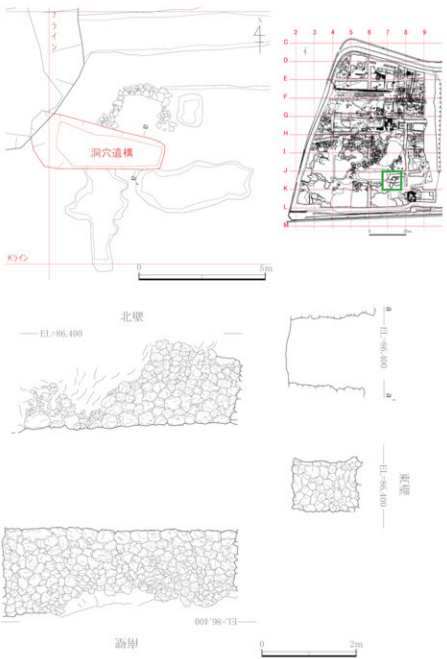
Ⅴ区とⅥ区境目で検出した遺構。安全確保のため、天井を掘削しながら発掘調査を進めると、洞穴内部にはクチャ混じりの非常に粘性の強い土が堆積していた。遺物の混入はなく、わずかに貝類遺体などが確認できるのみであった。

洞穴側面はクチャを掘り込み、石積みが形成されている。裏込はわずかに確認できるのみである。洞穴奥部にも石積みがあり、ここで洞穴部分は完了している。調査時に確認した東側洞口も一部に石積みが残存していたが、洞穴西奥は閉じられていることから、おそらく使用時もこの部分が洞口部分であったと想定される。

この遺構は地下に深く掘り込む形であるため残存しており、周囲に関連する遺構は確認できない。そのため、この遺構は当時から地下に向かう形で使用されていたと考えられる。洞穴奥部の石積みの奥にもわずかに隙間が確認できた。

この遺構は調査時にも水が多く溜まっており、排水しながら調査を行った。クチャを掘り込んだ人

工的な洞穴であるため、周辺の石灰岩とクチャの隙間から水が集まる。当時から水溜の施設として使用していたことが考えられる。水が溜まっている状況であるため、遺物の混入も少なく、内部に堆積していた土も長い時間をかけて堆積したものと考えられる。



第42図 近世2の遺構8

洞穴 検出状況（西から）

洞穴 検出状況（北西から）

B：遺物

近世2の遺物は、中城御殿が機能していた中心時期の遺物が出土している。特にSJ3からの遺物出土は18世紀末の遺物組成を示し、本遺跡の時期様相を特定する遺構となっている。

個々の遺物様相については第7表に記す。各遺物の参考文献等は本書末にまとめて記す。

第7表　近世2　出土遺物観察一覧a

挿図番号	遺物番号	種類	器種	分類	部位	法量（cm） 口径	器高	底径	観察事項	出土位置 遺構	層序
第43図	1	中国産青花	碗	—	口縁	—	—	—	口縁が外反し、口唇部は平坦で圏線が巡る。	SA1・29	—
	2	本土産陶器	碗	陶器碗 Ⅲ～Ⅳ類	底部	—	—	4.8	高台内面をやや丸く削る。高台内の深さが高台脇とほぼ同じ。畳付は平坦。肥前産か？（17末～18）	SA1・29	—
	3	沖縄産無釉陶器	擂鉢	—	口縁	—	—	—	口縁内面から口唇部にかけて丸みをもち、外面口縁下部に稜をもつ。片口部が一部残存。内面櫛目は4本前後。	SA1・29	—
	4	初期沖縄産無釉陶器	壺	—	口縁	26.6	—	—	口縁は断面方形状。胎土の粒子及び内面稜の痕跡から、一度外面に折り曲げ、再度内面に折り返して口縁成形。口唇平坦で擦痕有り。胎土に石英粒が混入。口縁から胴部にかけて膨らむ。	SA1・29	—
	5	中国産青花	碗	—	口縁	13.2	—	—	徳化窯。外面胴部に丸文及び草文？見込みに圏線。	SA1	造成2
	6	中国産青花	碗	—	底部	—	—	6.3	徳化窯。高台が高く、畳付は釉剥ぎ。腰部には簡略した蓮弁、胴部には雲文か？見込みには圏線。	SA1	造成2
	7	中国産瑠璃釉	小杯	—	口～底	9.1	4.2	4.6	外面全面に瑠璃釉、内面透明釉。口禿。高台内はやや丸みをもつ。型打ち成形か？	SA1	造成2
第44図	8	本土産染付	碗	磁器碗・小杯 Ⅳ期	底部	—	—	2.9	高台が小型で畳付は釉剥ぎ。内面見込みに圏線、花文。底部から胴部にかけて丸みを持ち、立ち上がる。（1710～1750）	SA1	造成2
	9	本土産陶器	皿	陶器皿 Ⅳ期	口～底	13.2	3.9	4.8	高台内は段を設けるように削る。畳付は平坦。外面には施釉の可能性がある痕跡が見られるがほぼ露胎に近い。内面は銅緑釉で見込みは釉剥ぎ。釉剥ぎ部には砂目の付着なし。（1690～1780）	SA1	造成2
	10	沖縄産施釉陶器	火取	—	口縁	11.0	—	—	内彎口縁。内面露胎。波打つ器形。	SA1	造成2
	11	本土産陶器	急須	—	底部	—	—	5.9	外底が窪む形態。外面腰部には施釉。内面にはロクロ痕が顕著に残る。胎土は灰黄色系で白色粒を多く含む。	SA1	造成2
	12	沖縄産施釉陶器	碗	池田 Ⅲ類	口～底	13.5	6.0	6.6	高台断面逆台形状で畳付部は平坦。直線的に口縁までのびる。フィガケ技法。見込みに重ね焼き痕。高台付近に耐火土。灰釉碗。（池田：Ⅲ類）	SA1	造成2
	13	沖縄産施釉陶器	碗	—	口縁	13.1	—	—	直口口縁。灰釉碗。	SA1	造成2
	14	沖縄産施釉陶器	小鉢	—	口縁	7.2	—	—	直口口縁で腰部が折れる器形。外面腰部以下は露胎。	SA1	造成2
	15	沖縄産施釉陶器	鉢	—	口縁	24.4	—	—	外側に開く器形で玉縁口縁。	SA1	造成2
	16	沖縄産施釉陶器	鍋	—	口縁	14.3	—	—	口縁くの字状で把手貼付。内面口縁から頸部まで露胎。ロクロ痕が顕著に残る。	SA1	造成2
	17	沖縄産施釉陶器	急須	—	口～底	4.9	6.7	4.6	外底が窪み、胴部が丸みをもち、口縁にかけてすぼむ器形。外底から腰部は無釉で被熱痕が見られる。内面口縁～頸部は露胎。口唇は平坦。外面には雨垂文や印花文。	SA1	造成2
第45図	18	沖縄産施釉陶器	蓋	—	—	大 6.6 小 5.0	—	—	外面施釉、内面は露胎。袴部が底部より長く、薄手。	SA1	造成2
	19	沖縄産無釉陶器	鉢	—	口縁	34.1	—	—	口縁逆L字状の鉢。口唇上面に2条の沈線。内外面にロクロ痕。	SA1	造成2
	20	沖縄産無釉陶器	擂鉢	—	口縁	—	—	—	ロクロ成形で口縁断面三角形。片口の擂鉢。10本前後の櫛目あり。胎土がポーラス状。	SA1	造成2
	21	沖縄産施釉陶器	火炉	—	口縁	9.2	—	—	口縁玉縁上で内彎する。内面頸部以下は露胎。	SA1	造成2
	22	明朝系瓦（灰色）	軒平瓦	—	瓦当	—	—	—	笵バリが一部に残る。文様が全体的に不鮮明。（近世1：4と同一笵の可能性がある）上原：御茶ⅢB01～02式 石井：木曳門B	SA1	造成2
	23	明朝系瓦（灰色）	軒丸瓦	—	瓦当	—	—	—	笵バリが一部に残る。上原：浦城ⅠBa01式　石井：浦添城C	SA1	造成2
	24	明朝系瓦（灰色）	軒丸瓦	—	瓦当	—	—	—	笵バリ丁寧に成形。上原：ⅠBb式系　石井：内間御殿A	SA1	造成2
	25	明朝系瓦（灰色）	軒丸瓦	—	瓦当	—	—	—	笵バリ丁寧に成形。上原：ⅠBb式系　石井：内間御殿A	SA1	造成2
第46図	26	明朝系瓦（赤色）	軒丸瓦	—	瓦当	—	—	—	笵バリが一部に残る。上原：Ⅲa～b式系　石井：内間御殿C～E系	SA1	造成2

第7表　近世2　出土遺物観察一覧b

挿図番号	遺物番号	種類	器種	分類	部位	法量（cm）			観察事項	出土位置	
						口径	器高	底径		遺構	層序
第46図	27	骨製品	不明	―	―	―	―	―	2条沈線で区画を作成し、区画内に円文様と沈線を組み合わせた舟がモチーフの文様が3つ彫られ、中心文様は逆向き。端部文様のモチーフは不明。全体的に研磨されている。機能・用途は不明。	SA1	造成2
	28	鉄製品	釘	―	―	―	―	―	先端部が尖り、釘頭は欠損。	SA1	裏込
	29	鉄製品	釘	―	―	―	―	―	釘頭部が残存しているが、錆膨れにより形状不明。	SA1	造成2
	30	本土産陶器	碗	京焼？	口縁	10.8	―	―	胎土灰白色で緻密。透明釉で貫入あり。直口口縁。	SA1南	造成2
	31	本土産染付	皿	―	口縁	―	―	―	外面無文。内面見込みに圏線、口縁上部に圏線、その内部に縦線文を描く。	SA1南	造成2
	32	本土産陶器	鉢	―	口縁	―	―	―	内彎する口縁。器高の低い製品と考えられる。内外面施釉。	SA1南	造成2
	33	中国産青花	碗	―	底部	―	―	7.8	腰部が折れる筒形碗。畳付部は釉剥ぎされ、砂目付着。外面に文様描かれるが詳細は不明。	SA1南	造成2
	34	初期沖縄産無釉陶器	急須	―	口縁部	9.2	―	―	口縁部に蓋受を設ける。内面無釉で注口部は貼付。外面は泥釉が施される。	SA1南	造成2
	35	沖縄産無釉陶器	壺	―	口縁部	13.2	―	―	口縁断面は玉縁状。口縁は外側に一度折り曲げて成形。口唇部に重ね焼きの痕跡あり。	SA1南	造成2
	36	明朝系瓦（灰色）	軒丸瓦	―	瓦当	―	―	―	笵バリ残る。上原：ⅠBb式系　石井：内間御殿A	SA1南	造成2
第47図	37	本土産陶器	皿	陶器皿Ⅳ期	底部	―	―	4.7	外面全体に施釉し、畳付は釉剥ぎし平坦に成形。内面見込みは蛇の目釉剥ぎ。釉剥ぎ部には砂目の付着なし。	SA1	造成4
	38	明朝系瓦（灰色）	軒平瓦	―	瓦当	―	―	―	笵バリ丁寧に成形。上原：天界ⅢBa02式　石井：湧田古窯Q系	SA1	造成4
	39	中国産青花	碗	―	底部	―	―	6.6	外面高台脇まで施釉。畳付部は高台内側に向けて逆三角形状。内面見込みは蛇の目釉剥ぎ。釉剥ぎ部に重ね焼き痕あり。	SA1	裏込
	40	沖縄産無釉陶器	皿	―	底部	―	―	8.2	ロクロ成形。大型の皿。高台が低く、外底にかけてわずかに窪む。	SA1	裏込
	41	沖縄産無釉陶器	壺	―	底部	―	―	11.0	底部から胴部にかけてわずかに外側へ開き、直線的に伸びる器形。底部脇に沈線1条巡る。	SA1	裏込
	42	明朝系瓦（赤色）	軒平瓦	―	瓦当	―	―	―	笵バリ丁寧に成形。瓦当中心部が欠損している。上原：ⅢBa系？　石井：湧田古窯Q系？	SA1	裏込
	43	中国産青花	皿	―	底部	―	―	5.8	高台逆三角系状で畳付釉剥ぎ。浅い高台。高台内に圏線。内面見込みに寿字文、唐草文など。高台脇にとびかんな痕。	SA1	―
	44	陶製煙管	煙管	陶首Ⅲ類	雁首	―	―	―	八角形の煙管。幅広面取、研磨。材質は沖縄産無釉陶器	SA1	―
	45	石製品	石盤	―	側縁部	―	―	―	石材：粘板岩。表裏・側面研磨整形。表裏は使用に伴う主に長軸方向の線条痕無数。	SA22	造成1
第48図	46	中国産青磁	碗	Ⅶ類	口縁	―	―	―	口縁断面が丸みを帯び、口縁外面に波状文。釉薬浅黄色。	SA22	造成2
	47	中国産青磁	碗	Ⅴ類？	底部	―	―	5.4	釉の発色悪い。釉薬全面に施釉後、高台内蛇の目釉剥ぎ。	SA22	造成2
	48	中国産青花	碗	―	口縁	―	―	―	口縁外反し、薄手つくり。外面草花文、内面口縁上部に上下を横線で区画、その中に唐草文？	SA22	造成2
	49	中国産青花	碗	―	底部	―	―	―	高台脇から畳付部は釉剥ぎ。高台高く、外底内は浅い造り。内面見込みに圏線。内外面に文様あるが、全体像は不明。	SA22	造成2
	50	中国産青花	小杯	―	底部	―	―	3.0	畳付を厚くつくり、内側へやや傾斜するように成形。	SA22	造成2
	51	本土産染付	皿	―	底部	―	―	9.4	高台先端断面逆三角形状、高台内蛇の目釉剥ぎ。波縁皿。	SA22	造成2
	52	中国産青花	小鉢	―	底部	―	―	―	景徳鎮窯産で祥瑞。外面に騎馬人物文。明末（1630‐1640）	SA22	造成2
	53	本土産陶器	碗	―	底部	―	―	4.0	外面腰部まで施釉。畳付は平坦で外底内に向けて高台傾斜。見込みは蛇の目釉剥ぎ。	SA22	造成2
	54	本土産陶器	碗	―	底部	―	―	3.8	外面腰部まで施釉。高台脇に砂付着。高台部貼付成形。	SA22	造成2
	55	沖縄産施釉陶器	碗	池田Ⅰ類	底部	―	―	6.0	高台断面逆台形状、外面腰部に抉りあり。フィガケ技法。内面重ね焼きの砂？付着。灰釉碗（池田：Ⅰ類）	SA22	造成2
	56	沖縄産施釉陶器	碗	池田Ⅴ類	口縁	―	―	―	口縁外面に鉄絵描く。フィガケ技法。灰釉碗（池田：Ⅴ類？）	SA22	造成2

第7表　近世2　出土遺物観察一覧c

挿図番号	遺物番号	種類	器種	分類	部位	法量（cm）			観察事項	出土位置	
						口径	器高	底径		遺構	層序
第48図	57	沖縄産施釉陶器	鉢	―	口縁	―	―	―	口唇平坦に成形。口唇の内外面の端部は釉が剥がれかけている。	SA22	造成2
第49図	58	沖縄産施釉陶器	壺	―	底部	―	―	8.6	外面腰部まで施釉、一部畳付にも釉あり。畳付は平坦で重ね焼きの砂付着、一部では擦痕あり。見込みにも砂？付着	SA22	造成2
	59	沖縄産施釉陶器	器種不明	―	底部	―	―	5.0	高台先端断面逆台形状。畳付釉剥ぎでわずかに丸みを帯びる。光沢のある褐色釉が厚く施釉。	SA22	造成2
	60	沖縄産施釉陶器	蓋	―	撮～袴	大 5.6 小 4.0	―	―	外面施釉。撮み周囲に2条沈線が巡り、その周囲に三角形状に沈線。その内部を沈線で充填。撮み器部に孔あり、内側から穿孔、孔内側にも施釉。	SA22	造成2
	61	沖縄産無釉陶器	鉢	―	口縁	20.4	―	―	胴上部に張りをもつ器形で、波状文。	SA22	造成2
	62	沖縄産無釉陶器	鉢	―	口縁	26.4	―	―	口縁断面が逆L字状。口唇上部に浅い2条沈線。	SA22	造成2
	63	沖縄産無釉陶器	擂鉢	―	口縁	―	―	―	片口擂鉢。櫛目は10本前後。片口部は指ナデ成形。	SA22	造成2
	64	沖縄産無釉陶器	壺	―	口縁	24.0	―	―	口縁断面方形状。口唇平坦に成形。口唇一部に重ね焼き痕。	SA22	造成2
	65	沖縄産無釉陶器	壺	―	底部	―	―	6.6	外底部から腰部にかけて、重ね焼きの砂が溶着？外底に2条の太い沈線。見込みロクロ痕が顕著に残る。	SA22	造成2
	66	沖縄産無釉陶器	甕	―	口縁	―	―	―	口縁断面逆台形状。口唇上部に1条沈線が巡る。口縁上部に3条沈線を掘り、3条の突起状横線が巡る。やや間隔をあけて2条沈線を掘り、1条の突起横線。その間に丸文を貼付。	SA22	造成2
	67	初期沖縄産無釉陶器	火取	―	底部	―	―	―	腰部から外底にかける部分を面取。外底部に円錐形の脚を貼付。外面腰部まで施釉し、その下部は釉剥ぎ。胎土に白色粒が混入。	SA22	造成2
	68	沖縄産無釉陶器	火炉	―	口縁	―	―	―	口縁がくの字状に折れ、台形状の横耳を貼付、中央に穿孔。上面観は半円形状の空き窓がいくつか配置される。	SA22	造成2
	69	鉄製品	釘	―	―	―	―	―	先端部のみ残存。	SA22	造成2
	70	鉄製品	釘	―	―	―	―	―	先端部のみ残存。	SA22	造成2
	71	鉄製品	釘	―	―	―	―	―	先端部のみ残存。	SA22	裏込
第50図	72	中国産青花	碗	―	底部	―	―	6.6	外面施釉、畳付は釉剥ぎ。高台先端断面逆台形状で高台内側のみ接地面。見込み蛇の目釉剥ぎで重ね焼き痕あり。	SA22	裏込
	73	中国産青花	碗	―	底部	―	―	8.0	口縁断面が逆三角形状で先端部のみ接地面。内外高台脇及び畳付は露胎。見込み蛇の目釉剥ぎで釉剥ぎ部には重ね焼きの砂付着。	SA22	裏込
	74	本土産陶器	器種不明	関西系（信楽焼？）	胴部	―	―	―	胎土に大～小の砂粒が混入。	SA22	裏込
	75	初期沖縄産無釉陶器	鉢	―	口縁	―	―	―	口縁断面方形状。口唇部に刻文？肩部に波状文。	SA22	裏込
	76	鉄製品	釘	―	―	―	―	―	頭部は角状。断面は方形。	SA22	―
	77	中国産青花	皿	―	底部	―	―	8.0	高台先端断面逆台形状で畳付は釉剥ぎ。畳付部に砂付着。見込み部は釉剥ぎで重ね焼きの砂付着。	SA29	造成2
	78	中国産青花	碗	―	底部	―	―	5.4	饅頭心型の碗。高台薄く畳付部は釉剥ぎ。見込みに草花文。（16世紀後半）	SA30	―
	79	中国産青花	碗	―	底部	―	―	5.6	畳付及び付近は釉剥ぎ。腰部には簡略化した蓮弁文。見込みに圏線。高台内に圏線。	SA33	裏込
	80	中国産色絵	大皿	―	胴部	―	―	―	いっちん技法。内面（餅花手）で草花文描く。外面にはロクロ痕が残る。	SA33	裏込
	81	本土産陶器	碗	―	底部	―	―	4.4	口縁断面逆台形、高台内は削りで2段設ける。畳付部は平坦に成形。	SA33	裏込
	82	沖縄産無釉陶器	鉢	―	口縁	27.6	―	―	口縁断面逆L字状。口唇上部に1条の沈線巡る。	SA33	裏込
	83	中国産青磁	皿	V類	底部	―	―	5.4	外面全面に施釉し、高台内は蛇の目釉剥ぎ。波縁の碗。見込みには菊花の印花文。	SA33	―
	84	中国産青磁	皿	―	底部	―	―	5.2	外面全面施釉、高台内は蛇の目釉剥ぎ。外面細刻蓮弁文、内面蓮弁文。見込みに印花文。	SA33	―
第51図	85	中国産白磁	小碗	―	口縁部	9.0	―	―	口縁外反する薄手作りの小碗。口禿。外面に白盛りで草花文。	SD07	―
	86	中国産白磁	小杯	―	口～底	8.4	4.3	3.6	型作りの白磁。内底から畳付まで透明釉を施釉し、口唇部は釉剥ぎ。高台先端断面逆三角形状。外底露胎で型押しのシワが残る。（19世紀代？）	SD07	―

第7表　近世2　出土遺物観察一覧d

挿図番号	遺物番号	種類	器種	分類	部位	法量（cm）			観察事項	出土位置	
						口径	器高	底径		遺構	層序
第51図	87	中国産青花	碗	－	口～底	10.0	5.0	4.6	全面施釉後、畳付は釉剥ぎ。外面に鳳凰文、菊花文。見込みに圏線、文様あり。	SD7	－
	88	中国産青花	碗	－	口～底	12.4	5.6	5.2	全面施釉後、畳付は釉剥ぎ。外面に梵字文。	SD7	－
	89	中国産青花	鉢	－	底部	－	－	7.0	外面腰部まで施釉。高台先端断面は逆台形状で高台内側は外側より削る。畳付先端は逆三角形状で先端部が接地面となる。内面は露胎で重ね焼き痕残る。	SD7	－
	90	中国産色絵	碗	－	底部	－	－	7.4	全面施釉し、畳付部は釉剥ぎ。高台細く高い。外面にわずかに色絵が残る。	SD7	－
	91	本土産染付	碗	－	口～底	8.6	3.9	3.2	全面施釉し、畳付部は釉剥ぎ。口紅。高台細く浅い。瀬戸美濃産。外面胴部に染色体文。見込みに文様。（明治期）	SD7	－
	92	中国産青花	皿	－	底部	－	－	－	碁笥底。全面施釉し、畳付部は釉剥ぎ、わずかに砂付着。内面に昆虫？、草文。	SD7	－
	93	本土産色絵	碗	－	底部	－	－	3.4	全面施釉後、畳付部は釉剥ぎ。内外面に染付で竹文、草花文。緑、青、金泥で葉や花を絵付け。	SD7	－
	94	陶製煙管	煙管	陶首Ⅱ類	雁首	－	－	－	沖縄産施釉陶器と同素材で作成。稜を持たず円形。火皿は欠損。	SD7	－
	95	陶製煙管	煙管	陶首Ⅲ類	雁首	－	－	－	沖縄産無釉陶器と同素材で作成。全面を研磨し、多面形に面取される。	SD7	－
第52図	96	銭貨	－	(新)寛永通寳	－	－	－	－	寛永通寶。新寛永（3期：初鋳年1697）で背面無文。	SD7	－
	97	沖縄産施釉陶器	碗	池田Ⅷ類	底部	－	－	6.4	器の内外面は異なる釉で施釉。高台部以外は全面施釉し、見込みは蛇の目釉剥ぎ。見込み部に重ね焼き痕の耐火土が付着するが、釉剥ぎ部ではない部分に付着。（池田Ⅷ類）	SD7	－
	98	沖縄産施釉陶器	碗	池田Ⅱ類？	口縁部	14.2	－	－	フィガケ技法で、見込み部に重ね焼きの砂の付着なし。外面に重ね焼き時に付着した別陶器の破片が付着。（池田Ⅱ類？）	SD7	－
	99	沖縄産施釉陶器	小碗	－	口～底	8.0	4.1	3.6	全面施釉の小碗。高台部には窯詰め時の耐火土が付着。口縁部は暗オリーブ色の釉が施釉される。内面には飛び散った鉄？が付着。	SD7	－
	100	沖縄産施釉陶器	壺	－	口縁	5.0	－	－	ロクロ痕が残る。外面から内面頸部まで施釉され、一部は頸部以下まで垂れている。頸部には貼付痕がないので、ロクロ成形時に口縁まで成形。	SD7	－
	101	沖縄産施釉陶器	瓶	－	口縁	7.9	－	－	飴釉が施釉され、口唇部がやや広めに成形。頸部から肩部まで直線的におちる器形。	SD7	－
	102	沖縄産施釉陶器	火取	－	口縁	9.6	－	－	外面口縁は施釉で外面頸部は露胎、頸部以下は施釉される。内面口縁は施釉、口縁以下は露胎。外面頸部は格子状に沈線が彫られる。	SD7	－
	103	沖縄産施釉陶器	火取	－	口縁	10.6	－	－	外面腰部までは透明釉が施釉され、貫入入る。腰部以下はオリーブ色釉が施釉される。内面は白化粧土のみが塗られる。口唇部は一部平坦部が残存するが、使用によりほぼ全面剥れている。	SD7	－
	104	沖縄産施釉陶器	急須	－	底部	－	－	7.0	外面腰部まで施釉。内面は露胎。底部に円錐形の脚がつく。窯詰め字の砂が底部に一部付着。	SD7	－
	105	沖縄産施釉陶器	急須	－	口縁	6.4	－	－	外面全面施釉され、口縁上部は釉剥ぎ。内面は露胎。白象嵌状の線が彫られ、透明釉をかける。一部では線彫り部に白色土が塗られていない。106の身部分と考えられる。	SD7	－
	106	沖縄産施釉陶器	蓋	－	庇～袴	大 7.3 小 5.6	－	－	白象嵌状の印花を巡らせ、透明釉をかける。摘部は欠損。摘基部に穿孔あり。内面は全面露胎。	SD7	－
	107	沖縄産無釉陶器	擂鉢	－	口縁	31.4	－	－	逆L字状口縁。口縁上部に1条沈線が巡る。内面櫛目は全面に密に施す。	SD7	－
第53図	108	沖縄産無釉陶器	鉢	－	底部	－	－	12.0	底部円盤状の鉢。内外面にロクロ痕が残る。	SD7	－
	109	陶質土器	火炉	－	口～底	13.6	11.2	7.0	内彎口縁で胴部に膨らみをもち、底部は高台をもつ器形。白化粧土を塗り、線状に削り、横線文状に表現。内外口縁部付近に煤付着。	SD7	－
	110	陶質土器	火炉	－	口縁	24.8	－	－	口唇部平坦で胴部にかけて膨らみをもつ器形。口唇、外面は白化粧土を塗り、線状に削り、横線文状に表現。口唇に煤付着。	SD7	－
	111	陶質土器	鍋 （フライパン状製品）	－	把手	－	－	－	鍋基部はロクロ成形で、把手部は貼付を行い指ナデ成形。内面全体に煤付着し、穿孔あり。	SD7	－
	112	陶質土器	土瓶	－	注口	－	－	－	注口部は貼付。注口内面に白化粧土塗布。注口内部は棒状工具で回転させて穿孔しており、その痕跡が残る。	SD7	－
	113	陶質土器	蓋	－	庇～袴	大 9.6 小 8.0	－	－	土瓶の蓋。庇上部には鉋で線彫り。	SD7	－
	114	明朝系瓦(赤色)	軒平瓦	－	瓦当	－	－	－	笵パリ成形。上原：木曳門B系　石井：木曳門B	SD7	－
	115	明朝系瓦(赤色)	軒丸瓦	－	瓦当	－	－	－	文様部のみの残存で瓦当部がやや薄手。上原：円覚Ⅲa系　石井：内間御殿E	SD7	－
	116	沖縄産無釉陶器	鉢	－	口縁	－	－	－	逆L字状口縁で口縁が開き気味の器形。胎土灰色で緻密。	SD7	6層

第7表　近世2　出土遺物観察一覧e

挿図番号	遺物番号	種類	器種	分類	部位	法量（cm）			観察事項	出土位置	
						口径	器高	底径		遺構	層序
第54図	117	中国産青花	碗	福建・広東系	口～底	15.3	高 6.8 低 6.6	6.8	胎土灰白色、全面施釉後、畳付を釉剥ぎされ変色。高台先端は逆三角形状。外底中央と見込みは膨らむ。外面丸文、木の葉文。見込みに木の葉文。外底に「万」銘。	SJ3	1層
	118	中国産青花	碗	福建・広東系	口～底	14.8	6.9	7.0	胎土灰白色で白色味が強い。全面施釉後、畳付を釉剥ぎされ、変色している。高台先端は逆三角形状。外底中央と見込みは膨らむ。外面丸文、木の葉文。見込みに木の葉文。	SJ3	1層
	119	中国産青花	碗	福建・広東系	口～底	14.4	6.6	7.4	胎土灰白色で白色味が強い。全面施釉後、畳付を釉剥ぎされ変色している。高台先端は逆三角形状。外底中央と見込みは膨らむ。外面丸文、木の葉文。見込みに木の葉文。外底に銘あるが不明。	SJ3	1層
	120	中国産青花	碗	福建・広東系	口～底	15.6	高 7.0 低 6.6	6.7	胎土灰白色、全面施釉後、畳付を釉剥ぎされ変色。高台先端は逆三角形状。外底中央と見込みは膨らむ。外面丸文、木の葉文。見込みに木の葉文。外底に「才」銘。	SJ3	1層
	121	中国産青花	碗	福建・広東系	口～底	14.0	高 6.6 低 6.5	7.0	胎土灰白色、全面施釉後、畳付を釉剥ぎされ変色。高台先端は逆三角形状。外底中央と見込みは膨らむ。外面丸文、木の葉文。見込みに木の葉文。外底に「福」銘。	SJ3	1層
	122	中国産青花	碗	福建・広東系	口～底	14.6	高 6.9 低 6.8	7.0	胎土灰白色で白色味が強い。全面施釉後、畳付を釉剥ぎされ変色している。高台先端は逆三角形状。外底中央と見込みは膨らむ。外面丸文、木の葉文。見込みに木の葉文。外底に「元」銘。	SJ3	1層
第55図	123	中国産青花	碗	福建・広東系	口～底	14.8	高 6.25 低 6.2	7.0	胎土灰白色、全面施釉後、畳付を釉剥ぎされ変色。高台先端は逆三角形状。見込みは膨らみ、外底中央は膨らみが目立つ。外面丸文、木の葉文。見込みに木の葉文。外底に「示」銘。	SJ3	1層
	124	中国産青花	碗	福建・広東系	口～底	14.6	高 6.2 低 6.1	7.2	胎土灰白色、全面施釉後、畳付を釉剥ぎされ変色。全体的に光沢あり。高台先端は逆三角形状。外底中央と見込み膨らむ。外面丸文、木の葉文。見込みに粘土シワ？木の葉文。外底に「示」銘。	SJ3	1層
	125	中国産青花	碗	福建・広東系	口～底	15.2	高 6.7 低 6.5	7.2	胎土灰白色、全面施釉後、畳付を釉剥ぎされ変色。高台先端は逆三角形状。外底中央と見込みは膨らむ。外面丸文、木の葉文。見込みに木の葉文。	SJ3	1層
	126	中国産青花	碗	福建・広東系	口～底	14.7	6.3	6.8	胎土灰白色で灰色味がつよい。全面施釉後、畳付を釉剥ぎ。高台先端は逆三角形状。外底中央と見込みは膨らむ。外面丸文、木の葉文。見込みに木の葉文。	SJ3	1層
	127	中国産青花	碗	福建・広東系	口～底	14.3	高 6.4 低 6.2	7.0	胎土灰白色、全面施釉後、畳付を釉剥ぎされ変色。高台先端は逆三角形状。外底中央膨らみ、見込みの膨らみは顕著。外面丸文、木の葉文。見込みに木の葉文。外底に「玉」銘。	SJ3	1層
	128	中国産青花	碗	福建・広東系	口～底	12.8	5.6	6.1	胎土灰白色、全面施釉後に畳付を釉剥ぎ。口縁部外反。外底中央と見込みは膨らむ。外面折枝文、蓮弁文。見込みに木の葉文。外底に銘。	SJ3	1層
第56図	129	中国産青花	碗	福建・広東系	口～底	12.7	6.0	6.7	胎土灰白色。焼成不良。全面施釉後に畳付を釉剥ぎ。高台先端断面は逆三角形。外底中央と見込みは膨らむ。見込みに木の葉文。外底に文様あるが詳細は不明。	SJ3	1層
	130	中国産青花	碗	福建・広東系	口～底	14.5	高 7.0 低 6.75	7.4	胎土灰白色。全面施釉後、畳付を釉剥ぎ。高台先端は逆三角形状。外底中央と見込みは膨らむ。外面丸文、木の葉文。見込みに三草文。口縁内面に窯詰め痕あり。	SJ3	1層
	131	中国産青花	碗	福建・広東系	口～底	11.8	高 5.35 低 5.25	6.0	胎土灰白色で釉に透明感なし。文様発色が悪い。全面施釉後、畳付を釉剥ぎ。外底中央と見込みは膨らむ。見込みに崩れた三草文？口縁外面に窯詰時の粘土？付着。	SJ3	1層
	132	中国産青花	碗	福建・広東系	口～底	14.7	6.3	7.3	大振りの碗。胎土灰白色、全面施釉後、畳付を釉剥。高台先端は逆三角形状。見込みは膨らみ、外底中央は膨らみ顕著。外面丸文、木の葉文。見込みに崩れた三草文。外底部に回転削り痕。	SJ3	1層
	133	中国産青花	碗	福建・広東系	口～底	12.6	5.2	6.3	胎土灰白色で釉に透明感なし。文様発色悪い。全面施釉後、畳付を釉剥ぎ。高台先端断面は逆三角形状。外底中央と見込みは膨らむ。内面に圏線。見込みに崩れた三草文？ 外底銘不明。	SJ3	1層
	134	中国産青花	碗	福建・広東系	口～底	12.9	5.6	6.0	胎土灰白色。全面施釉後、畳付を釉剥ぎ。高台先端断面は逆三角形状。外底中央と見込みは膨らむ。内面に圏線。見込みに花卉文？	SJ3	1層
第57図	135	中国産青花	碗	福建・広東系	底部	—	—	7.2	胎土灰白色、全面施釉後、畳付を釉剥ぎ。高台先端断面は逆台形状。外面腰部に蓮弁文。見込み文様は詳細不明。外底中央に丸線で囲まれた「（和？）興」銘。	SJ3	1層
	136	中国産青花	碗	福建・広東系	口～底	12.2	5.5	6.1	胎土灰白色、全面施釉後、畳付を釉剥ぎ。高台先端断面は逆三角形状。口縁外反。外面に折枝文。見込みに木の葉文。外底に「徳□」銘。	SJ3	1層
	137	中国産青花	碗	福建・広東系	口～底	12.3	5.65	6.7	胎土灰白色、全面施釉後、畳付を釉剥ぎ。高台先端断面は鈍い逆三角形状。口縁外反。外面に折枝文。見込みに木の葉文。外底に「元□」銘。	SJ3	1層
	138	中国産青花	碗	福建・広東系	口～底	12.5	高 5.3 低 5.2	6.4	胎土灰白色、全面施釉後、畳付を釉剥ぎ。高台先端断面は鈍い逆三角形状。口縁外反。外面に折枝文、腰部に簡略した蓮弁文。見込みに木の葉文。外底に銘款。	SJ3	1層
	139	中国産青花	碗	福建・広東系	口～底	14.8	6.9	6.8	大振りの碗。胎土灰白色。全面施釉後、畳付を釉剥ぎ。口縁外反。見込みと外底中央部は膨らむ。高台先端断面は逆台形状。外面に折枝文、腰部に蓮弁文。見込みに木の葉文。外底「□玉」銘。	SJ3	1層
	140	中国産青花	碗	福建・広東系	口～底	12.8	5.7	5.8	胎土灰白色、全面施釉後、畳付を釉剥ぎ。口縁外反。高台先端断面は逆三角形状。見込みと外底中央部は膨らむ。外面に折枝文、腰部に蓮弁文。見込みに木の葉文。二重塗部が滲む。外底銘款。	SJ3	1層
第58図	141	中国産青花	碗	福建・広東系	口～底	9.7	4.9	4.5	胎土灰白色、全面施釉後、畳付を釉剥ぎ。口縁外反。高台先端断面は鈍い逆三角形状。外面に花唐草文、腰部に蓮弁文。外底に銘款。	SJ3	1層
	142	中国産青花	碗	福建・広東系	口～底	10.0	4.9	4.7	胎土灰白色、全面施釉後、畳付を釉剥ぎ。口縁外反。高台先端断面は鈍い逆三角形状。外面に花唐草文、腰部に蓮弁文。	SJ3	1層
	143	中国産青花	碗	福建・広東系	口～底	10.5	5.0	4.6	胎土灰白色、全面施釉後、畳付を釉剥ぎ。口縁外反。高台先端断面は逆三角形状。外面に花唐草文、腰部に蓮弁文。外底に銘款、鮮明に表現。	SJ3	1層
	144	中国産青花	碗	福建・広東系	口～底	9.8	高 4.9 低 4.8	4.4	胎土灰白色、全面施釉後、畳付を釉剥ぎ。口縁外反。高台先端断面は逆三角形状。外面に花唐草文、腰部に蓮弁文。外底に銘款。	SJ3	1層
	145	中国産青花	碗	景徳鎮窯系	口～底	14.6	6.6	7.4	胎土灰白色、全面施釉後、畳付を釉剥ぎ。口縁外反。高台先端断面は半円形状。外面に龍唐草文（饕餮文）、腰部に蓮弁文。見込みに霊芝文。外底に銘款。	SJ3	1層
	146	中国産青花	碗	景徳鎮窯系	口～底	9.4	高 4.7 低 4.65	4.8	胎土灰白色、全面施釉後、畳付を釉剥ぎ。口縁外反。高台先端断面は逆台形状。外面に饕餮文、腰部に蓮弁文。	SJ3	1層

第7表　近世2　出土遺物観察一覧f

挿図番号	遺物番号	種類	器種	分類	部位	法量（cm）			観察事項	出土位置	
						口径	器高	底径		遺構	層序
第58図	147	中国産青花	碗	景徳鎮窯系	口～底	9.4	4.7	4.5	胎土灰白色、全面施釉後、畳付を釉剥ぎ。口縁外反。高台先端断面は鈍い逆三角形状。外面に饕餮文、腰部に蓮弁文。	SJ3	1層
	148	中国産青花	碗	景徳鎮窯系	底部	14.4	6.6	7.0	大振りの碗。胎土灰白色、全面施釉後、畳付を釉剥ぎ。高台先端断面は逆台形状。外面に龍唐草文(饕餮文)、腰部に蓮弁文。外底に「大清乾隆年製」銘（銘款）。	SJ3	1層
第59図	149	中国産青花	碗	福建系	口～底	15.6	7.05	7.9	大振りの碗。胎土灰白色、全面施釉後、畳付釉剥ぎ。口縁外反。高台先端断面は逆三角形状。見込みと外底中央が膨らむ。外面に唐草文、霊芝文、腰部に蓮弁文。見込みに宝文。外底「口？美」銘。	SJ3	1層
	150	中国産青花	碗	福建系	口～底	12.6	高 6.1 低 5.85	6.7	胎土灰白色、全面施釉後、畳付を釉剥ぎ。口縁外反。高台先端断面は逆台形状。見込みと外底中央が膨らむ。外面に唐草文、腰部に蓮弁文。見込みに木の葉文。外底にうさぎ文。	SJ3	1層
	151	中国産青花	碗	福建系	口～底	15.4	6.6	7.8	大振りの碗。胎土灰白色、全面施釉後、畳付を釉剥ぎ。口縁外反。高台先端断面は逆三角形状。外面に唐草文、霊芝文。腰部に蓮弁文。釉下に浅い亀裂線あり。	SJ3	1層
	152	中国産青花	碗	福建・広東系	口縁	14.8	—	—	大振りの碗。胎土灰白色。口縁直口。外面花唐草文。	SJ3	1層
	153	中国産青花	碗	福建系	口～底	15.0	6.6	7.6	胎土灰白色、全面施釉後、畳付を釉剥ぎ。口縁外反。高台先端断面は逆台形状。外面に唐草文、腰部に蓮弁文。	SJ3	1層
	154	中国産青花	碗	景徳鎮窯系	口～底	15.0	7.2	7.1	胎土灰白色、全面施釉後、畳付を釉剥ぎ。口縁外反。高台先端断面は半円形状。外面に龍（饕餮文）。見込みに霊芝文？外底に銘款。	SJ3	1層
	155	中国産青花	碗	福建系	口～底	13.3	5.7	6.4	胎土灰白色、全面施釉後、畳付を釉剥ぎ。口縁外反。高台先端断面は鈍い逆三角形状。見込みと外底中央は膨らむ。内外面に貫入。外面に龍唐草文。見込みに木の葉文。	SJ3	1層
第60図	156	中国産青花	碗	福建系	口～底	14.9	6.8	6.6	大振りの碗。胎土灰白色、全面施釉後、畳付を釉剥ぎ。口縁直口。高台先端断面は逆三角形状。見込みと外底中央は膨らむ。外面に松の木と雲文。見込みに花卉文。外底に「盛玉」銘。	SJ3	1層
	157	中国産青花	碗	福建系	口～底	14.9	7.0	7.0	大振りの碗。胎土灰白色、全面施釉後、畳付を釉剥ぎ。口縁直口。高台先端断面は逆三角形状。見込みと外底中央は膨らむ。外面に松の木と雲文。見込みに花卉文。外底に「元」銘。	SJ3	1層
	158	中国産青花	碗	福建系	口～底	14.7	6.6	7.5	大振りの碗。胎土灰白色、全面施釉後、畳付を釉剥ぎ。口縁外反。高台先端断面は逆台形状。外面、唐草文、寿文。見込み宝文。外底「玉珍」銘。	SJ3	1層
	159	中国産青花	碗	福建系	口～底	14.4	6.5	6.7	大振りの碗。胎土灰白色、全面施釉後、畳付を釉剥ぎ。口縁直口。高台先端断面は逆三角形状。見込みと外底中央は膨らむ。外面に松の木文。見込みに文様。外底に「原」銘。	SJ3	1層
	160	中国産青花	碗	景徳鎮窯系	口～底	10.05	高 5.15 低 5.0	4.5	胎土灰白色。全面施釉後、畳付釉剥ぎ。口縁外反。高台先端断面は逆台形状。畳付に窯詰め痕。外面梵字文、見込みに梵字文、外底に銘款。	SJ3	1層
	161	中国産青花	碗	景徳鎮窯系	口～底	9.85	高 5.1 低 4.9	4.6	胎土灰白色。全面施釉後、畳付釉剥ぎ。口縁外反。高台先端断面は逆台形状。外面梵字文、見込みに梵字文、外底に不明銘。	SJ3	1層
第61図	162	中国産青花	碗	景徳鎮窯系	口～底	9.5	4.7	4.6	胎土灰白色。全面施釉後、畳付釉剥ぎ。口縁外反。高台先端断面は逆三角形状。外面梵字文、見込みに梵字文、外底に不明銘。	SJ3	1層
	163	中国産青花	碗	景徳鎮窯系	口～底	9.6	4.7	4.4	胎土灰白色。全面施釉後、畳付釉剥ぎ。口縁外反。高台先端断面は鈍い逆三角形状。外面梵字文、見込みに梵字文、外底に銘款。	SJ3	1層
	164	中国産青花	碗	景徳鎮窯系	口～底	9.8	4.9	4.5	胎土灰白色。全面施釉後、畳付釉剥ぎ。口縁外反。高台先端断面は鈍い逆三角形状。外面梵字文、見込みに梵字文、外底に銘款。外底に飛び鉋痕。	SJ3	1層
	165	中国産青花	小杯	景徳鎮窯系	口～底	4.4	高 2.75 低 2.7	2.0	胎土灰白色、蛇の目高台。口縁外反。外面及び見込みに梵字文。	SJ3	1層
	166	中国産青花	碗	福建系	口縁	16.8	—	—	胎土灰白色。口縁外反。外面に寿字文。	SJ3	1層
	167	中国産青花	碗	徳化窯系	口縁	8.8	—	—	胎土灰白色。口縁直口。口禿。粘土シワあり。内外ともに貫入。	SJ3	1層
	168	中国産青花	皿	福建系	口～底	15.0	3.7	8.3	胎土灰白色。直口口縁。高台畳付は釉剥ぎ。高台先端断面は鈍い逆三角形状。見込みと外底中央は膨らむ。見込みに花唐草文。内面側に宝文。釉下に亀裂線あり。外底「玉」銘。	SJ3	1層
	169	中国産青花	皿	福建系	口～底	15.9	高 3.6 低 3.5	7.9	胎土灰白色。直口口縁。高台畳付は釉剥ぎ。高台先端断面は逆三角形状。見込みと外底中央は膨らむ。見込みに花唐草文。内面側に宝文。釉下に亀裂線あり。外底「製」銘。	SJ3	1層
	170	中国産青花	皿	福建系	口～底	15.9	3.7	8.7	胎土灰白色。直口口縁。高台畳付は釉剥ぎ。高台先端断面は逆台角形状。高台外側に削り痕。見込みと外底中央は膨らむ。見込みに花唐草文。内面側に宝文。釉下に亀裂線あり。外底「全興」銘。	SJ3	1層
第62図	171	中国産青花	皿	福建系	口～底	15.6	3.4	8.4	胎土灰白色。直口口縁。全面施釉。高台先端断面は逆三角形状。見込みと外底中央は膨らむ。内外面に貫入。見込みに花唐草文。内面側に宝文。外底「勝珍」銘。	SJ3	1層
	172	中国産青花	皿	福建系	口～底	15.6	3.2	9.0	胎土灰白色。口縁外反。畳付釉剥ぎ。高台先端断面は逆三角形。見込みと外底中央は膨らむ。見込みと内側面は龍唐草、霊芝文。外側面は宝文、外底は崩れた双魚文。	SJ3	1層
	173	中国産青花	皿	福建系	口～底	15.3	3.7	9.2	胎土灰白色。口縁外反。畳付釉剥ぎ。高台先端断面は逆三角形。内側面は2匹の龍唐草、見込みは宝文。外側面は簡略化した宝文、外底「裕玉」銘。	SJ3	1層
	174	中国産青花	皿	福建系	口～底	15.9	2.8	9.3	胎土灰白色。口縁外反。畳付釉剥ぎ。高台先端断面は逆三角形。見込み中央に花盆文、その周囲に花唐草、花卉文。外側面は折枝草文、外底銘款。	SJ3	1層
	175	中国産青花	皿	福建系	口～底	16.0	2.8	9.4	胎土灰白色。口縁外反。畳付釉剥ぎ。高台先端断面は逆三角形。見込み中央に花盆文、その周囲に花唐草、花卉文、菱形宝文。外底銘款。	SJ3	1層
	176	中国産青花	皿	福建系	口～底	15.8	高 3.5 低 3.3	9.1	胎土灰白色。直口口縁。畳付釉剥ぎ。高台先端断面は逆三角形。見込みは火炎宝珠文。外側面は宝文の簡略化しらもの。釉下に亀裂線あり。外底「宝珍」銘。	SJ3	1層

第7表　近世2　出土遺物観察一覧g

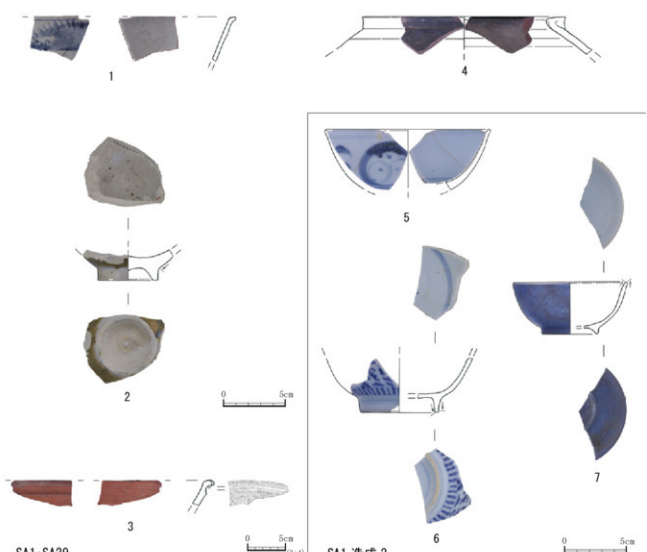
挿図番号	遺物番号	種類	器種	分類	部位	法量（cm）			観察事項	出土位置	
						口径	器高	底径		遺構	層序
第63図	177	中国産青花	皿	徳化窯系	口～底	14.8	3.4	7.0	胎土灰白色。外反口縁。畳付釉剥ぎ。高台先端断面は鈍い逆三角形。粘土シワ。型作り。高台脇に窯詰めの砂付着。内面は草木文？釉下に亀裂線。	SJ3	1層
	178	中国産青花	皿	徳化窯系	口～底	9.6	高 2.9 低 2.8	5.3	胎土灰白色。直口口縁。畳付から外底は露胎。粘土シワ。型作り。内面は草木文？釉下に亀裂線。	SJ3	1層
	179	中国産青花	皿	景徳鎮窯系	底部	—	—	6.2	胎土灰白色。畳付釉剥ぎ。高台先端断面は逆三角形。内面木の葉文と花瓶の組み合わせ。外底銘款。	SJ3	1層
	180	中国産青花	皿	福建系	口～底	16.0	3.4	9.4	胎土灰白色。口縁外反。畳付釉剥ぎ。高台先端断面は逆台形。見込みに折枝文、内側面は草花文。外底に「宝玉」銘。	SJ3	1層
	181	中国産青花	皿	福建系	口～底	20.2	3.85	11.2	胎土灰白色。口縁外反。畳付釉剥ぎ。畳付に窯詰痕。高台先端断面は逆三角形。見込みに折枝文、内側面は草花文。外底に昆虫文？文様の色がにじむ。	SJ3	1層
	182	中国産青花	皿	福建系	口～底	15.5	高 3.6 低 3.4	8.7	胎土灰白色。口縁外反。畳付釉剥ぎ。高台先端断面は逆台形。見込みに折枝文、内側面は草花文。外底に昆虫状文。	SJ3	1層
第64図	183	中国産青花	皿	福建系	口～底	15.6	3.35	8.0	胎土灰白色。直口口縁。畳付釉剥ぎ。高台先端断面は逆三角形。見込みに山水人物文。外底「成」銘。	SJ3	1層
	184	中国産青花	皿	福建系	口～底	16.0	高 3.3 低 3.2	8.3	胎土灰白色。直口口縁。畳付釉剥ぎ。高台先端断面は逆三角形。見込みに山水人物文。外底「瑞」銘。	SJ3	1層
	185	中国産青花	皿	福建系	口～底	15.2	高 4.0 低 3.8	8.2	胎土灰白色。直口口縁。畳付釉剥ぎ。高台先端断面は逆三角形。見込みに山水人物文。外面は竹文。	SJ3	1層
	186	中国産青花	皿	景徳鎮窯系	口～底	11.6	2.25	6.5	胎土灰白色。外反口縁で口唇平坦。畳付釉剥ぎ。外削り高台。見込みに花鳥文。外底「原？」銘。高台内以外に貫入。	SJ3	1層
	187	中国産青花	皿	景徳鎮窯系	口～底	12.0	2.3	6.8	胎土灰白色。外反口縁で口唇平坦。畳付釉剥ぎ。外削り高台。高台内に白膨れ。見込みに花鳥文。外底銘款。	SJ3	1層
	188	中国産青花	皿	景徳鎮窯系	底部	—	—	6.1	胎土灰白色。外反口縁で口唇平坦。畳付釉剥ぎ。外削り高台。畳付に窯詰め痕。見込みに花鳥文。外底「順？」銘。高台内以外に貫入。	SJ3	1層
第65図	189	中国産青花	鉢	福建・広東系	口～底	27.6	11.1	12.1	外反口縁。高台断面逆台形状。高台途中から畳付まで釉剥ぎ。内底は蛇の目釉剥ぎ。釉剥ぎ部に重ね焼き痕。見込みに印花文。外面には寿字文。	SJ3	1層
	190	中国産青花	鉢	福建・広東系	口～底	28.0	11.7	12.4	外反口縁。高台断面逆台形状。高台途中から畳付まで釉剥ぎ。畳付部に籾殻痕。内底は蛇の目釉剥ぎ。釉剥ぎ部に重ね焼き痕。見込みに印花文。外面には寿字文。	SJ3	1層
	191	中国産白磁	皿	徳化窯系	口～底	13.0	高 3.2 低 3.1	7.8	型作りの皿。口禿。口縁外反。高台内釉下に亀裂線。内反形の底部。	SJ3	1層
	192	中国産色絵	碗	景徳鎮窯系	口～底	10.2	6.2	4.9	口縁外反。畳付釉剥ぎ。赤、黄、黒色を用いて草花文。腰部には波文？外底に「大明成化年製」銘の模倣。	SJ3	1層
	193	中国産色絵	碗	景徳鎮窯系	口～底	10.4	6.0	5.0	口縁外反。畳付釉剥ぎ。外面胴部には麒麟文様か？腰部には波文？外底に「大明成化年製」銘の模倣。	SJ3	1層
	194	中国産色絵	碗	景徳鎮窯系	口～底	9.2	4.9	4.8	口縁外反。畳付釉剥ぎ。黄、赤、青、桃色で草花文。粉彩技法の可能性。	SJ3	1層
第66図	195	中国産色絵	碗	景徳鎮窯系	口～底	9.1	6.1	3.5	口縁外反。畳付釉剥ぎ。青色中心の色絵の可能性あり。口縁外面は雷文。胴部は饕餮文。腰部は蓮弁文。	SJ3	1層
	196	中国産色絵	皿	—	口～底	10.8	2.9	6.6	薄手の皿。口縁部外反。畳付釉剥ぎ。粉砕技法。内面に草花文。	SJ3	1層
	197	中国産色絵	皿	景徳鎮窯系	口～底	27.4	高 4.9 低 4.4	16.6	大皿。直口口縁。口唇及び畳付部は茶色。牡丹、竹文。内面口縁には四方襷文。窓絵内には花唐草文。赤、青、緑、黄の色を用いた粉彩に近い技法を用いている。全体的に大らかな文様表現。	SJ3	1層
	198	中国産陶器	茶壺	宜興窯系	底部	—	—	4.9	把手と注口残存。外底が窪む内反形の底部。内底には調整痕が残る。外底に「孟臣」銘を線彫り。	SJ3	1層
	199	中国産陶器	茶瓶蓋	宜興窯系	蓋	大 5.2 小 4.4	—	—	把手は欠損するが、残存部の形態が左右で異なることから、意匠性のある把手である可能性が高い。蓋中央部に穿孔。松の文様が描かれる。	SJ3	1層
第67図	200	本土産染付	碗	磁器碗 Ⅳ期	口～底	10.3	4.7	3.7	産地は有田。高台は関西系（京焼）の高台を模倣。高台低く、畳付釉剥ぎ。直口口縁。外面には牡丹唐草。	SJ3	1層
	201	本土産染付	碗	磁器碗 Ⅳ期	口～底	9.8	4.6	3.4	産地は肥前。高台は関西系（京焼）の高台を模倣。高台低く、畳付釉剥ぎ。直口口縁。外面には水仙文用。内外面に貫入。	SJ3	1層
	202	本土産染付	大皿	磁器皿 Ⅳ期	口～底	25.8	4.4	16.0	型打ち成形技法。外面に如意頭文。畳付は釉剥ぎ外底内5か所にハリささえ痕。畳付部に窯詰めの砂付着。内面に牡丹文様（花びらに点文様）、流水文。外底に「大明成化年製」銘の模倣。	SJ3	1層
	203	本土産染付	皿	肥前(有田) 1660～70年代	口～底	大 16.4 小 12.2	3.6	大 10.6 小 7.2	菱形の皿。直口口縁。畳付釉剥ぎ。糸切細工か。内外面に牡丹唐草文。上手資料。柿右衛門のものか。	SJ3	1層
	204	本土産染付	皿	肥前 18c後半	口～底	10.0	1.9	5.0	手塩皿。浅い皿。畳付釉剥ぎ。内面草を表現した文様。如意頭状の唐草文。	SJ3	1層
	205	本土産染付	皿	肥前 （有田） 18c前～中葉	口～底	10.9	2.8	5.7	型打ち成形の皿。口唇口紅。畳付釉剥ぎで、外削り高台。高台内に鉋痕（祥瑞模倣）。内面に扇、軍配、鳥が描かれる。外底に「福」銘で渦福銘。	SJ3	1層
	206	本土産染付	筒碗	肥前 （有田） 17c後半	口～底	6.5	6.1	4.05	猪口。畳付釉剥ぎ。外面に雨降りと雷を表現したものを描く。外底に「大明年製」銘。	SJ3	1層

第7表　近世2　出土遺物観察一覧h

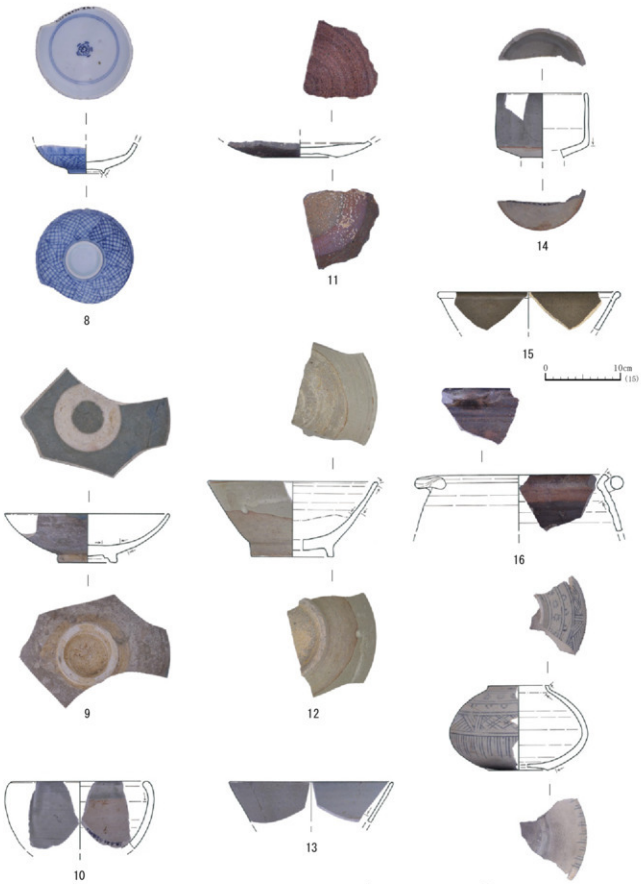
挿図番号	遺物番号	種類	器種	分類	部位	法量（㎝）			観察事項	出土位置	
						口径	器高	底径		遺構	層序
第68図	207	本土産青磁	筒碗	肥前 （有田？） 17後～18c前	口～底	7.5	5.8	4.5	猪口。六角の筒碗。胎土灰白色で白色味がつよい。畳付釉剥ぎ。畳付脇に窯詰め時の砂付着。	SJ3	1層
	208	本土産白磁	深皿	磁器皿 Ⅳ期	口～底	16.4	5.4	9.4	肥前産。口縁外反する深皿。蛇の目高台で畳付に一部釉薬付着。内外ともに貫入が多く、青味の釉薬使用。	SJ3	1層
	209	本土産 青磁染付	蓋	磁器碗 Ⅳ期	—	袴 10.0 撮 3.9	3.3	—	高台があり口縁直口の碗蓋。外面は青磁で、内面は染付。内面には四方襷文、見込みは蒟蒻印判。畳付に砂付着。	SJ3	1層
	210	本土産色絵	碗	色絵碗 Ⅳ期	口～底	10.6	5.2	3.4	産地は有田。高台は関西系（京焼）の高台を模倣。高台低く、畳付釉剥ぎ。直口口縁。腰部には蓮弁、外面は赤、金で色絵唐草。	SJ3	1層
	211	本土産色絵	皿	関西系	口～底	12.4	4.2	4.2	京・信楽系の平碗とされるもの。直口口縁。外面腰部以下は露胎。畳付平坦。青みがかかる釉薬で全体に貫入。若松、竹の文様が描かれる。	SJ3	1層
第69図	212	本土産色絵	皿	関西系	口～底	12.4	高 4.6 低 4.4	3.7	京・信楽系の平碗とされるもの。直口口縁。外面腰部以下は露胎。畳付平坦。全体に貫入。菖蒲文を表現。	SJ3	1層
	213	本土産色絵	皿	関西系	口～底	12.0	4.2	3.9	京・信楽系の平碗とされるもの。直口口縁。外面腰部以下は露胎。釉と胎土の境目は緋色に発色。畳付平坦。青みがかかる釉薬で全体に貫入。シダ文様。	SJ3	1層
	214	本土産色絵	皿	関西系	口～底	12.2	4.2	4.0	京・信楽系の平碗とされるもの。直口口縁。外面腰部以下は露胎。釉と胎土の境目は緋色に発色。畳付平坦。青みがかかる釉薬で全体に貫入。シダ文様。	SJ3	1層
	215	本土産色絵	皿	関西系	口～底	12.2	4.55	3.9	京・信楽系の平碗とされるもの。直口口縁。外面腰部以下は露胎。畳付平坦。見込みに床木の葉、周囲に牡丹唐草文。赤、緑、金色を用いる。上質製品。	SJ3	1層
第70図	216	本土産色絵	土瓶	関西系	口～底	5.4	7.85	4.0	ロクロ成形で外面腰部は露胎。外底が窪む内反形の底部。呉須、錆（鉄）に色絵を加える。竹を表現。内外面に細かい貫入。外底腰部に窯詰め痕。口唇から口縁外面は露胎。	SJ3	1層
	217	本土産色絵	蓋	関西系	—	大 7.0 小 5.4	—	—	土瓶の蓋。外面底部まで施釉、その他は露胎。赤、金色を用いて植物系の文様を描く。竹文ではないため、216とのセット関係は要検討。	SJ3	1層
	218	ガラス製品	杯	中国産？	口縁	—	—	—	緑透明色のガラス製品。頸部以下が残存していないので、全形不明。口縁は外反し、口唇平坦に成形するが、僅かに凸凹する。	SJ3	1層
	219	沖縄産無釉陶器	灯明皿	—	口～底	11.0	2.8	5.0	ロクロ成形。口縁は外側に開く器形。底部が窪み、成形なし。内外口縁部に煤付着。	SJ3	1層
	220	沖縄産無釉陶器	灯明皿	—	口～底	11.0	2.8	4.8	ロクロ成形。口縁は外側に開く器形。底部が窪み、成形なし。内外口縁部に煤付着。	SJ3	1層
	221	沖縄産無釉陶器	灯明皿	—	口～底	11.3	2.35 ～2.60	4.2	ロクロ成形。泥釉が施釉される。口縁は外側に開く器形。底部が窪み、成形なし。内外口縁部に煤付着。	SJ3	1層
第71図	222	沖縄産無釉陶器	灯明皿	—	口～底	10.2	高 2.8 低 2.7	4.7	ロクロ成形。泥釉が施釉される。口縁は外側に開く器形。底部が窪み、成形なし。	SJ3	1層
	223	沖縄産施釉陶器	火取	—	口～底	11.8	8.4	7.0	口縁断面逆L字状。口縁から直線的で腰部で屈曲する。高台断面は逆台形状で僅かに外削り。外面口唇から腰部まで施釉。口唇は釉が剥がれている。高台内に墨書？	SJ3	1層
	224	沖縄産施釉陶器	火取	—	口～底	11.0	8.7	7.4	口縁内湾。高台断面は逆台形状。外面の一部に飴釉施釉。口唇外面側から腰部まで変色。口唇内面側から露胎。外面腰部に窯詰め時の重ね焼き痕。	SJ3	1層
	225	沖縄産施釉陶器	火取	—	口～底	11.6	8.8	6.6	口縁内湾。高台断面は逆台形状。口縁内面から外面腰部まで褐色釉施釉。畳付及び外底に窯詰め時の砂付着。	SJ3	1層
	226	沖縄産施釉陶器	火取	—	口～底	9.8	高 7.9 低 7.6	6.7	口縁内湾。高台断面は逆台形状。口縁外面側から腰部まで施釉。内面に一部釉垂れ。腰部の一部に窯詰め時の砂付着。	SJ3	1層
	227	本土産陶器	小碗	陶器碗 Ⅲ～Ⅳ期	底部	—	—	3.8	高台見込みの削りの横断面形がアーチ状（饅頭心）。高台内の深さが高台脇より僅かに深い。	SK15	1層
	228	沖縄産無釉陶器	擂鉢	—	高台	—	—	16.0	擂鉢の脚高台。畳付と高台内は露胎。ロクロ成形。	SK15	1層
第72図	229	初期沖縄産 無釉陶器	器種不明	—	口縁部	—	—	—	全面泥釉施釉。口唇成形。胎土に石英粒混入し、マーブル状。	SK15	1層
	230	沖縄産無釉陶器	壺	—	底部	—	—	19.4	ロクロ成形。底部糸切痕。	SK15	1層
	231	中国産青花	碗	福建・広東系	口縁部	10.0	—	—	口縁部外反。外面に梵字文。	SK15	1層
	232	青銅製品	釘	—	完形	—	—	—	釘頭丸形。短釘。	SM3	1層
	233	沖縄産施釉陶器	碗	池田Ⅱ類？	口縁部	14.0	—	—	フィガケ技法。口縁部が僅かに肥厚。（池田Ⅱ類？）	SM3	3層直上
	234	初期沖縄産 無釉陶器	器種不明	—	脚？	—	—	—	人形等の脚か。中央空洞。一部平たい面があり、こちらが裏面の可能性あり。突起が確認され、指を表現している可能性がある。石英粒子の白色土が筋状に混入。	SM16	2層
	235	初期沖縄産 無釉陶器	壺	—	底部	—	—	11.6	ロクロ成形。畳付は丸みを持ち、高台脇内側は僅かに窪む。石英粒子の白色土が筋状に混入。	SM16	2層
	236	鉄製品	釘	—	釘頭～軸	—	—	—	頭部を一方へ折る角釘。断面方形。全体的に錆化が激しい。	SP6	2層

第7表　近世2　出土遺物観察一覧

挿図番号 遺物番号		種類	器種	分類	部位	法量（cm） 口径	器高	底径	観察事項	出土位置 遺構	層序
第72図	237	中国産青花	碗	—	底部	—	—	3.9	全面施釉。高台断面は逆三角形状。内外面に貫入。	SP8	—
	238	中国産瑠璃釉	碗	徳化窯系	口縁部	—	—	—	直口口縁で、口唇無釉。外面に瑠璃釉施釉。	SP915	—
	239	本土産陶器	碗	陶器編年～IV期	底部	—	—	4.0	全面施釉で畳付釉剥ぎ。高台見込みの削出の横断面形がアーチ状（櫛描心）。高台内の深さが高台幅より深い。	SP915	—
	240	外面産施釉陶器	碗	唐津X類	口～底	10.2	5.0	4.2	外反口縁全面施釉後、畳付釉剥ぎ。見込みは蛇の目釉剥ぎ。釉剥ぎ部、畳付部に顕火土付着。	SP915	—
	241	初期外面産無釉陶器	灯明皿	—	底部	—	—	5.6	ロクロ成形。底部糸切痕。粘土に石英白色粒が筋状に混入。	SP915	—
	242	中国産白磁	碗	—	口縁部	8.0	—	—	外反口縁で口唇口先。型成形。内外面に貫入。	SP922	—
	243	中国産青花	碗	徳化窯系？	底部	—	—	6.3	畳付釉剥ぎ。高台先端断面は逆台形状。釉下に亀裂線あり。	SP922	—
	244	本土産色絵	皿	関西系	底部	—	—	3.7	京・信楽系の平碗か。腰部まで施釉。内面に色絵。畳付平坦に成形。	SP922	—
	245	中国産青磁	小碗	—	底部	—	—	3.4	畳付釉剥ぎ。高台端に脚あり。3脚。外底中央が尖る。畳付に窯詰め痕。	SR14	4層



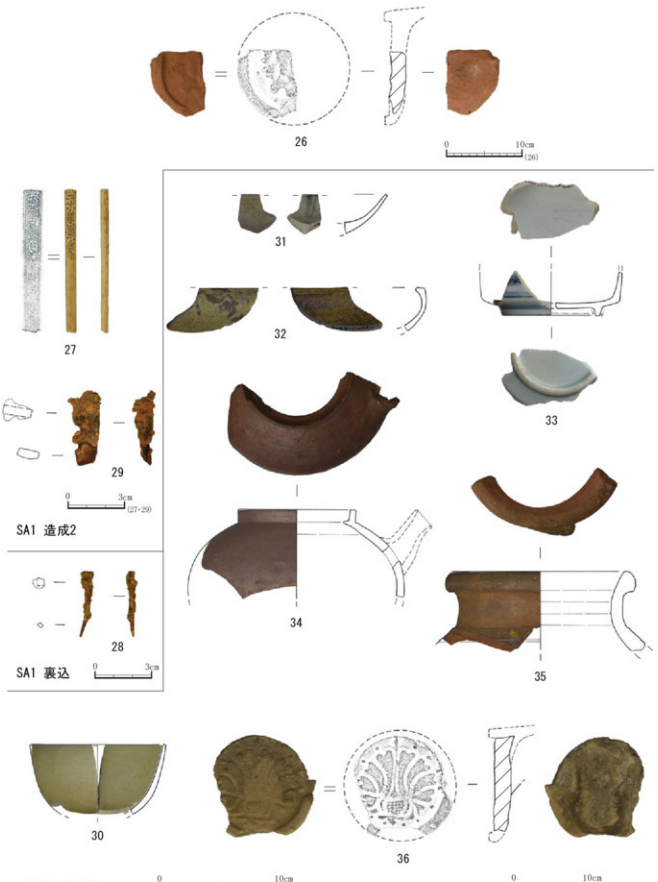
第 43 図　近世 2 の遺構出土遺物 1



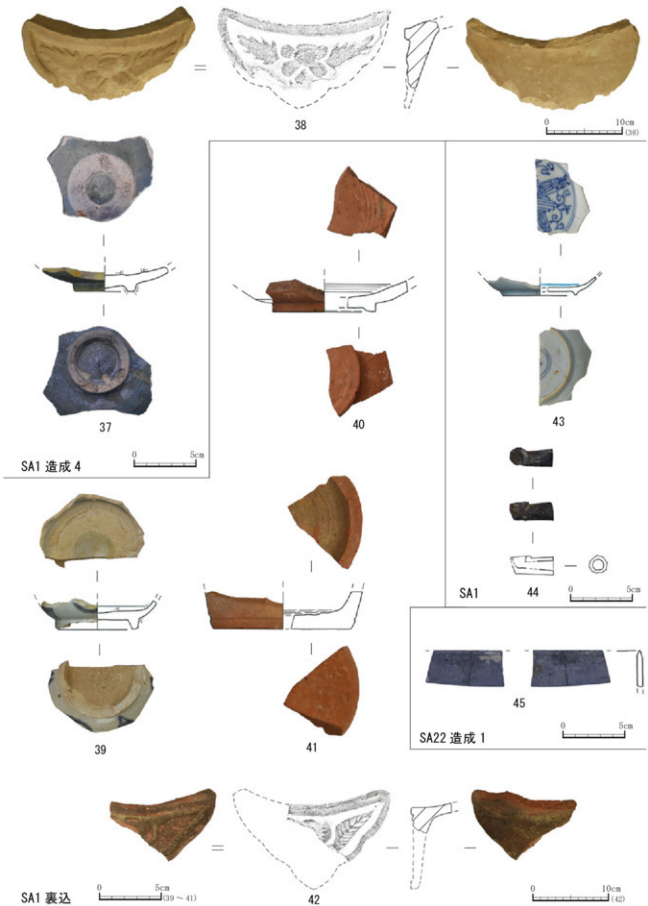
第 44 図　近世 2 の遺構出土遺物 2

SA1 遺成 2

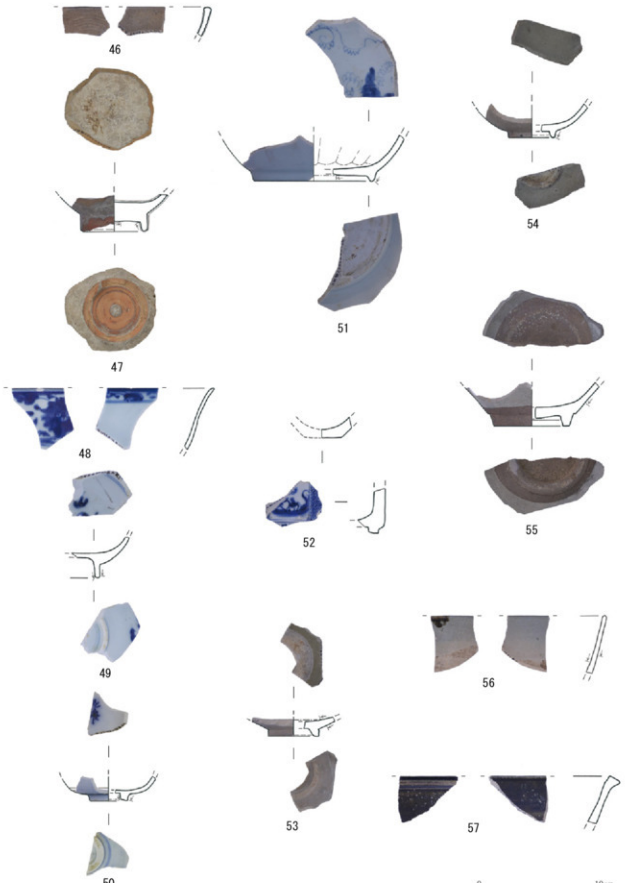
第 45 図　近世 2 の遺構出土遺物 3



第 46 図　近世 2 の遺構出土遺物 4



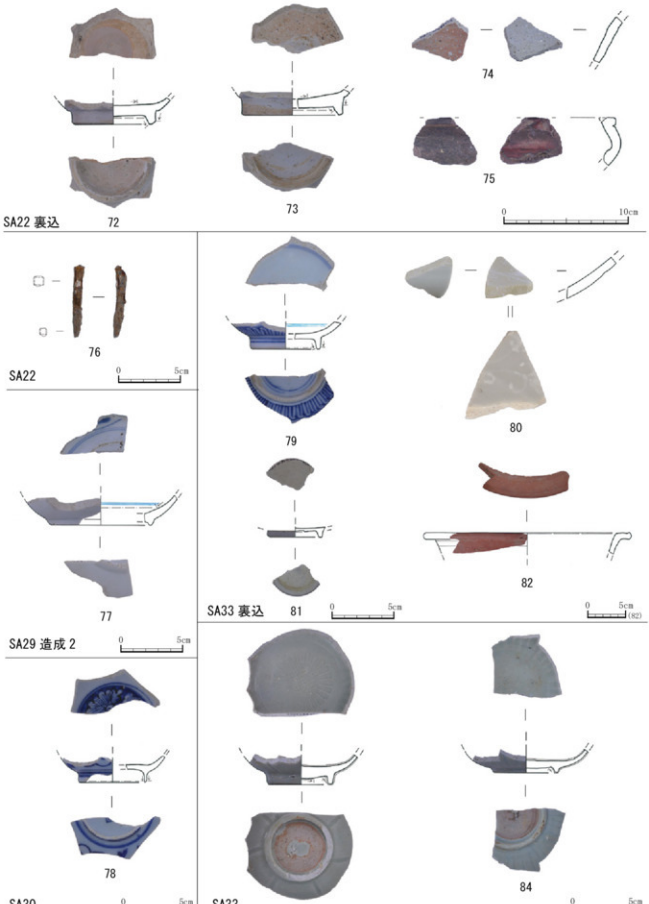
第 47 図　近世 2 の遺構出土遺物 5



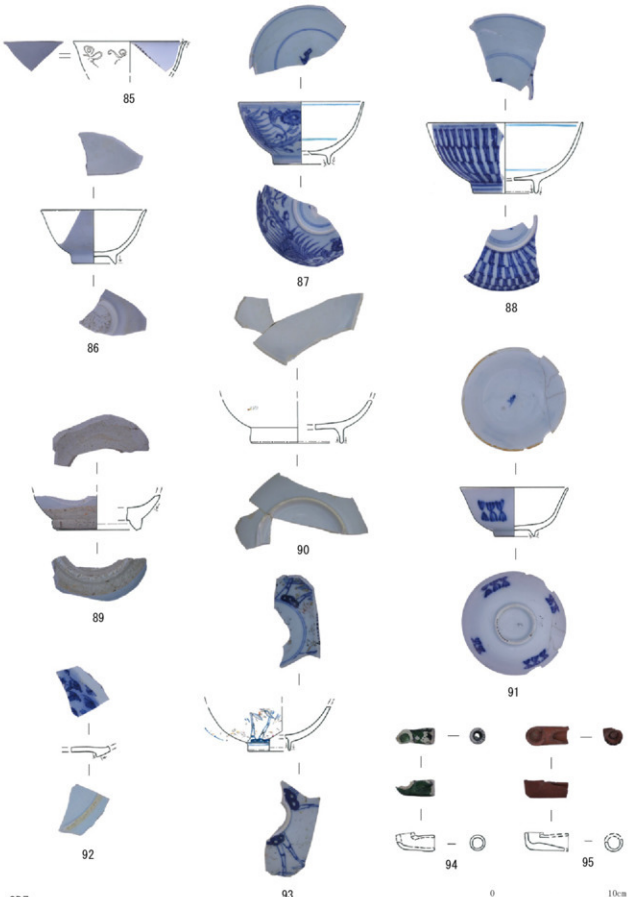
SA22 遺成 2

第 48 図　近世 2 の遺構出土遺物 6

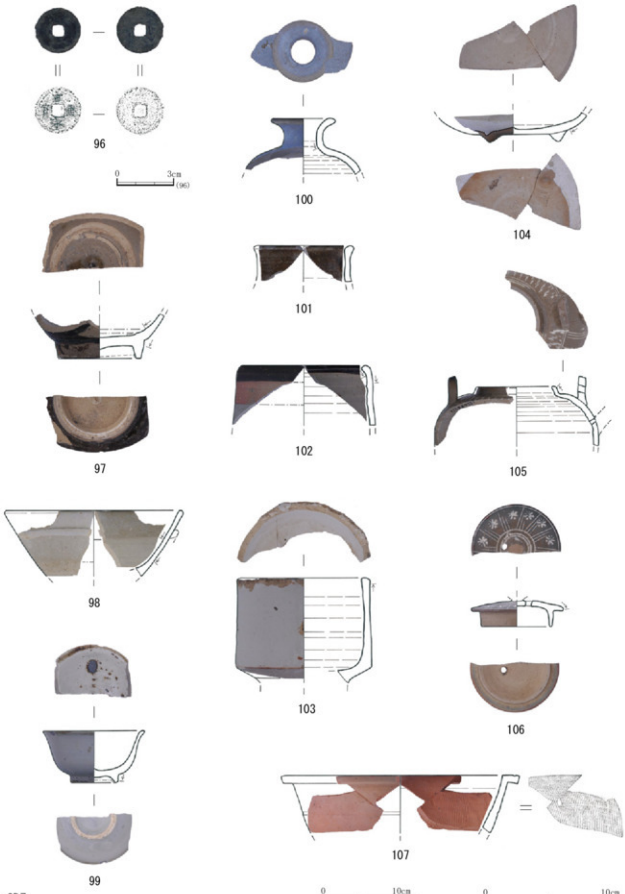
第 49 図　近世 2 の遺構出土遺物 7



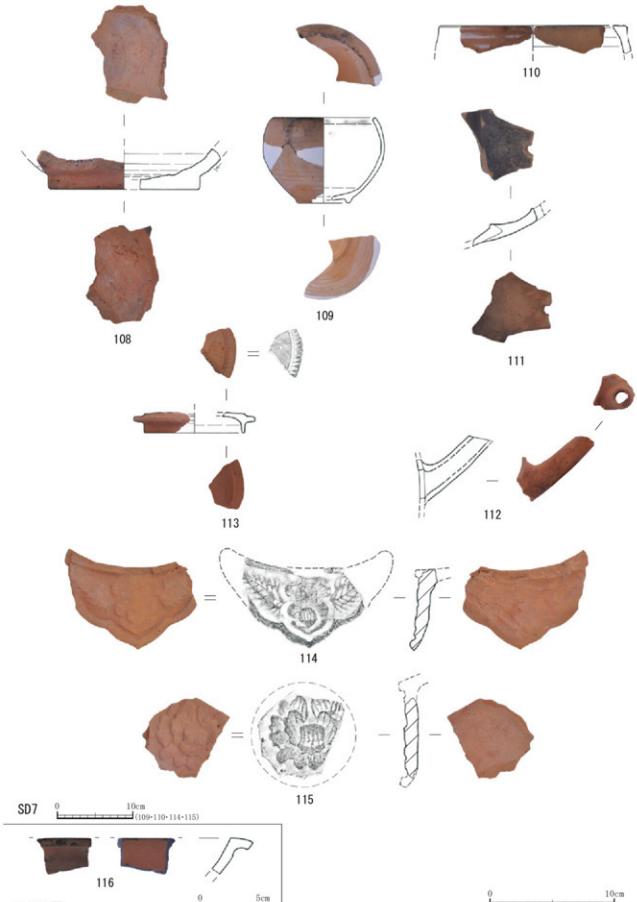
第 50 図　近世 2 の遺構出土遺物 8



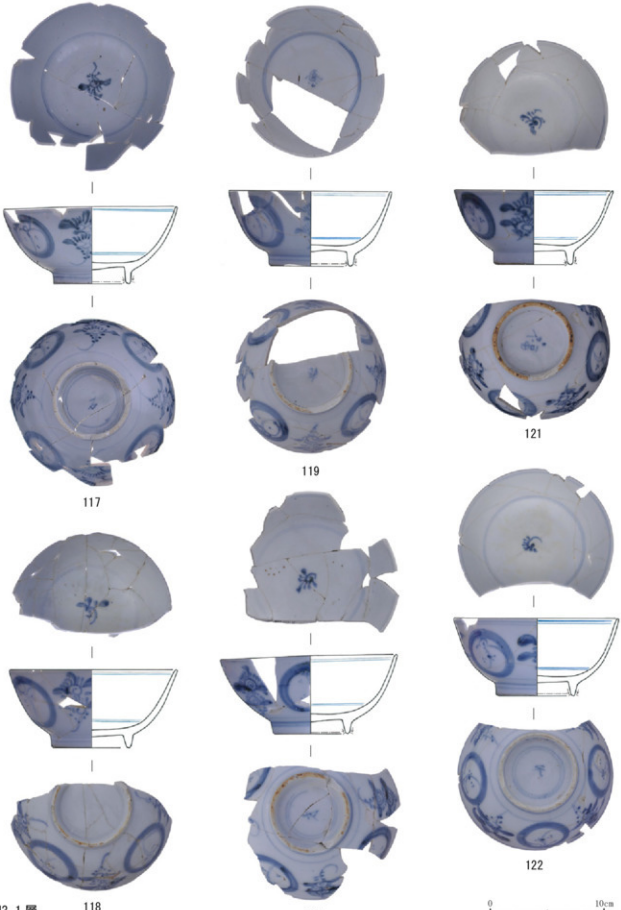
第 51 図　近世 2 の遺構出土遺物 9



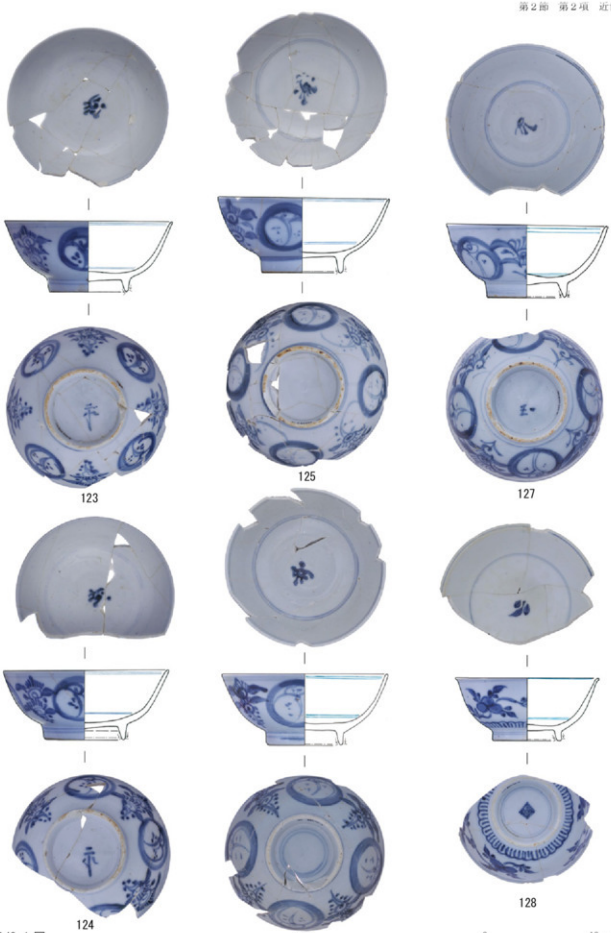
第 52 図　近世 2 の遺構出土遺物 10



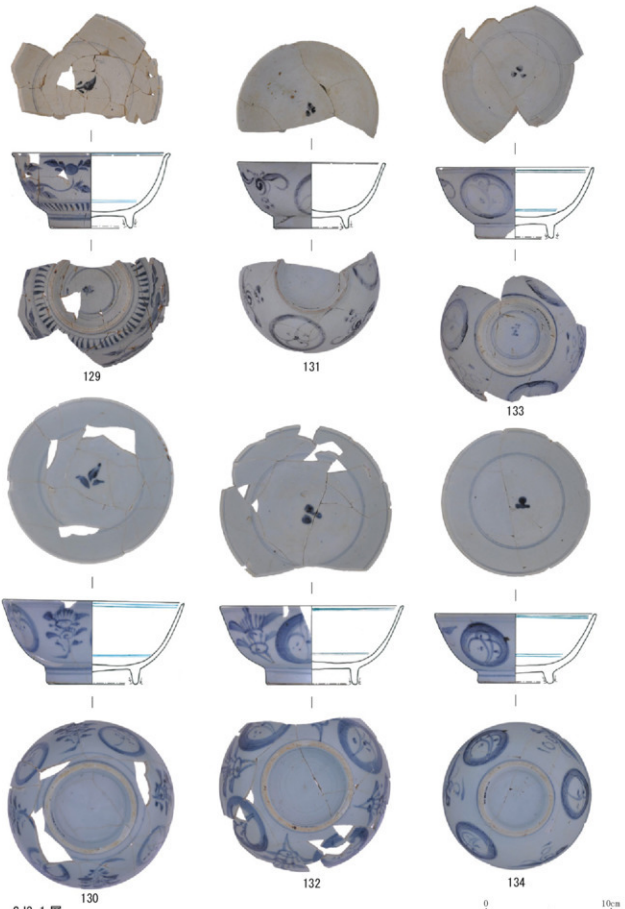
第 53 図 近世 2 の遺構出土遺物 11



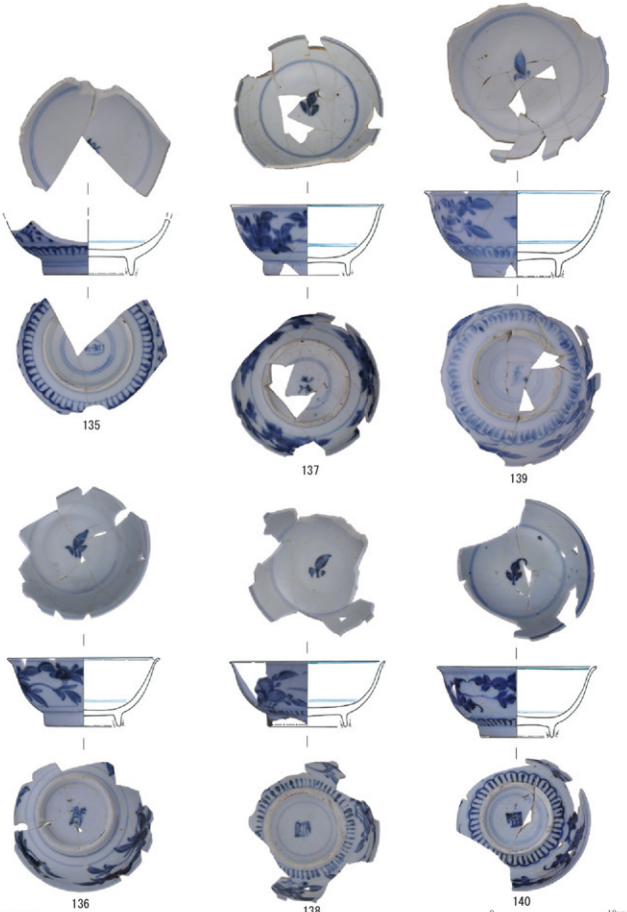
第 54 図　近世 2 の遺構出土遺物 12



第 55 図　近世 2 の遺構出土遺物 13



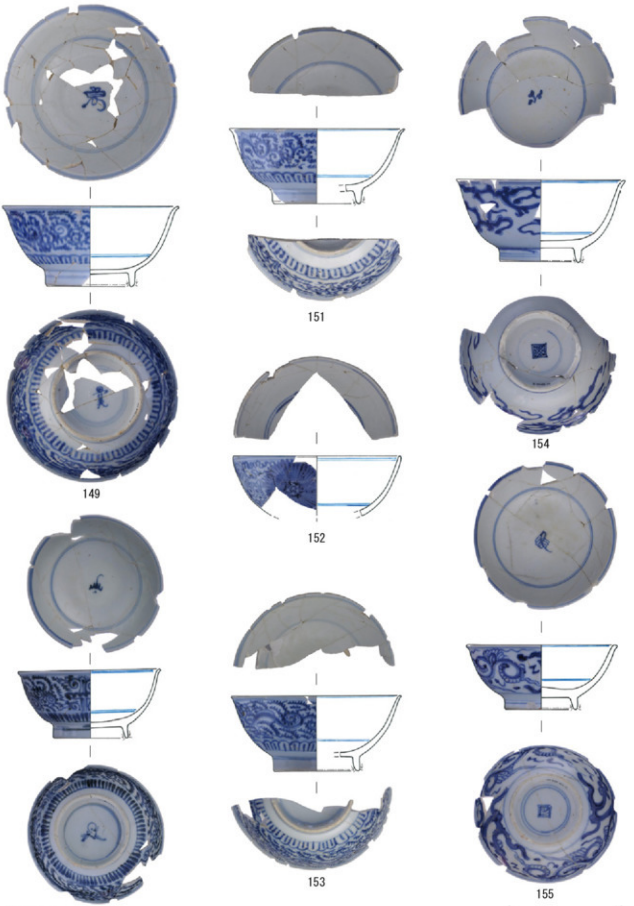
第 56 図　近世 2 の遺構出土遺物 14



SJ3 1層

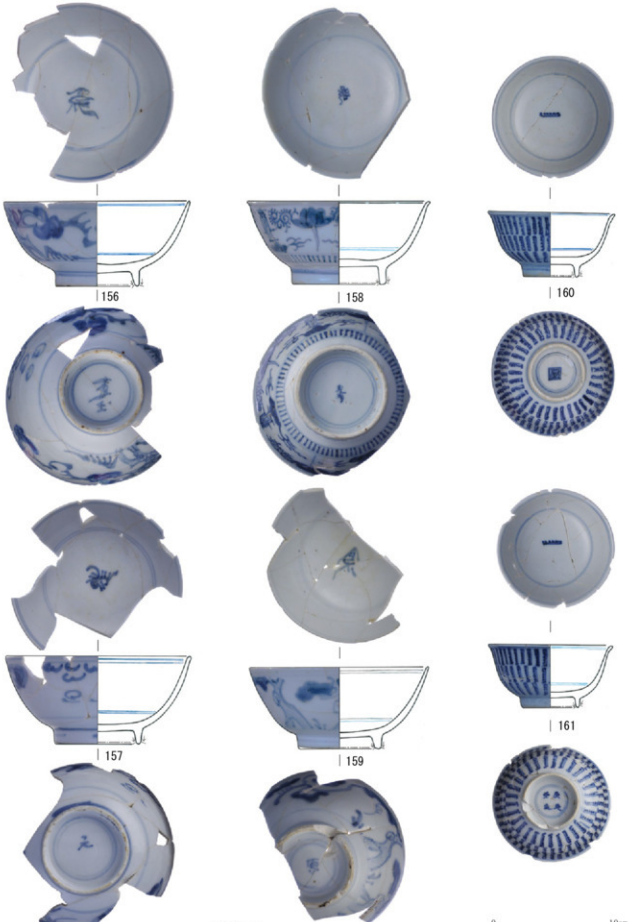
第 57 図　近世 2 の遺構出土遺物 15

第 58 図　近世 2 の遺構出土遺物 16



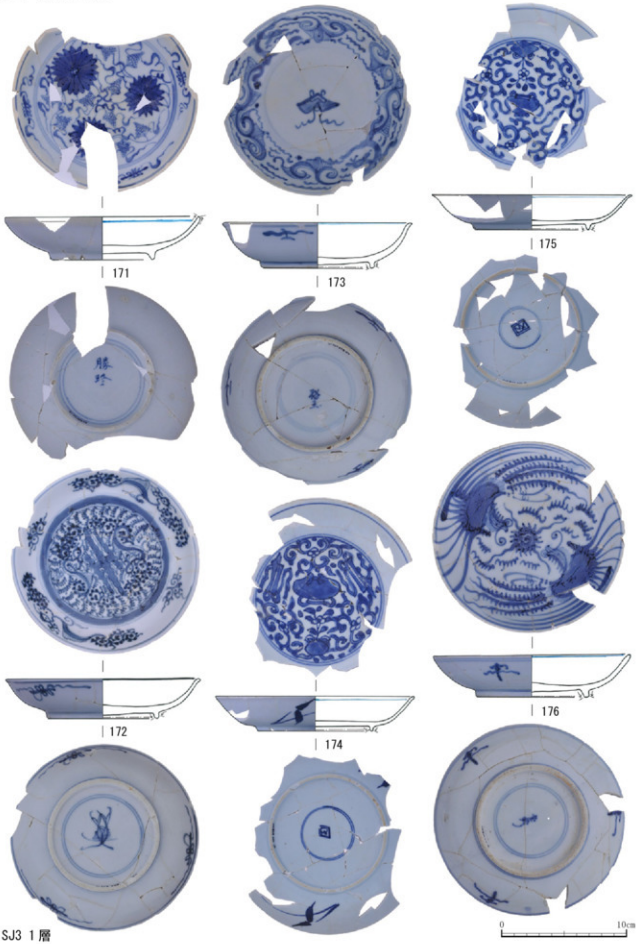
SJ3 1層

第 59 図　近世 2 の遺構出土遺物 17



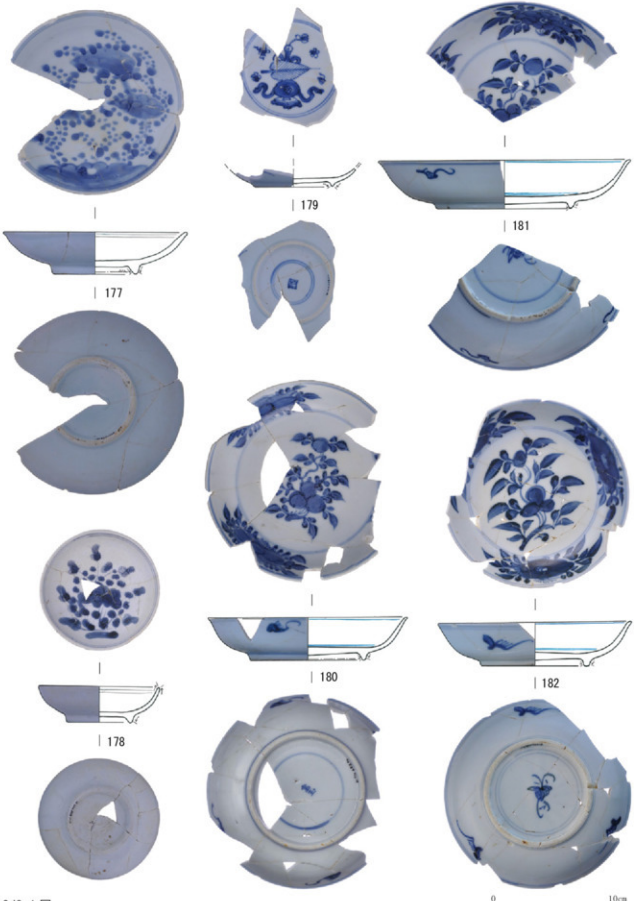
第 60 図　近世 2 の遺構出土遺物 18

第 61 図　近世 2 の遺構出土遺物 19



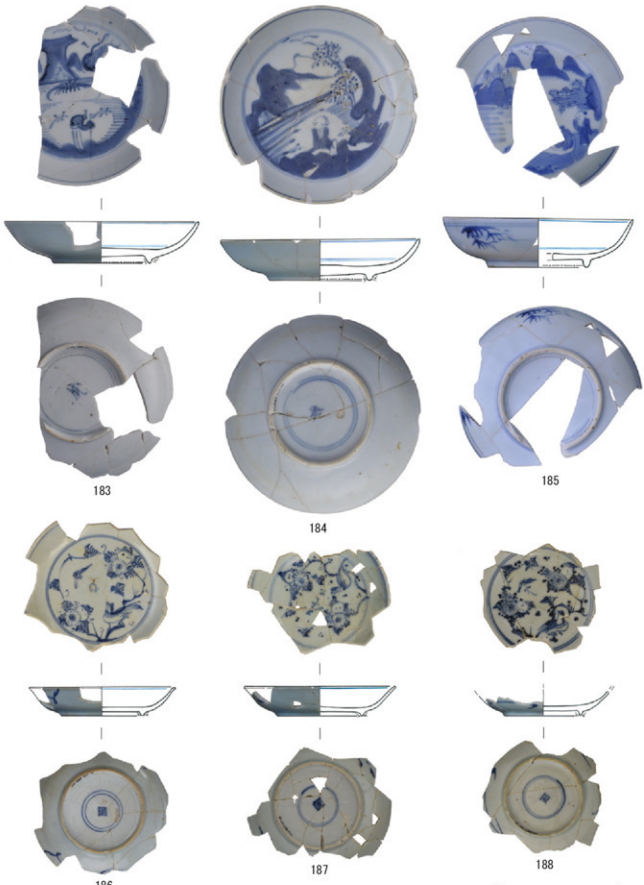
SJ3　1層

第 62 図　近世 2 の遺構出土遺物 20



SJ3 1層

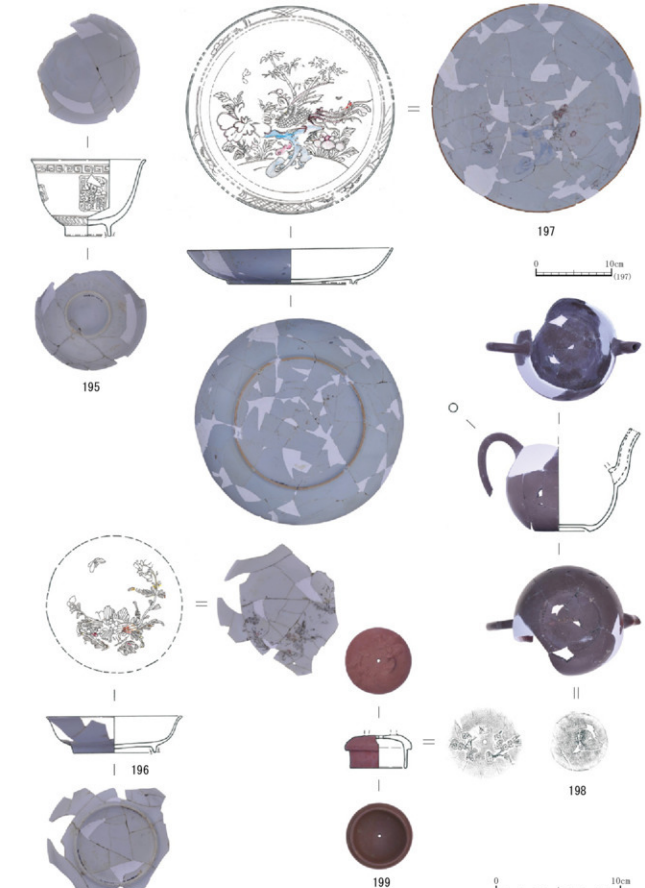
第 63 図　近世 2 の遺構出土遺物 21



SJ3 1層

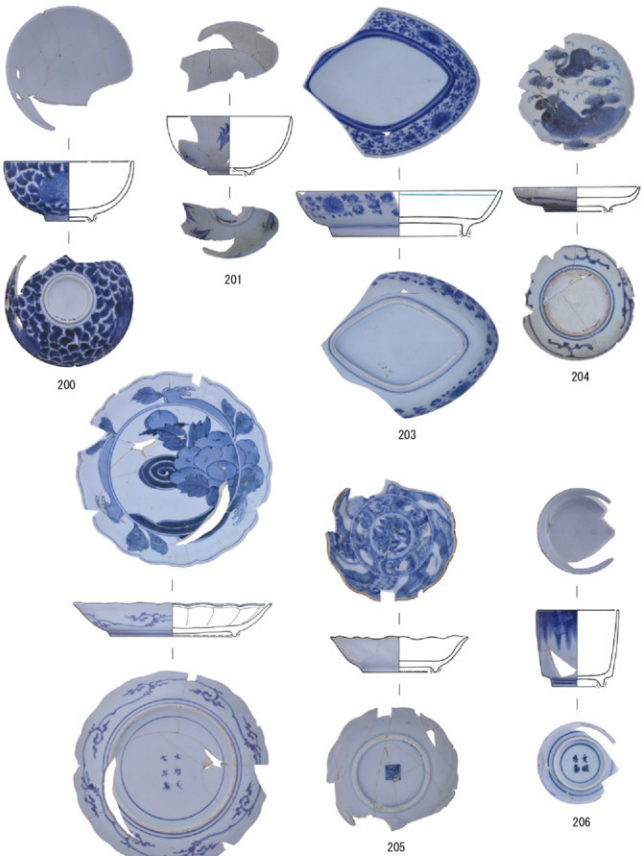
第 64 図　近世 2 の遺構出土遺物 22

第 65 図 近世 2 の遺構出土遺物 23

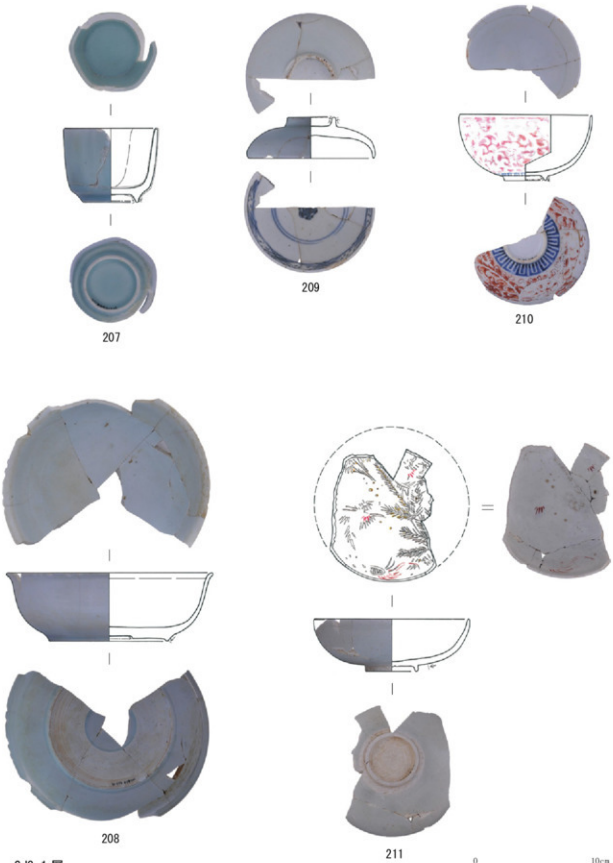


SJ3 1層

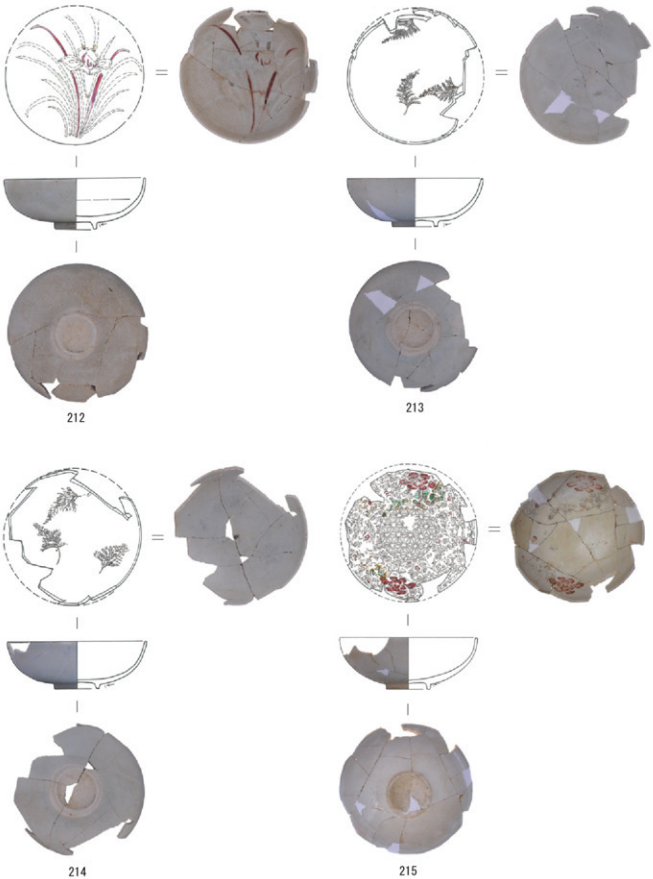
第 66 図　近世 2 の遺構出土遺物 24



第 67 図　近世 2 の遺構出土遺物 25

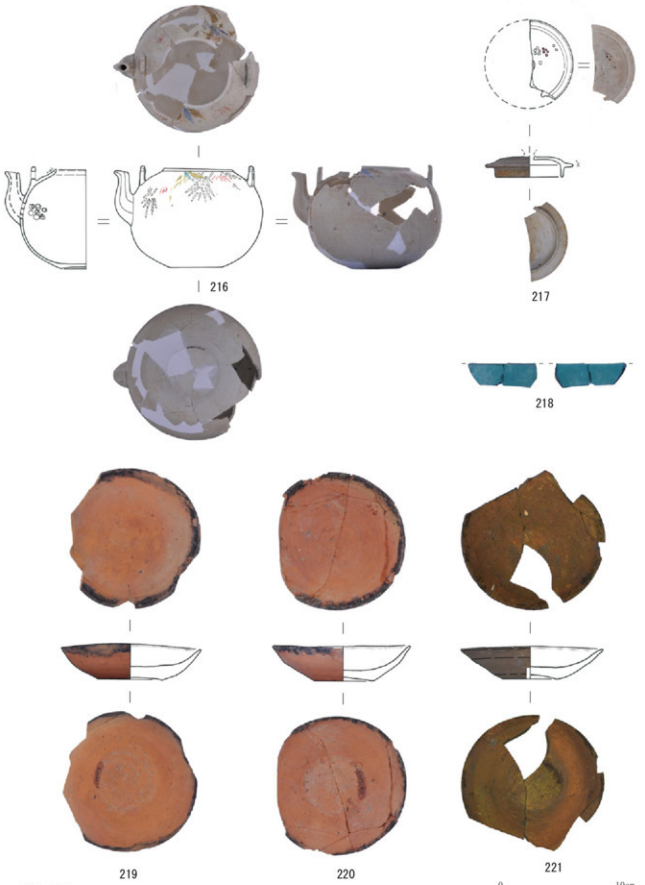


第 68 図　近世 2 の遺構出土遺物 26



SJ3 1層

第69図　近世2の遺構出土遺物27



SJ3 1 層

第 70 図　近世 2 の遺構出土遺物 28

第 71 図　近世 2 の遺構出土遺物 29

第 72 図　近世 2 の遺構出土遺物 30

第３項　近世2 ～ 3の遺構・遺物

近世2 ～ 3-A

A：遺構

SA2、階段状遺構（SA24・SA25・SS28）SA3・SA12（SA12・15間）・SA14

G-7 ～ 9グリッドにかけて構築されている遺構で、SA2、階段状遺構（SA24・25、SD19・20、SS21・23・25・26・27・28）・SA3・SA13・SA12・SA14・SA15が複雑に重なりあっている。これらの遺構からの出土遺物は特徴的なものを図化した。

それぞれの時期差を検討するため、各所にサブトレンチを設けた。その結果、これらの遺構が機能していた時期は大きく2時期あることが判明した。それぞれ1期、2期とする。

第76図のSA2は東西に延びる石積みであるが、第76図のSA2立面図の7ライン部分には縦方向に石積みの目地があり、積み替えの痕跡が残る。SA2の裏込部（第73図 SA2裏込堆積状況）の堆積状況を確認すると、造成4上にSD19（第73・74図）が構築され、それと並行してSA2の西側部分を構築し、その後SS21（第73・74図）が構築される。また、東西ベルト（第73図）と南北ベルト（第74図）の堆積状況を検討すると、SA24・25、SD20、SS22・25・26・27・28はそれぞれ、堆積している層はそれぞれ異なるが、造成4中の造成作業の一連の単位と捉え、ほぼ同時期に構築されたものと考えた。また、SA3・13・14（第75図）は地山を削って構築されており、石積みの重なりから、SA3・13は同一石積みであり、SA14が後に構築されている。このSA14の西側裏込部分に造成（造成4）を行いながら、SA24・25、SD19・20、SS22・25・26・27・28（第73図）を構築し、機能していたと考えられる。これらを総合すると、SA24・25（第74図）は門部分の石積みで、その入口部分と考えられる。SA24・25の間にピット？（柱穴跡？）を検出したが、石積みとの関係性は判然としなかった。門内部と考えられる西側部分には石敷きがされSS22・25・26・27・28、その中央部分には北側へ下る階段があった。この階段には両脇にSD19及びSD20の排水溝が設けられ、SS25・26・28の階段石敷きには、線状の溝があり、滑り止めの役割を担っている。また、階段の西側にはSS21の一部が東から西側にかけて緩やかに傾斜していることから、傾斜した先に建物などがあったと思われるが、後世の削平により遺構を確認することは出来なかった。以上が1期の状況である。

SS28を削平し、SA2南壁の東側部分が新たに構築される（第74図）。この時、サンゴ石灰岩と琉球石灰岩を組み合わせて石積みを構築している。SA3・13を埋めながら造成仮止めとしてSA15を構築し、そのまま造成を行いながらSA12を構築している（第75図）。そのため両石積みの北側部分はSA2北壁面に接している。その後SA12の西側にも造成を行いながら、平場を拡張したものと考えられる。このとき、SA24・25、SD19・20、SS22・25・26・27・28（第74図）が機能を終了したのか、もしくは使用され続けたのかについては判然としない。加えてこれらの遺構群の西側についても遺構は確認出来なかった。以上が2期の状況である。

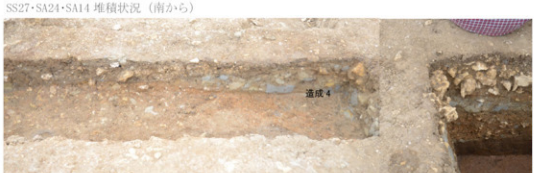
「首里古地図」をみると、中城御殿の中央部分に建物が配置されている。2期は建物の様相が判然としないが平場形成を行っていることから、何らかの建物配置が想定でき、首里古地図の当該部分と想定が可能である。また、「首里古地図」には建物のみが描かれ、石積みが描かれていない。これは建物に伴う石積みのため、石積みとして描かれていないと考えられる。

これら1期、及び2期の年代観であるが、2期は石積み根石が造成2もしくは造成4の一部を削平し構築されていることから18世紀代のものと想定できる。1期については、構築年代は判然としない。あえて時期を特定するのであれば、造成4上に構築されていること、首里古地図に描かれる建物配置とは別様相であること、18世紀代構築と考えられるSA2の東側部分は造成に伴い埋められていることから、18世紀から17世紀代の構築が想定できる。1期の遺構は17世紀代の中城御殿関連遺構である可能性が非常に高い。そのため本来であれば近世3の項目で報告すべきだが、これらの遺構群は複雑に重なりあい、それぞれ別に報告することはできないため、ここで報告する。

第73図 近世2～3-Aの遺構1

SA2 裏込堆積状況（西から）

SS27・SA24・SA14 堆積状況（南から）



中央ベルト セクション（南から）

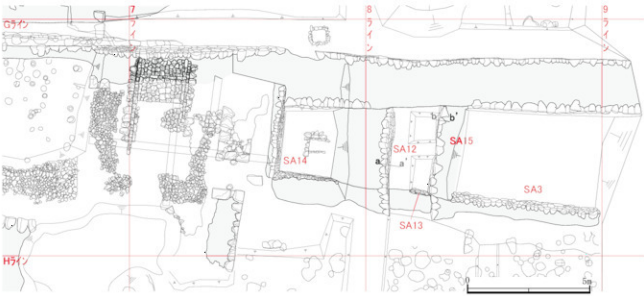
SS27・SA24・SA14 堆積状況（東から）

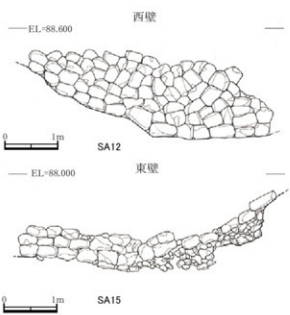
第74図 近世2～3-Aの遺構2

階段状遺構 検出状況（北東から）

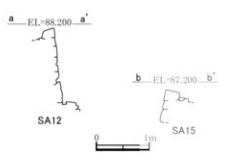
SA25 立面検出状況（東から）

SA2 断ち割り状況（西から）





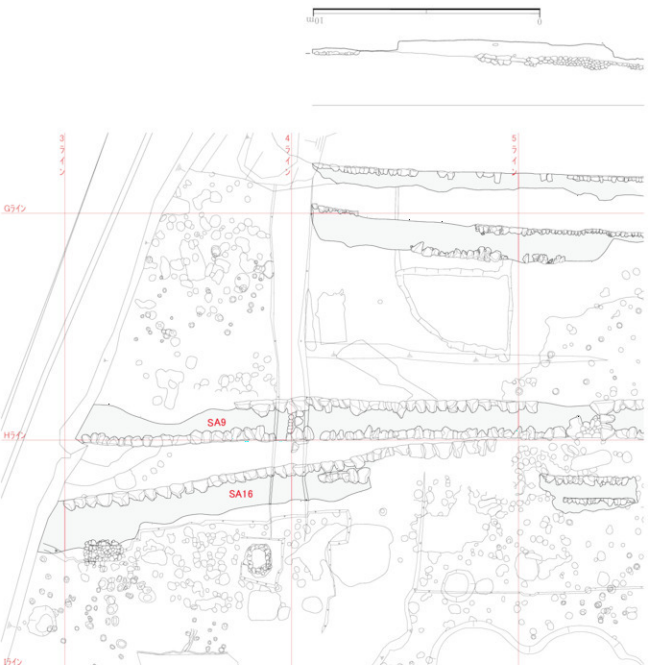
SA12 検出状況（東から）



第75図 近世2～3-Aの遺構3

SA12 検出状況（南西から）

SA14 検出状況（東から）



第76図 近世2～3-Aの遺構4

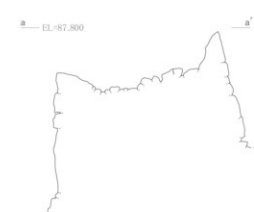
SA2 検出状況（北東から）

SA2 検出状況（北西から）

SA2 立面
EL=88.000m
6ライン
7ライン
8ライン
9ライン
10ライン
N
SA2
SA2
SA3
SA9
SA3 立面
EL=88.000m
0
10m

SA3 検出状況（西から）

b
EL=87.800
b'
0
1m
SA3


a
EL=87.800
a'
SA2

近世2 ～ 3-B

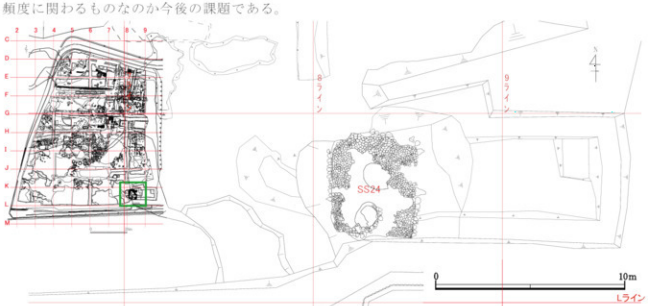
SS24

Ⅶ区で検出した井戸と周辺の遺構である。周囲を石灰岩に囲まれて落ち込んだ部分に形成されている。一部の石灰岩は加工が行われている。調査時はこの落ち込みには近代遺構の土が堆積しており、石積み遺構の上部にわずかに近世の造成土を確認することができた。時期的な判断と石敷の形成方法などを確認するため、南北にトレンチを設けて下層確認を行った。その結果、基盤層のクチャを確認した。その上部には造成土が堆積しており、この遺構を形成する際に基盤層まで掘削し、その上部を造成し、石敷を作っている。トレンチ掘削時には明朝系瓦や中国産青花などが出土した。これらの状況ではあるが、時期根拠になるものが少ないため、出土遺物から近世2 ～ 3の時期にしている。

遺構周囲には石灰岩の岸壁や石灰岩がない部分には石積みがあり、四方を囲まれた状態である。南東の石灰岩部分には東から西にかけて傾斜するように石敷があることからこの部分が遺構への入り口であると想定される。これを根拠にこの遺構は当時から遺構面より地下へおりた場所にあるとした。

また、南から北側にかけて緩やかに傾斜しており、南側は１段高く石敷が作られている。北側には石敷が作られておらず、円形に隙間があり、石灰岩下部へとつづく穴が存在する。南から北への傾斜や穴を意識した作りなどからこの部分は排水穴としての役割が想定できる。

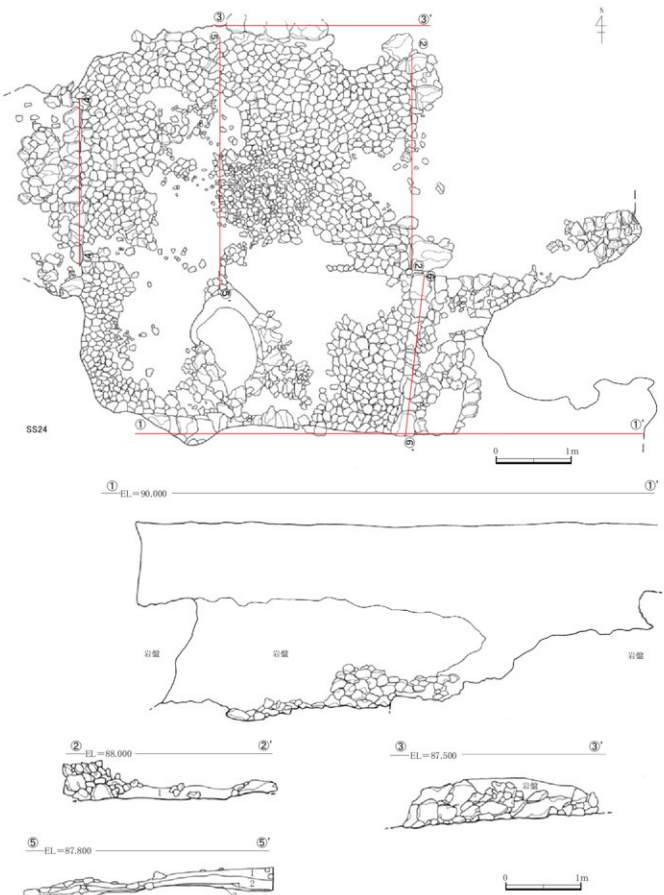
井戸の部分のつくりは全体を確認していないため不明だが、石積みはかなり崩れている。現在も水が湧いているが、あふれることはなかった。石敷に使用されている石は小形のものが多く、表面には凹凸が残っている。この状況はⅠ区で検出した水場遺構の様相と異なる。このことが形成時期や使用頻度に関わるものなのか今後の課題である。



第77図 近世2～3-Bの遺構1

SS24 検出状況（北東から）

SS24 検出状況（北西から）



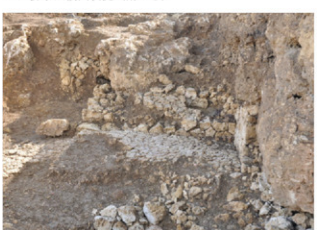
第78図 近世2～3-Bの遺構2

第79図 近世2～3-Bの遺構3

SS24 トレンチセクション（西から）

SS24 排水穴検出状況（南から）

井戸部分検出状況（南から）


スロープ部検出状況（西から）

図版13 近世2～3-B の遺構

B：近世2 ～ 3-A、Bの遺物

近世2 ～ 3の遺構からは、中国産陶磁器、本土産陶磁器、沖縄産陶器等が出土した。また、Ⅳ区の階段状遺構群は近世2 ～ 3-A、SS24は近世2 ～ 3-Bとした。

近世2 ～ 3の遺構は、造成2上に形成されているか、もしくは中城御殿が機能していた時期のいずれかに該当するという状況から当該時期として報告する。

階段状遺構をはじめとする遺構群は、2時期あることが判明したが、出土遺物は、これらの遺構の上部に堆積していた造成2や近代の土等からの遺物も含まれる状況だと考えられる。そのため、遺物の出土状況から、明確な時期差を伺うことは困難である。

SS24からの出土遺物は明朝系瓦をはじめとする遺物が出土しているが、遺構直上までは撹乱層が堆積していたこともあり、遺構の機能していた時期を判別することは困難であった。

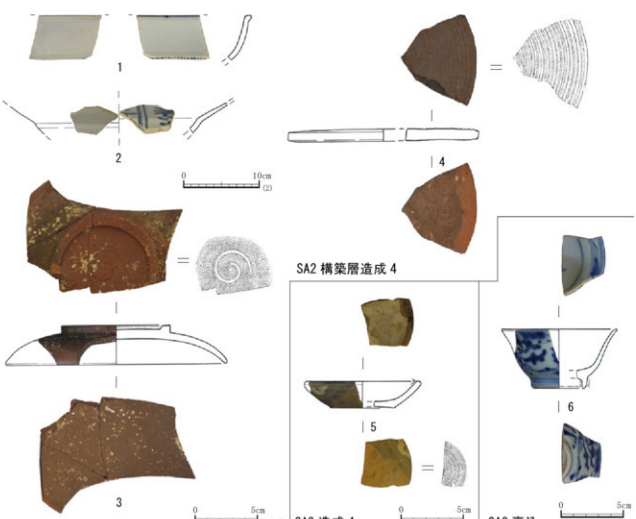
個々の遺物様相については第8表に記す。各遺物の参考文献等は本書末にまとめて記す。

第8表　近世2 ～ 3-A　出土遺物観察一覧a

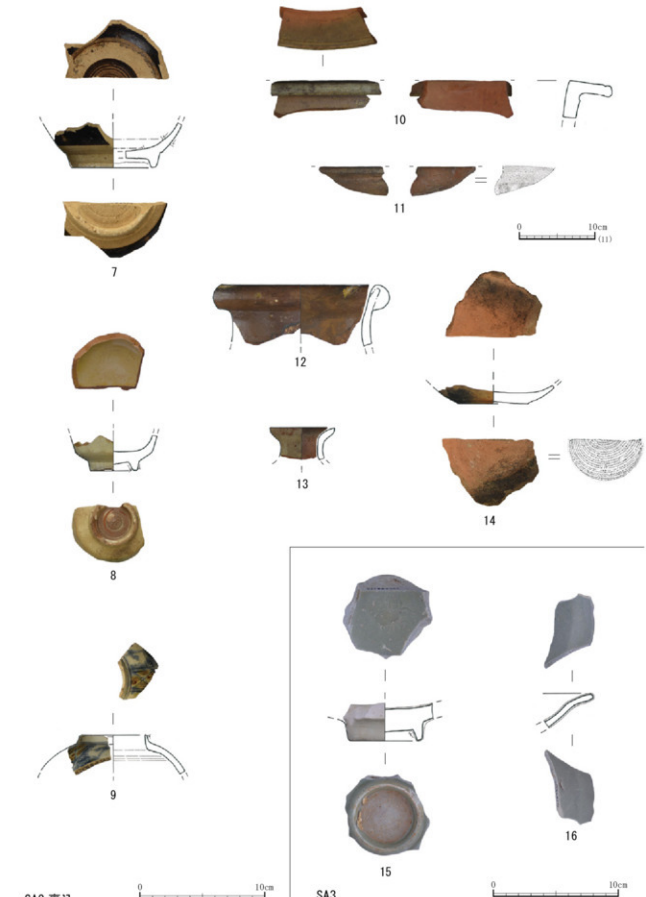
挿図番号	遺物番号	種類	器種	分類	部位	法量（cm）			観察事項	出土位置	
						口径	器高	底径		遺構	層序
第80図	1	本土産染付	鉢	－	口縁	－	－	－	口縁外反し、口唇部に圏線巡る。胎土灰白色で白色味がつよく、緻密。	SA2	構築層造成4
	2	本土産染付	大皿	磁器皿III期	胴部	胴径22.0	－	－	胴部で一度屈曲し、口縁まで延びる器形。芙蓉手文様。	SA2	構築層造成4
	3	初期沖縄産無釉陶器	蓋	－		17.6	3.1	8.6	ロクロ成形。内外面に多量の灰がかぶる。胎土に白色石英粒が混入。	SA2	構築層造成4
	4	初期沖縄産無釉陶器	蓋？	－		15.2	－	－	端部断面方形。上面にロクロ調整痕。胎土に白色石英粒が混入。上面全面は泥釉。下面の端部脇は露胎、それ以外は泥釉施釉。	SA2	構築層造成4
	5	中国産白磁	灯明皿	D´群	口～底	9.3	2.05	5.0	ロクロ成形。内面は施釉。口唇に煤付着。外面は上部施釉で一部露胎。底部中央がやや窪み、糸切痕。	SA2	造成4
	6	中国産青花	碗	－	口～底	9.2	4.7	4.0	口縁外反。畳付は釉剥ぎ。高台断面先端は逆三角形状。外面唐草文。胎土灰白色。釉は青味がかる。	SA2	裏込
第81図	7	沖縄産施釉陶器	碗	池田VI類	底部	－	－	6.8	外面腰部まで飴釉施釉。内面飴釉、見込み蛇の目釉剥ぎ、窯詰め痕。高台断面は逆台形状。畳付に耐火土付着。	SA2	裏込
	8	沖縄産施釉陶器	小碗	－	底部	－	－	3.8	高台内以外に白化粧土を塗り、全面に透明釉を施釉。畳付に耐火土付着。腰部が折れる器形。外面面取。	SA2	裏込
	9	沖縄産施釉陶器	急須	－	口縁	5.4	－	－	全面に白化粧土を塗り、外面には文様を線彫りする。呉須や飴釉を施し、透明釉を施釉。	SA2	裏込
	10	沖縄産無釉陶器	鉢	－	口縁	－	－	－	口縁断面逆L字状。口縁上部に圏線巡らす。	SA2	裏込
	11	沖縄産無釉陶器	擂鉢	－	口縁	－	－	－	口縁内面～口唇にかけてやや丸みをもつ器形。櫛目は7本前後。	SA2	裏込
	12	沖縄産無釉陶器	壺	－	口縁	14.0	－	－	口縁を外側に折り曲げて成形。口唇の一部に窯詰め痕。	SA2	裏込
	13	沖縄産無釉陶器	瓶	－	口縁	5.2	－	－	口縁外反し、舌状。徳利の口縁部の可能性あり。	SA2	裏込
	14	陶質土器	灯明皿	－	底部	－	－	5.6	ロクロ成形。底部糸切り痕。外面一部は底部脇まで煤付着。内面見込みまで一部煤付着。	SA2	裏込
	15	中国産青磁	碗	V類	底部	－	－	5.8	全面施釉後、高台内釉剥ぎ。見込みに印花文。高台内に窯詰め痕。	SA3	－
	16	中国産青磁	盤	－	口縁	－	－	－	口縁部で折れ、輪花型の口縁。口縁内面に薄く波状文。	SA3	－
第82図	17	中国産褐釉陶器	壺	5類	口縁	21.8	－	－	口縁断面方形状。口唇部は中央のみ施釉され、端部は露胎。	SA3	－
	18	沖縄産施釉陶器	碗	池田I類	口～底	13.8	6.2	6.4	フィガケ技法。直口口縁で高台断面逆台形状。畳付と見込み部に窯詰め時の砂付着。	SA3	－
	19	沖縄産無釉陶器	鉢	－	口縁	－	－	－	口縁断面逆L字状。口縁上部に圏線巡らす。	SA3	－
	20	陶質土器	器種不明	－	底部	－	－	4.4	ロクロ成形。わずかに高台があり、糸切痕。内面に窯詰め時の灰や砂が付着。	SA3	－
	21	明朝系瓦（灰色）	軒丸瓦	－	瓦当	－	－	－	范パリがやや残る。　上原：I Ba系　石井：牡丹文様II系	SA3	－
	22	明朝系瓦（赤色）	軒平瓦	－	瓦当	－	－	－	范パリ丁寧に成形。　上原：御茶III B01式（赤）石井：木曳門B系	SA3	－
	23	青銅製品	－	－		－	－	－	中央部に突起があり、その左右が穿孔。穿孔部は釘留用の穴か？外面全体に擦痕。	SA3	－
	24	青銅製品	－	－		－	－	－	円形で中央に突起。裏面から釘頭状のものが確認できることから、釘状のものが折れている状態だと考えられる。	SA3	－
第83図	25	中国産青花	皿	明II類	底部	－	－	10.0	内底がわずかにへこむ器形。畳付と畳付脇部は釉剥ぎ。高台横に文様。外面にはヘラ彫りで文様。見込みに草花文（牡丹）。	SA12・15間	II層
	26	本土産陶器	碗	陶器碗II期	底部	－	－	4.6	高台脇まで緑釉施釉。高台脇に削り。畳付平坦。高台見込みの削りの横断面形がアーチ状（饅頭心）で高台内の深さが高台脇より浅い。	SA12・15間	II層
	27	本土産陶器	皿	－	底部	－	－	5.6	腰部から屈曲して口縁部に延びる器形。外面胴部以下は露胎。畳付平坦。高台内の深さが高台脇より深い。内面全面施釉。	SA12・15間	II層
	28	沖縄産無釉陶器	擂鉢	－	底部	－	－	12.6	底部が高台状に残る。外底中央には糸切痕があるが、外底端は磨き調整。内面櫛目は密に施される。	SA12・15間	II層
	29	陶製煙管	煙管	陶首III類	雁首	－	－	－	沖縄産無釉陶器と同素材で作成。全面を研磨し、七角形に面取される。	SA12・15間	裏込
	30	中国産青磁	碗	IV類？	口縁	－	－	－	直口口縁で外面に太めの蓮弁文。鎬はほぼないが、蓮弁部はわずかに肥厚する。	SA14	造成4

第8表　近世2 ～ 3-A　出土遺物観察一覧b

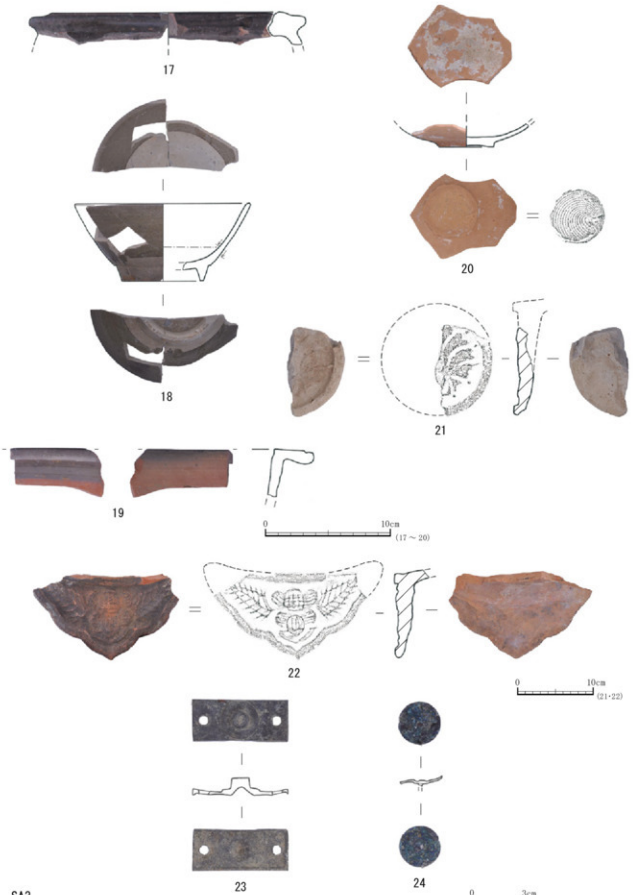
挿図番号	遺物番号	種類	器種	分類	部位	法量（cm）			観察事項	出土位置	
						口径	器高	底径		遺構	層序
第83図	31	中国産白磁	灯明皿	D群	口縁	12.6	－	－	胴部から口縁にかけてやや外側に開く器形。口縁外面の一部は使用のためか軸が剥がれる。口唇部には煤付着。	SA14	造成4
	32	中国産青磁	碗	Ⅴ類	口縁	－	－	－	口縁が肥厚し外反する。無文。内外面に貫入。	SA24北	造成8
	33	中国産青白磁	蓋	－	－	－	－	－	外面明緑灰白色軸を施軸、貫入あり。底部端は露胎。内面は露胎。	SA24南	－
	34	中国産青磁	碗	Ⅴ類	口縁	－	－	－	直口口縁。ヘラ彫りで雷文。その下部に草花文か。	SA25北	－
	35	中国産青花	瓶	－	底部	－	－	5.0	内外面施軸、畳付と畳付脇は軸剥ぎ。高台断面は逆三角形状で内削り高台。外面には蓮弁文。	SA25	－
第84図	36	明朝系瓦（褐色）	軒平瓦	－	瓦当	－	－	－	范ハリ丁寧に成形。 上原：御茶園B01式（赤）石井：木曳門B系	SS28	埋土
	37	明朝系瓦（赤色）	軒平瓦	－	瓦当	－	－	－	破片資料で文様は花芯と葉が確認できる。	SS28	埋土
	38	明朝系瓦（赤色）	軒平瓦	－	瓦当	－	－	－	破片資料で文様は花芯と葉が確認できるが不鮮明。	SS28	埋土
	39	陶製煙管	煙管	陶言Ⅱ類	雁首	－	－	－	沖縄産施軸陶器と同素材で作成。緑軸施軸。面取はなく丸みをもつ。	SS28	－



第 80 図　近世 2 ～ 3-A の遺構出土遺物 1

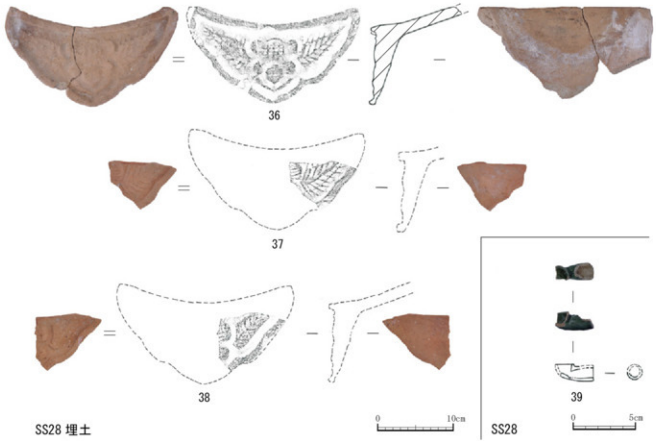


第 81 図　近世 2 ～ 3-A の遺構出土遺物 2



第 82 図　近世 2 ～ 3-A の遺構出土遺物 3

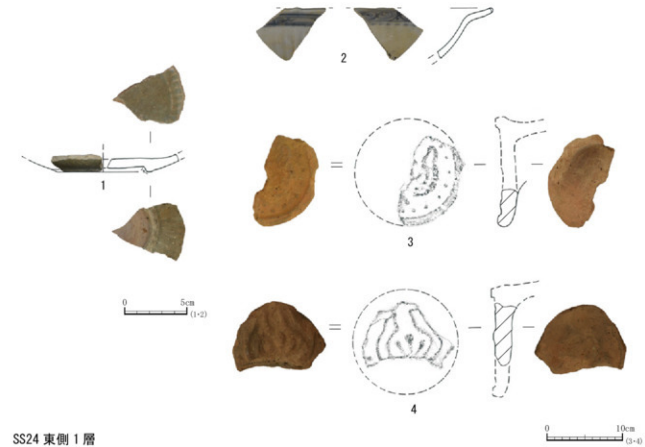
第 83 図　近世 2 ～ 3-A の遺構出土遺物 4



第 84 図　近世 2 ～ 3-A の遺構出土遺物 5

第9表　近世2 ～ 3-B　出土遺物観察一覧

挿図番号 遺物番号		種類	器種	分類	部位	法量（cm） 口径	器高	底径	観察事項	出土位置 遺構	層序
第85図	1	中国産青磁	盤	—	底部	—	—	7.2	全面施釉後、高台内を輪剥ぎ。外面蓮弁文。内面にヘラ彫り。	SS24	東側1層
	2	中国産青花	皿	—	口縁	—	—	—	口縁部が屈曲し外反。輪花形に成形。内面口縁に唐草文。	SS24	東側1層
	3	明朝系瓦（褐色）	軒丸瓦	—	瓦当	—	—	—	荒パリ成形丁寧。上原：首西ⅠAe2-1式、円覚ⅠAe01式　石井：西のアザナH系	SS24	東側1層
	4	明朝系瓦（褐色）	軒丸瓦	—	瓦当	—	—	—	上原：首西ⅠAe2-1式、円覚ⅠAe01式　石井：西のアザナH系	SS24	東側1層
	5	中国産青磁	皿	—	口縁	7.2	—	—	底口口縁、内面に鎬蓮文。	SS24	—
	6	中国産青花	碗	明Ⅲ類	底部	—	—	推定 4.6	畳付心の碗。見込みには草花文（牡丹）。外底は中央に四角文を描き、その4方に文字を描き、銭貨の模倣文様か。	SS24	—
	7	明朝系瓦（灰色）	軒平瓦	—	瓦当	—	—	—	荒パリ成形丁寧。上原：大界ⅠAa03式　石井：西のアザナB系	SS24	—
	8	明朝系瓦（褐色）	軒平瓦？	—	瓦当	—	—	—	粘土塊状の上部のみに瓦当作成。上部には隅部との接着部がある。	SS24	—



第 85 図　近世 2 ～ 3-B の遺構出土遺物

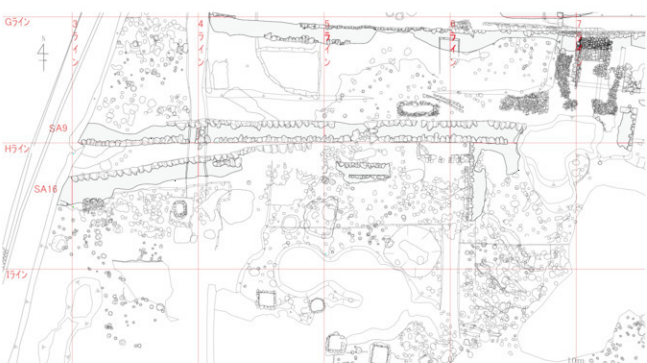
第４項　近世3（中城御殿創建～17世紀代）

A：遺構

SA9（SA9・16間）・16

Ⅳ区とⅤ区の境目で検出した石積み遺構。SA9は東西に延びる石積みで、SA16は斜めに重なるようにSA9にぶつかる。SA9とSA16の前後関係は、下層確認などを行ったが、どちらも造成5上に根石が確認できたため、判然としなかった。建物の建て替えに伴い形成されたものであり、SA9が東西に続いており、SA16が途中で途絶える状況からSA16の形成が古い可能性がある。石積みの天端が残存しておらず、当初の石積みの高さは不明であるがSA16の一部では裏込め土が残存しているため、おおよその高さの想定は可能である。

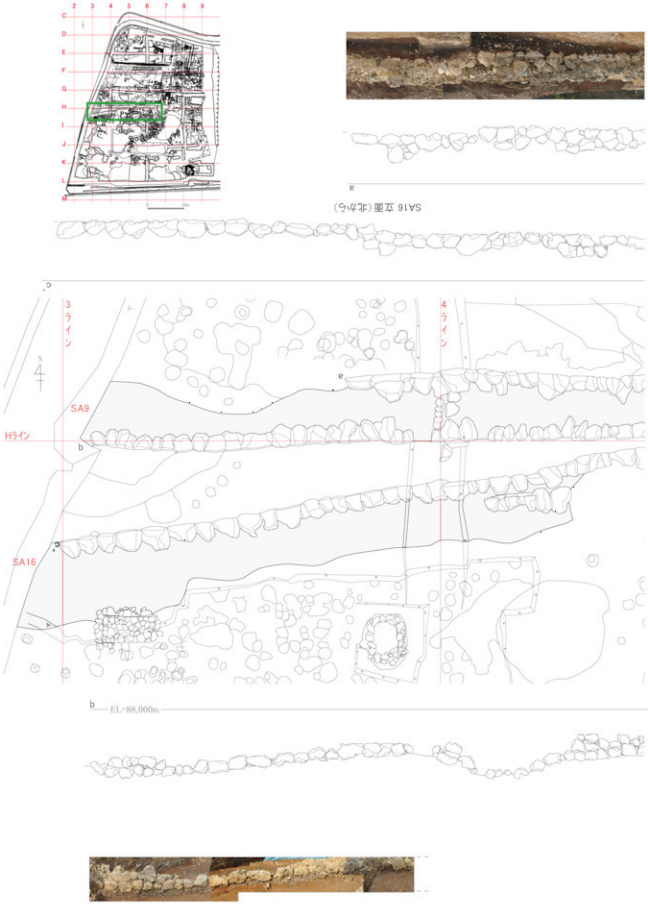
SA9は北側と南側にそれぞれ石積み面を持っているので、土留としての石積みではなく、平場に屋敷区画としての役割をもった石積みである可能性が高い。また、この石積み周辺は削平を受け、建物跡に関する遺構を確認することが出来ないため、様相については判然としない。



第86図 近世3の遺構1

SA9 検出状況（北東から）

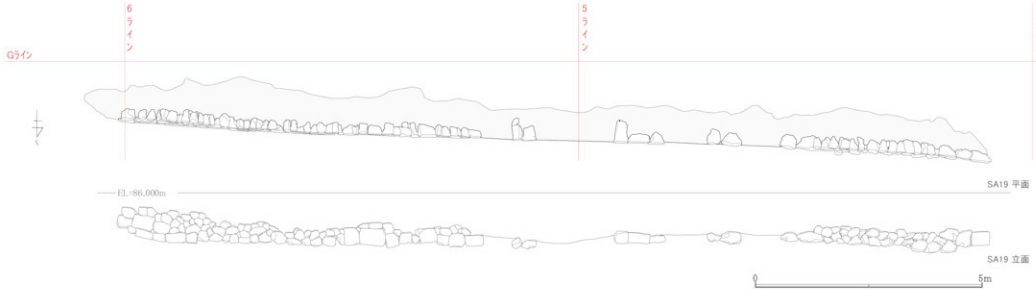
SA16 検出状況（北西から）



第87図 近世3の遺構2

SA9 立面（北から）

SA9立面（南から）



SA19 検出状況（北から）

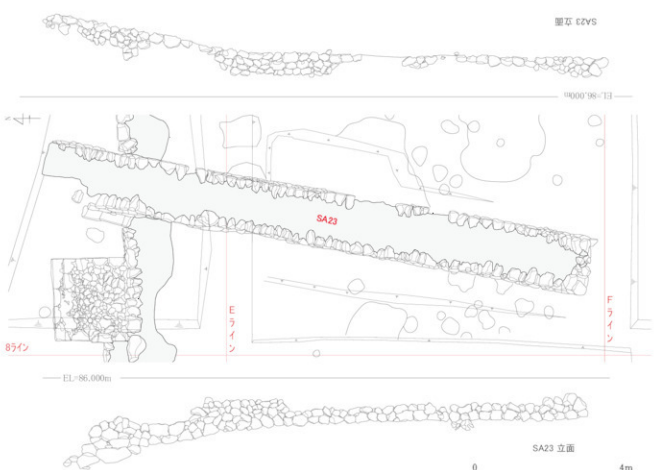
SA19

Ⅲ区の造成4を掘削後に検出された石積み遺構である。この石積み遺構は岩盤上や造成6上に根石が形成されている。また造成6を掘削すると岩盤が検出されるため、これらの石積みを形成するにあたり、岩盤まで掘削し、その後造成を行い、石積みを形成している。

SA19 検出状況（北東から）

SA23

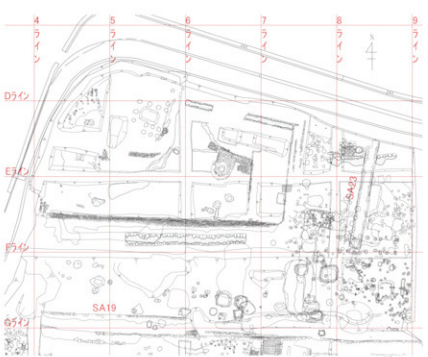
Ⅱ区で南北に延びる石積み遺構である。造成6や造成7上に根石が形成されている。東側と西側に面をもつ石積みがあるため、区画などの役割をもつ石積みであったと考えられる。北側の一部では、グスク時代の石積み（SA31、32、35）を埋める形で形成されている部分もある。この石積みと関連する遺構は判然としない。



第88図 近世3の遺構3

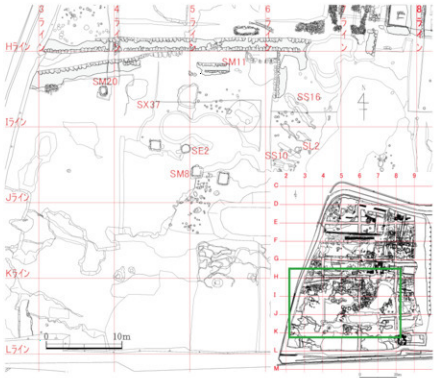
SA23 検出状況（北東から）

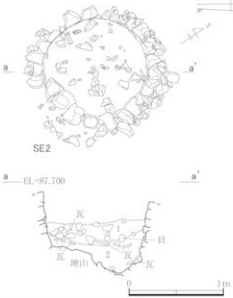
SA23 検出状況（北西から）



SE2

V区で検出した円形の石組土坑である。当初その形態から井戸遺構であると想定していたが、掘削を進めると地山面で掘り込みが終了しており、他の井戸遺構のようにクチャ層まで掘り込みがないことから石組土坑であると判断した。遺構内部には、瓦や石灰岩礫などが多量に混入している。床面は素掘りである。





第89図 近世3の遺構4

SE2 完掘状況（南から）

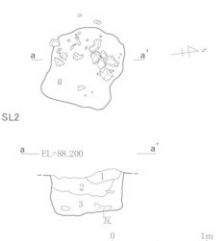
SE2 検出状況（南から）

SE2 半裁状況（南から）

図版14 近世3の遺構1

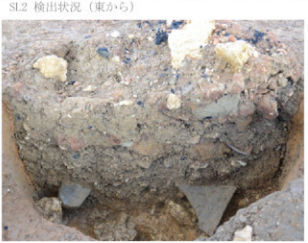
SL2

検出した当初は不定形の遺構であったが、掘削を進めると一部で円形になる遺構であることが判明した。埋土上部にはクチャブロックや炭、焼土塊などが混入していることから炉跡と考えていた。しかし、上層と下層では堆積している土が異なることから、炉跡としての機能を考えることが困難であった。また周辺遺構との関連も不明である。



第90図 近世3の遺構5

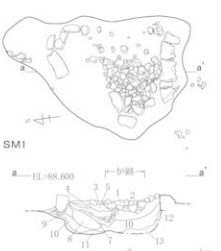
SL2 検出状況（東から）



SL2 半裁状況（東から）

SM1

検出当初は不定形で、石列や集石があった。掘削を進めると集石は上部のみに集中しており、下部は別の土が堆積している。また、石列内部が掘り込まれている状況が確認できたことから、方形石組土坑であると想定することができた。埋土にはレンズ状堆積がいくつも重なっていることから、何度かに分けて掘り起こし、また土を廃棄した痕跡がある。
このことは、捨てたものを何度か回収している様子を示すことから、何らかの廃棄土坑で繰り返し使用した可能性が高い。

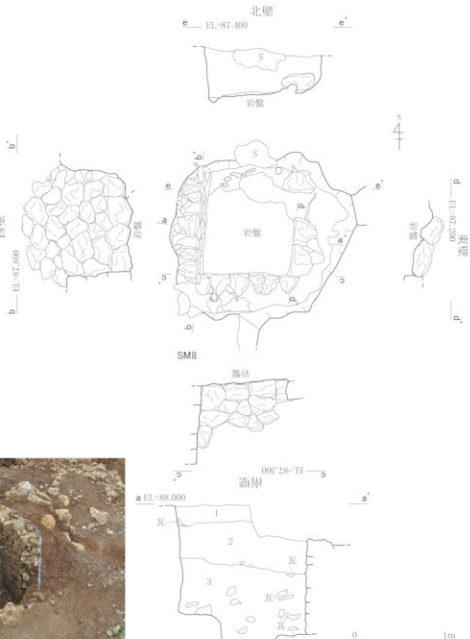


第91図 近世3の遺構6

SM1 半裁状況（西から）

SM8

地山および岩盤を掘り込んだ石組土坑である。埋土は上部と下部で様相がことなるため、3層堆積後、時期差があり埋まったものと思われる。下部には灰色瓦が大量に出土している。遺構床面は素掘りで岩盤が露出している。遺構内部の土は石灰岩礫や瓦などが混入している状況であり、何度も繰り返し使用した痕跡はうかがえない。この状況から考えると、遺構を使用していた時は、内部には土などがほとんどない状態で、機能終了後に瓦などを土と一緒に埋めたことが想定できる。



第92図 近世3の遺構7

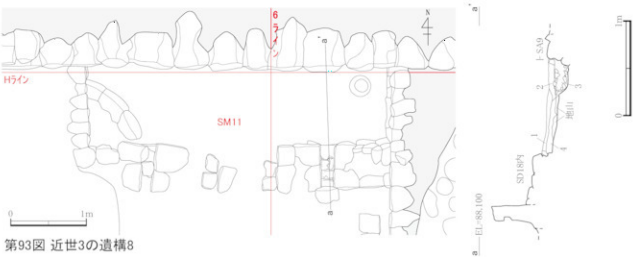
SM8 検出状況（北東から）

SM8 完掘状況（北東から）

SM8 半裁状況（北から）

SM11

長方形状の石組土坑で、SA9に隣接するような形で形成されている。長方形状であるが石積みに囲われた状態で使用していた遺構ではないと考えられる。この遺構は一部でグスク時代の層に根石があることから、当該時期に位置づけているが、何度か改修などが行われている痕跡がある。溝状遺構とつながり、その部分に石留部分も存在する。この部分は遺構内でも大きな石積みが積み直されていることから、近世以降に付け足された遺構だと考えられる。

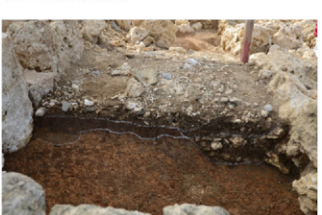


第93図 近世3の遺構8

SM11 検出状況（北西から）

SM11 石留部（北から）

SM11 石留部半裁状況（東から）

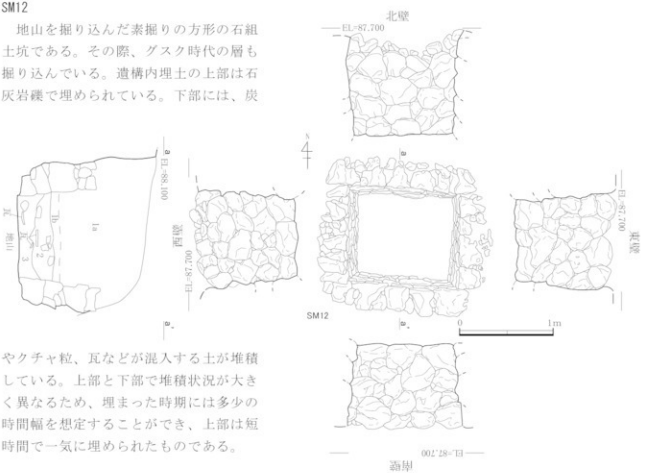


SM11 半裁状況（東から）

図版15 近世3の遺構2

SM12

地山を掘り込んだ素掘りの方形の石組土坑である。その際、グスク時代の層も掘り込んでいる。遺構内埋土の上部は石灰岩礫で埋められている。下部には、炭やクチャ粒、瓦などが混入する土が堆積している。上部と下部で堆積状況が大きく異なるため、埋まった時期には多少の時間幅を想定することができ、上部は短時間で一気に埋められたものである。



第94図 近世3の遺構9

SM12 検出状況（南から）

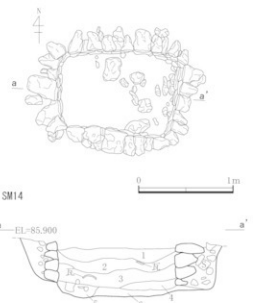
SM12 半裁状況（西から）

SM12 完掘状況（北から）

SM12 断ち割り状況（西から）

SM14

造成土と地山を掘り込んだ隅丸方形状の石組土坑である。埋土は石灰岩礫などが混入した土が堆積している。堆積土はレンズ状に堆積している。掘り返した痕跡などは確認できなかった。



第95図 近世3の遺構10

SM14 検出状況（北から）

SM14 半裁状況（北から）

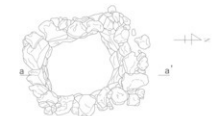
SM14 完掘状況（北から）

SM14 断ち割り状況（南から）

図版16 近世3の遺構3

SM20

グスク時代の土と地山を掘り込んだ隅丸方形状の石組土坑である。埋土には炭や石灰岩礫などが混入している。堆積土はわずかにレンズ状堆積をしている。掘り返した痕跡などは確認できなかった。



SM20 検出状況（北から）

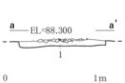
第96図 近世3の遺構11

SS10

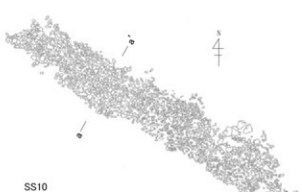
石灰岩礫を敷き詰めた遺構である。幅40cmでほぼ長方形状に広がる。この石敷の厚さは非常に薄く、周辺にもSS16が確認され、関連する遺構と考えられる。歩道として使用していた可能性もあるが、判然としない。掘り込みなどは確認できず、グスク時代の土の上部に敷き詰められている。

SS10 検出状況（北から）

SS10 半裁状況（南東から）

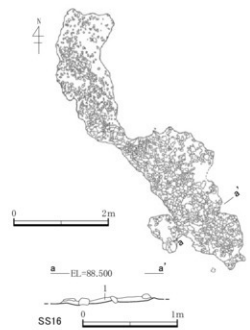


第97図 近世3の遺構12



SS16

SS10と同様、石灰岩礫を敷き詰めた遺構である。SS16は不定形な遺構だが、元は長方形状の遺構であったと想定される。用途はSS10と同様で、歩道であった可能性が高い。



第98図 近世3の遺構13

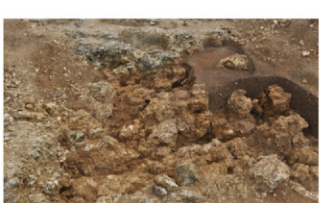
SS16 検出状況（南西から）

SS16 半裁状況（南東から）

SS17

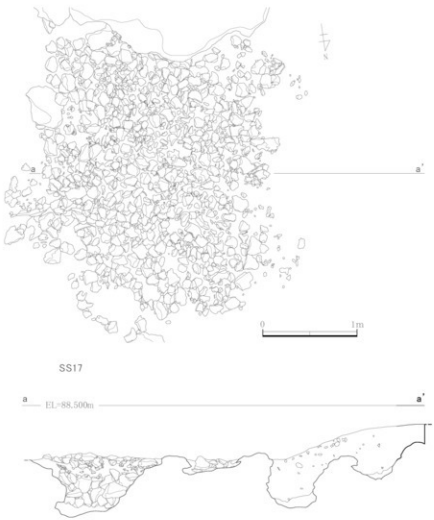
岩盤の窪み部分で検出した集石遺構である。上部一面には比較的小型の石があるが、一枚堆積土を挟んだ下部には大きめの石が窪み部分に充填している。石灰岩の窪みを埋めるように充填されているため、この部分を平たく整形した痕跡である可能性が高い。この遺構周辺には洞穴遺構もあることから、洞穴まで続く道としての用途が考えられるが、周辺に造成土や遺構が残存していないため直接関連を示すことは困難である。

SS17 検出状況（北から）



SS17 完掘状況（北から）

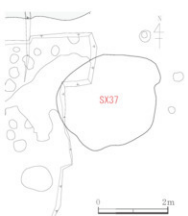
SS17 完掘状況（北から）



第99図 近世3の遺構14

SX37

素掘りの円形で深さが1.5m以上ある不明遺構である。クチャまで掘り込んで形成されている土坑である。堆積状況から、何度か土をすくっている痕跡がある。炭などの有機物などの混入は少ないが、何度か掘り返している状況を考慮すると、廃棄土坑である可能性が高い。



第100図 近世3の遺構15

SX37 半裁状況1（南東から）

SX37 半裁状況2（南東から）

B：遺物

近世3の遺構は、中城御殿跡創建前後～17世紀までの段階である。出土遺物は16世紀代～17世紀代の遺物が出土している。遺構の中には、16世紀代の遺物組成を示すものもあるが、石積み構築層などの基礎となる層からの出土遺物も含まれる。遺構の検出状況などから当該時期に位置づけた。

個々の遺物様相については第10表に記す。各遺物の参考文献等は本書末にまとめて記す。

第10表　近世3　出土遺物観察一覧a

挿図番号	遺物番号	種類	器種	分類	部位	法量（cm）			観察事項	出土位置	
						口径	器高	底径		遺構	層序
第101図	1	中国産青磁	碗	Ⅴ-2類	口縁	14.6	―	―	直口口縁、ヘラ彫りで雷文。胎土灰色で粗粒子。	SA9	構築層
	2	中国産青磁	碗	Ⅴ-3類	口縁	―	―	―	外反口縁、内外面にヘラ彫り文様。胎土灰白色で緻密。	SA9	構築層
	3	中国産青磁	碗	Ⅵ-1類	口縁	―	―	―	直口口縁、外面に細刻蓮弁文。胎土灰白色でやや粒子粗い。	SA9	構築層
	4	中国産青磁	碗	Ⅴ類	底部	―	―	6.8	胎土灰白色で緻密。全面施釉後、高台内を釉剥ぎ。高台内に窯詰め痕。見込みに圏線。破損しており見込みの印花文は不鮮明。	SA9	構築層
	5	中国産青磁	碗	Ⅴ類	底部	―	―	7.6	胎土灰白色で緻密。全面施釉後、高台内を蛇の目釉剥ぎ。釉剥ぎ部に窯詰め痕。畳付は変色。見込みに印花文。	SA9	構築層
	6	中国産青磁	皿	Ⅴ類？	口縁部	11.4	―	―	直口口縁。内面に蓮弁を描き、弁先が接しない。胎土灰白色で緻密。	SA9	構築層
	7	中国産青磁	皿	Ⅴ類	口～底	8.2	2.8	4.6	外反口縁。全面施釉後、高台内を釉剥ぎ。見込みに印花文。胎土灰色で緻密。	SA9	構築層
	8	中国産青磁	皿	Ⅴ類	底部	―	―	4.8	全面施釉後、高台内蛇の目釉剥ぎ。見込みに印花文。胎土灰白色で粗粒子。	SA9	構築層
	9	中国産青磁	擂鉢	―	口縁部	―	―	―	外反口縁。内面口縁下部は露胎。4本前後の櫛目を基本として密に施す。胎土灰オリーブ色。	SA9	構築層
第102図	10	中国産白磁	皿	D'群	底部	―	―	4.6	新垣福建E類　内底及び外面腰部以下は露胎。高台断面は逆台形で畳付の外縁を削る。見込みを削り、中央は突起状に残存。	SA9	構築層
	11	中国産白磁	灯明皿	D'群	口縁部	8.6	―	―	ロクロ成形。胴部から口縁にかけて外側に開く。口唇釉剥ぎ。内面施釉。外面口縁以下は露胎。	SA9	構築層
	12	中国産白磁	皿	E群	底部	―	―	9.8	畳付釉剥ぎ。畳付に窯詰め痕。高台断面は逆三角形状。内外面に煤？付着。	SA9	構築層
	13	中国産白磁	皿	D群	底部	―	―	4.6	抉り高台。内底に目跡3か所確認できる。内面全面施釉。外面腰部から高台内は露胎。外面一部高台まで施釉。	SA9	構築層
	14	中国産青花	皿	明Ⅱ-1類	底部	―	―	5.4	畳付釉剥ぎ。高台細い。見込みに圏線、文様あり。玉取獅子文か。	SA9	構築層
	15	中国産青花	碗	明Ⅰ-1類	底部	―	―	5.6	畳付及び高台途中から釉剥ぎし、畳付平坦でやや内削り。高台断面は逆台形状。高台内は高台脇より深い。見込みに圏線、文様あり。	SA9	構築層
	16	中国産青花	皿	明Ⅱ-1類	口縁部	―	―	5.8	畳付釉剥ぎ。外面唐草文。見込みに十字文。高台低く、腰部が折れる。高台内に窯詰め時の砂付着。	SA9	構築層
	17	中国産青花	蓋	―		4.6	―	―	合子の蓋か。内面露胎で外面は縁まで施釉。蓋接地面は平坦。	SA9	構築層
	18	中国産青花	瓶	―	頸部	―	―	―	頸部資料で蓮弁が描かれる。頸部が太く、胴部にいくにつれ薄くなる。	SA9	構築層
	19	中国産瑠璃釉	壺	―	底部	―	―	7.4	外面瑠璃釉、内面透明釉。畳付は釉剥ぎ。畳付と高台内に窯詰め時の砂付着。	SA9	構築層
	20	中国産褐釉陶器	壺	5類	口縁	19.6	―	―	口縁断面方形状。	SA9	構築層
	21	中国産褐釉陶器	壺	5類？	口縁	17.2	―	―	口縁断面逆L字状。頸部があるもの。	SA9	構築層
	22	タイ産陶器	合子（身）	―		―	―	―	畳付部が丸く、やや高台内に傾く。畳付の一部に煤？付着。	SA9	構築層
第103図	23	中国産三彩	皿	―	口～底	15.8	3.1	9.4	口縁部が開く腰折れ皿。口唇断面は方形状。畳付は釉剥ぎ。高台断面形は逆三角形状。全面白化粧土を施し、その上から外面は緑釉を施す。高台内は黄色釉。	SA9	構築層
	24	本土産陶器	擂鉢	―	口縁	18.8	―	―	口縁内彎し、先端尖る。外面口縁下部に一条の沈線巡る。9本前後の櫛目を内面に施す。	SA9	構築層
	25	坩堝	―	―	底部	―	―	3.0	底部が平たく成形された坩堝。外面には灰白色と薄緑色のガラス質が付着。内部は変色。残存状況が良く、強固。	SA9	構築層
	26	鉄製品	釘	―	釘頭～軸	―	―	―	断面方形状の釘。釘頭部と先端部は錆膨れのため形状不明。	SA9内	Ⅱ層
	27	玉	ガラス玉	Ⅰ類、緑色	―	―	―	―	色ガラス製。孔を中心とする巻き付け痕あり。	SA9内	―
	28	本土産陶器	擂鉢	―	口縁	―	―	―	口縁逆くの字状で、口縁外面に稜をもつ。内面にロクロ痕が顕著に残り、外面口縁下部はロクロ痕の上から成形。口縁稜下部と口唇が釉が剥がれ、重ね焼きの痕跡。	SA9・16間	SA9・16構築層
	29	中国産青磁	碗	Ⅴ-2類	口縁	―	―	―	直口口縁、ヘラ彫りで雷文。内面にも文様描く。胎土灰白色で緻密。	SA9・16間	造成5
	30	中国産青磁	碗	Ⅵ類？	底部	―	―	5.4	全面施釉後、高台内釉剥ぎ。底部部分の胎土は焼成不良。見込みに印花文。	SA9・16間	造成5

第10表　近世3　出土遺物観察一覧b

挿図番号	遺物番号	種類	器種	分類	部位	法量（cm）			観察事項	出土位置	
						口径	器高	底径		遺構	層序
第103図	31	中国産青磁	皿	V類	底部	―	―	5.8	全面施釉後、高台内の畳付脇から高台内は露胎。畳付の一部も釉が剥がれる。腰部が折れる。	SA9・16間	造成5
	32	中国産白磁	碗	E群	底部	―	―	5.6	畳付釉剥ぎ。高台内の深さが高台脇より深い。外底はほぼ平坦。胎土は灰白色で緻密。白色味が強い。	SA9・16間	造成5
	33	瓦質土器	擂鉢	―	口縁	―	―	―	逆くの字状口縁。口縁断面は方形状。	SA9・16間	造成5
	34	中国産褐釉陶器	壺	5類	口縁	19.2	―	―	口縁断面が方形状。頸部が短いもの。	SA9・16間	造成5
	35	中国産褐釉陶器	壺	4類	口縁	―	―	―	ほぼ無頸部。口縁断面は玉縁状。口唇部は釉剥ぎか。	SA9・16間	造成5
	36	タイ産褐釉陶器	壺	―	口縁	14.8	―	―	口縁がラッパ状に開く器形。端部はやや玉縁状。	SA9・16間	造成5
	37	中国産瑠璃釉	瓶	―	頸部	―	―	―	外面瑠璃釉、内面透明釉の掛け分け。ロクロ成形で各部に調整稜が残る。	SA9・16間	造成5
	38	中国産白磁	灯明皿	D'群	底部	―	―	3.6	ロクロ成形で底部糸切痕。内面施釉され、外面露胎。	SA9・16間	造成5
第104図	39	明朝系瓦（灰）	軒丸瓦	―	瓦当	―	―	―	笵バリ成形丁寧。上原：天界ⅠAd03～04系　石井：天界寺B系	SA9・16間	造成5
	40	中国産青磁	碗	VI類	底部	―	―	5.0	胎土灰白色で灰色味がつよい。全面施釉後、高台内の一部や畳付の一部を釉剥ぎ。高台内に窯詰時の砂が残る。	SA16	裏込
	41	中国産青花	皿	明Ⅱ-1類	底部	―	―	6.4	全面施釉後、畳付釉剥ぎ。畳付に窯詰め時の砂付着。内面被熱か。玉取獅子文。	SA16	裏込
	42	タイ産褐釉陶器	壺	―	口縁	9.6	―	―	ラッパ状に開く器形。口縁断面は三角形状だがやや丸みをもつ。口唇部には稜を持つ。	SA16	裏込
	43	陶質土器	火炉	―	口縁	―	―	―	逆L字状に口縁内彎し、端部は丁寧にナデ。	SA16	裏込
	44	明朝系瓦（褐）	軒平瓦	―	瓦当	―	―	―	笵バリ成形丁寧。上原：首御庭・奉神ⅠAd01式　石井：木曳門①	SA16	裏込
	45	明朝系瓦（灰）	軒平瓦	―	瓦当	―	―	―	笵バリ僅かに残る。上原：天界ⅠAe01式　石井：湧田古窯H系	SA19	裏込
	46	明朝系瓦（赤）	軒平瓦	―	瓦当	―	―	―	笵バリ僅かに残る。上原：草花文側視2型ⅠAa式　石井：浦添城A	SA19	裏込
第105図	47	中国産青磁	碗	VI類	底部	―	―	6.0	胎土灰白色。全面施釉後，高台内を蛇の目釉剥ぎするが、一部剥ぎ残しあり。見込みに梵字文。	SA23	造成2
	48	中国産青花	碗	明Ⅲ類	口縁	11.6	―	―	外反口縁。外面草花文か。	SA23	造成2
	49	中国産青花	碗	明Ⅱ-1類？	口縁	―	―	―	直口口縁。口縁外面に雷文。	SA23	造成2
	50	中国産青磁	碗	VI類？	底部	―	―	5.4	胎土にぶい橙色で釉の発色悪い。全面施釉後、高台内を全面釉剥ぎ。畳付に窯詰め痕。見込みに印花文か。	SA23	裏込
	51	中国産白磁	碗	―	底部	―	―	6.5	外面高台脇まで施釉され、他は露胎。畳付は平坦、畳付脇を抉る。高台内の削りは中央が突起状に膨らむ。見込みは蛇の目釉剥ぎ。	SA23	裏込
	52	中国産白磁	碗	D'群	口縁	―	―	―	内面口縁に稜をもち、僅かに外反し口縁端に稜をもつ。外面腰部以下及び内面見込み部は露胎。	SA23	裏込
	53	中国産青花	皿	明Ⅱ-2類	口～底	12.0	2.8	3.7	碁笥底の皿。畳付は釉剥ぎされ、窯詰め痕。直口口縁。見込みに崩れた十字文。外面は草文か。	SA23	裏込
	54	中国産褐釉陶器	壺	5類	口縁	―	―	―	口縁断面方形状。頸部は八の字に広がる器形。	SA23	裏込
	55	明朝系瓦（赤）	軒丸瓦	―	瓦当	―	―	―	厚みがある瓦当。上原：草花文側視1型ⅠAe式系　石井：西のアザナH系	SA23	裏込
	56	中国産青磁	碗	VI-1類	口縁	―	―	―	胎土灰白色。直口口縁。外面に線刻蓮弁で弁先が接しない。内面にも文様あり。	SA23	裏込
	57	中国産青磁	碗	V-3類	口縁	―	―	―	胎土灰白色。直口口縁。口縁外面にヘラ彫りの雷文。	SA23	埋土
第106図	58	中国産青磁	碗	VI類？	底部	―	―	5.3	胎土灰白色で灰色味がつよい。全面施釉後、畳付と高台内を釉剥ぎ。	SA23	埋土
	59	中国産白磁	皿	―	底部	―	―	6.2	高台低く、広い。高台脇は削り丁寧だが、腰部は粘土削り痕が残る。畳付は平坦。見込みは蛇の目釉剥ぎ。	SA23	埋土
	60	中国産白磁	皿	E群	底部	―	―	9.4	全面施釉後、畳付釉剥ぎ。	SA23	埋土

第10表　近世3　出土遺物観察一覧c

挿図番号	遺物番号	種類	器種	分類	部位	法量（cm） 口径	器高	底径	観察事項	出土位置 遺構	層序
第106図	61	中国産青花	碗	―	底部	―	―	5.6	全面施釉後、畳付及び高台内側の一部を釉剥ぎ。畳付に窯詰め時の砂付着。腰部が折れる器形。腰の一部に窯詰め痕。	SA23	埋土
	62	中国産青花	皿	福建・広東系	底部	―	―	4.8	全面施釉後、畳付釉剥ぎ。見込みは蛇の目釉剥ぎ。高台先端は外削り。高台釉剥ぎ部は変色。外面腰部に一部釉が剥がれかけている部分あり。	SA23	埋土
	63	中国産青花	碗	明Ⅱ-1類	底部	―	―	6.6	全面施釉後、畳付釉剥ぎ。高台先端は外削り。	SA23	埋土
	64	土器	壺	―	口縁部	16.8	―	―	頸部から口縁にかけて直口し、肩部が開く器形。外面は斜め方向にナデ成形、一部には指頭圧痕が残り、口縁は一部表面が剥がれ、変色。内面口縁から頸部までナデ整形。頸部以下は指頭圧痕。	SA23	埋土
	65	明朝系瓦（灰色）	軒丸瓦	―	瓦当	―	―	―	范バリはやや残り、厚手。上原：湧田ⅡA01式　石井：天界寺A	SA23	裏込
第107図	66	本土産陶器	碗	陶器碗 Ⅰ-1･2期	口～底	11.2	6.0	4.2	ロクロ成形でロクロ痕顕著。外反口縁で天目状。内面全面施釉されるが、外面腰部まで施釉。腰部以下には釉垂れ。高台は浅く、高台内はアーチ状に削り。	SE2内	（半裁）1層
	67	中国産青磁	碗	Ⅴ類	底部	―	―	7.4	大振りの碗。全面施釉後、高台内を蛇の目釉剥ぎ。高台内施釉部に窯詰め痕。内面に文様あるが詳細不明。	SE2	2層
	68	中国産白磁	碗	―	底部	―	―	7.2	ロクロ成形。畳付と腰部の一部は釉剥ぎ。畳付脇は僅かに抉り。畳付と畳付脇に窯詰め時の砂付着。内面見込みは全面釉剥ぎ。窯詰め時の砂付着し、一部は楕円形上の黒色痕。	SE2	2層
	69	中国産白磁	皿	D´群	口～底	9.8	3.1	4.2	ロクロ成形。直口口縁で舌状。高台から腰部は釉剥ぎ。畳付脇は僅かに抉り。腰部の一部に煤付着。内面見込みは全面釉剥ぎ。窯詰め時の砂付着。内外面に大粒の釉垂れ。	SE2	2層
	70	中国産青花	碗	明Ⅲ類	底部	―	―	5.0	全面施釉後、畳付釉剥ぎ。内面見込みに魚文。外面腰部に呉須で波を表現か。胴部は線彫りで青海波文。外底内に銘款。	SE2	2層
	71	中国産褐釉陶器	壺	―	口～底	10.0	15.0	9.0	口縁部は丸みをもつ。外面にはロクロ成形痕が残る。内面無釉で外面は腰部まで施釉。底部中央はやや窪む。歪みのある壺。	SE2	2層
第108図	72	初期沖縄産無釉陶器	碗	―	口～底	12.8	5.7	6.1	直口口縁で舌状。底部に円盤状粘土を貼付し、内刳りを削り出す。畳付は平坦に成形。外面の一部は泥釉で薄紫色に発色。口唇合わせ口。内面にサンゴ目か。	SL2	2層
	73	初期沖縄産無釉陶器	擂鉢	―	底部	―	―	8.6	胎土に白色石英粒子が筋状に混入。内面櫛目が密に施される。側面の一部は使用により摩耗。外底に窯ｸｿ付着。外面腰部に窯詰め痕。外面の一部が泥釉で薄紫色に発色。	SL2	―
	74	沖縄産施釉陶器	鍋	―	底部	―	―	7.0	底部平底で露胎。腰部より上部は飴釉施釉。内面は透明釉が施釉され、見込みは蛇の目釉剥ぎ。	SM1	―
	75	円盤状製品	―	―	―	―	―	―	沖縄産施釉陶器碗を用いて製作。	SM1	―
	76	中国産青花	碗	明Ⅲ類	口～底	11.7	6.1	5.0	饅頭心碗。全面施釉後畳付釉剥ぎ。外面には2人の人物文を2セット施文。見込みに人物文。外底内に銘款。	SM8	1層
	77	中国産青磁	碗	Ⅵ-0類	口～底	12.8	7.0	4.6	全面施釉後、高台内を釉剥ぎ。直口口縁。釉の塗りがまだらで、発色が悪い。外面に線刻蓮弁文があるが不鮮明。	SM8	3層
	78	中国産白磁	碗	―	口縁部	12.4	―	―	ロクロ成形。直口口縁。外面に線刻文。	SM8	3層
	79	中国産白磁	碗	D’群	底部	―	―	5.2	外面腰部以下は釉剥ぎ。畳付は平坦で畳付脇を抉る。内面全面釉剥ぎされ、釉剥ぎ部に蛇の目状に窯詰め痕付着。	SM8	3層
第109図	80	中国産白磁	皿	D群	口縁	15.0	―	―	ロクロ成形。直口口縁。釉は黄味がかり、胎土が軟質。	SM8	3層
	81	中国産白磁	灯明皿	D’群	口～底	8.2	2.2	3.2	ロクロ成形。直口口縁で玉縁状。外底中央は窪む。外面全面露胎。内面施釉後、口唇から口唇脇を釉剥ぎ。口唇に煤付着。	SM8	3層
	82	中国産青花	碗	明Ⅱ-2類	口縁	11.4	―	―	直口口縁。外面口縁に波涛文、胴部にアラベスク風文。	SM8	3層
	83	中国産青花	皿	明Ⅱ-2類	口縁	10.2	―	―	直口口縁。外面口縁に波涛文、胴部に芭蕉文。内面に花文か。	SM8	3層
	84	中国産青花	皿	明Ⅱ類	口～底	9.4	2.5	4.2	高台をもつ端反皿。全面施釉後畳付けと高台内の一部を釉剥ぎ。高台内には鉋痕。内外ともに釉の発色悪く、文様不鮮明。見込みは十字文か。	SM8	3層
	85	中国産青花	杯	―	口～底	5.65	3.25	2.3	高台細く、畳付釉剥ぎ。外反口縁。外面に鳥と木が描かれる。見込みに草花文か。外底に銘款。	SM8	3層
	86	タイ産陶器	蓋	―	―	―	―	―	合子の蓋。内面露胎。外面は蛇の目釉剥ぎ状で中央部が褐釉が濃い。外面に砂目？付着。87と同器形か。	SM8	3層
	87	タイ産土器	蓋	―	―	4.3	1.6	―	摘みのある蓋。外面は成形されるが、内面は雑な調整。86と器形が類似する可能性あり。	SM8	3層
	88	土器	壺	―	口縁	19.2	―	―	口縁が外側に開く器形。外面は斜め方向にﾅﾃﾞ成形。内面口縁から頸部は横方向にﾅﾃﾞ成形。頸部以下は指頭圧痕。	SM8	3層
	89	明朝系瓦（赤色）	軒丸瓦	―	瓦当	―	―	―	范バリ丁寧に成形。　上原：湧田ⅡA01式　石井：天界寺A	SM8	3層
	90	明朝系瓦（赤色）	軒平瓦	―	瓦当	―	―	―	上原：天界ⅠAa03式？	SM8	3層

第10表　近世3　出土遺物観察一覧d

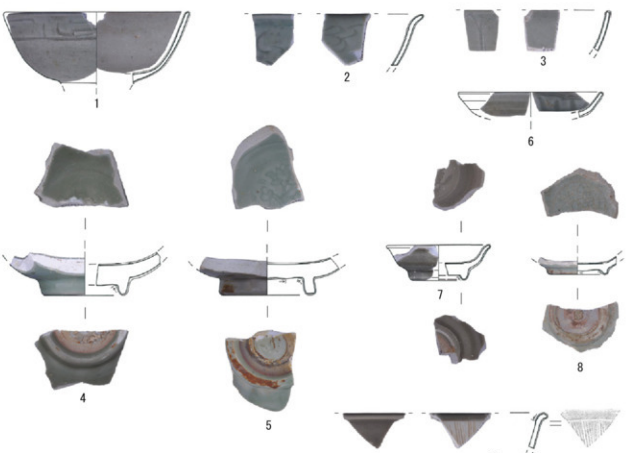
挿図番号	遺物番号	種類	器種	分類	部位	法量（cm） 口径	器高	底径	観察事項	出土位置 遺構	層序
第109図	91	明朝系瓦（灰色）	軒平瓦	－	瓦当	－	－	－	上原：草花文側視1型。	SM8	3層
第110図	92	瓦質土器	鉢	－	口～底	34.6	15.3	29.0	浅い器形で、脚をもち、3脚資料と考えられる。口縁直口し、口唇を平坦に成形。脚の中央は空洞で内面側に孔あり。	SM8	－
	93	明朝系瓦（灰色）	軒丸瓦	－	瓦当	－	－	－	范バリ残る。漆喰付着。上原：首木ⅠAe01式　石井：西のアザナH系	SM8	－
	94	明朝系瓦（灰色）	軒丸瓦	－	瓦当	－	－	－	范バリ丁寧に成形。　上原：涌田ⅡA01式　石井：天界寺A	SM8	－
	95	明朝系瓦（灰色）	丸瓦	－	玉縁～筒部	－	－	－	筒部に漆喰が付着。筒部に瓦支えのための釘孔。	SM8	－
第111図	96	中国産青磁	鉢	幅広高台タイプ	底部	－	－	9.4	胎土灰白色。畳付から高台内は露胎。見込みは蛇の目釉剥ぎ。	SM11	1層
	97	中国産青花	皿	明皿類	口～底	10.4	2.1	6.0	直口口縁。畳付から高台内は露胎。高台内には僅かに鉋痕残る。畳付に窯詰め時の砂付着。見込みに草文？口唇に煤付着。	SM11	1層
	98	中国産青花	皿	明皿類	底部	－	－	13.4	大振りの皿。高台内は露胎だが、一部に釉がかかる。畳付に窯詰め時の砂付着。見込み内が中央部がわずかに窪む。	SM11	1層
	99	産地不明陶器	瓶か壺	－	胴部	－	－	－	外面腰部まで褐釉施釉。内面は露胎で、胴部はたたき目が残り凹凸している。頸部付近はナデ整形が行われる。	SM11	1層
	100	初期沖縄産無釉陶器	壺	－	口縁	－	－	－	ラッパ状に口が開く器形。口縁は一度外に折り曲げ、再度内側へ向けて折り返して成形。	SM11	1層
	101	瓦質土器	鉢	－	底部	－	－	16.8	平底で内部は調整痕残る。外面はナデ成形が丁寧に行われる。	SM11	2層
	102	中国産青花	碗	漳州窯系	口縁	12.8	－	－	直口口縁で口縁断面は舌状。口唇の一部は釉が剥がれている。	SM11	－
	103	中国産青花	碗	明皿類	口縁	－	－	－	直口口縁で口縁部は釉の厚みで僅かに肥厚する。文様の一部ににじみ。	SM11	－
	104	中国産褐釉陶器	壺	5類	口縁	7.6	－	－	小ぶりの壺。口縁断面三角形状。口唇露胎。内面頸部以下は露胎。	SM11	－
	105	青銅製品	不明	－	－	－	－	－	外面は丸みをおび、内面は窪む器形。内面中央に突起あり。	SM12	1層
第112図	106	明朝系瓦（灰色）	軒平瓦	－	瓦当	－	－	－	上原：草花文側視1型ⅠAa系　石井：牡丹文様Ⅰ系	SM12	1層
第111図	107	中国産青磁	碗	Ⅵ類	底部	－	－	4.15	畳付及び高台内露胎。畳付は外削りで高台先端断面は逆三角形状。釉は黄味がかる。見込みは蛇の目釉剥ぎ。見込み中央に窪み孔。見込み部にスタンプ文が3つ施される。	SM12	1層下
第112図	108	瓦質土器	鉢	－	口縁部	30.8	－	－	口唇平坦で口縁断面は内側に先端がある逆三角形状。口縁に2条の鋸目突帯があり胴部付近に1条の鋸目突帯が残存。区画状になっており、区画の内側に菊花文が描かれる。内面に煤付着。	SM12	2層
	109	瓦質土器	火炉	－	口縁	23.0	－	－	口縁が内側に折り曲がる器形で口縁端はナデ成形。口縁部は継ぎ足し成形。口縁下部に穿孔。内外ともに煤が付着するが、内面の付着が多い。	SM12	2層
	110	中国産白磁	皿	E群	口縁	10.8	－	－	外反口縁で薄手の皿。	SM12	3層
	111	中国産青花	碗	明皿類	口～底	12.4	6.2	5.0	饅頭心碗。直口口縁。全面施釉後畳付釉剥ぎ。外面には蓮唐草文。見込みに草花文。外底内に銘款。	SM12	3層
	112	中国産青花	碗	－	口縁	10.2	－	－	外反口縁。外面に人物文。	SM12	3層
第113図	113	中国産青花	小碗	－	口～底	5.2	3.2	2.8	直口口縁。全面施釉後、畳付と畳付脇内側を釉剥ぎ。高台内に細い鉋痕。外面に唐草文か。	SM12	3層
	114	中国産青花	小碗	－	口～底	5.0	3.3	2.0	直口口縁。全面施釉後、畳付と高台内を全面釉剥ぎ。外面に草花文。	SM12	3層
	115	中国産色絵	碗	－	口～底	11.4	5.6	4.2	外反口縁。畳付と高台内全面を釉剥ぎ。外面に草花文。見込みに草花文。	SM12	3層
	116	宮古式土器	壺	－	底部	－	－	－	底部が僅かに残存する資料。外面は縦方向の調整痕。内面ナデ成形丁寧。	SM12	3層
	117	中国産褐釉陶器	壺	－	口縁	9.0	－	－	口縁玉縁状の小型壺。外面には褐釉施釉。内面は口縁上部以外は露胎。口縁から頸部まではナデ成形。肩部以下は叩き痕。	SM12	掘方
	118	中国産青磁	皿	Ⅴ類	口縁	10.2	－	－	無文。直口口縁。胎土灰白色。	SM14	1～3層
	119	初期沖縄産無釉陶器	擂鉢	－	口縁	－	－	－	口唇平坦で外面口縁下部に一条の稜あり。5本前後の櫛目を施す。胎土に白色石英粒が筋状に混入。	SM14	1～3層
	120	初期沖縄産無釉陶器	鉢	－	口縁	－	－	－	小型の鉢。口唇平坦。胎土に白色石英粒が筋状に混入。	SM14	1～3層

第10表　近世3　出土遺物観察一覧e

挿図番号 遺物番号		種類	器種	分類	部位	法量（cm） 口径	器高	底径	観察事項	出土位置 遺構	層序
第113図	121	明朝系瓦（赤色）	軒丸瓦	—	瓦当	—	—	—	笵バリ僅かに残る。上原：流派Ⅰ B-a2式　石井：牡丹文様系Ⅱ	SM14	1～3層
	122	瓦質煙管	煙管	陶言Ⅰ類	雁首	—	—	—	瓦質製品。全面研磨される。	SM14	3層
第114図	123	中国産青磁	碗	Ⅵ-1類	底部	—	—	5.2	胎土灰白色で灰色味がかい。全面施釉後、畳付の一部と高台内を軸剥ぎ。高台外面の一部は露胎部分あり。外面縦刷毛連弁文。見込みに印花文。	SM20	1層
	124	中国産青磁	香炉	—	底部	—	—	7.4	脚をもつ筒型香炉。内面底部は露胎。内面底部付近は被熱。	SM20	1層
	125	中国産白磁	皿	E群	底部	—	—	10.2	全面施釉後、畳付軸剥ぎ。畳付脇に窯詰め時の砂付着。内面被熱か。	SM20	1層
	126	中国産色絵	皿か小皿	—	底部	—	—	—	内面に雲や獅子が描かれる。青か緑色を用いていたものが被熱され変色している。	SM20	1層
	127	中国産褐釉陶器	壺	S類	口縁	17.6	—	—	口縁断面逆L字状。頸部以下は八の字状に開く。	SM20	1層
	128	タイ産褐釉陶器	壺	—	底部	—	—	20.0	底部中央にかけてわずかに窪む。内面は露胎。	SM20	1層
	129	タイ産半練土器	蓋	—	—	—	—	—	半練の蓋。摘みは丸型。外面変色。	SM20	1層
	130	明朝系瓦（褐色）	軒丸瓦	—	瓦当	—	—	—	笵バリ成形丁寧。上原：草花文個別1型Ⅰ A系　石井：牡丹文様Ⅰ系	SM20	1層
	131	中国産青磁	蓋	—	—	—	—	—	酒会壺の蓋。ヘラ削り文様施文。	SM20	2層
第115図	132	中国産白磁	皿	E群	口～底	18.2	3.2	10.2	外反口縁で口縁玉縁状。高台先端断面は逆二角形状。全面施釉後、畳付を軸剥ぎ。畳付脇に窯詰め時の砂付着。内外面被熱。	SM20	2層
	133	中国産白磁	皿	E群	口～底	15.6	3.4	8.8	外反口縁。全面施釉後、畳付を軸剥ぎ。高台先端断面は逆三角形状。内外面被熱で黒色に変色。	SM20	2層
	134	中国産青花	碗	明Ⅱ-1類	口縁	13.4	—	—	直口口縁。口縁外面上部に波涛文。知意頭文。	SM20	2層
	135	中国産青花	皿	明Ⅱ類	口～底	12.0	2.9	6.4	外反口縁。畳付軸剥ぎ。畳付に窯詰め時の砂付着。見込みに玉取獅子。外面は牡丹唐草文。被熱。	SM20	2層
	136	中国産青花	皿	明Ⅱ類	口縁	12.6	—	—	外反口縁。外面は牡丹唐草文。	SM20	2層
	137	中国産褐釉陶器	壺	—	口縁	9.6	—	—	口縁断面は三角形状。やや頸部がかり、肩部にかけて外側に開く器形。	SM20	2層
	138	中国産褐釉陶器	壺	S類	口縁	13.4	—	—	口縁断面は方形状。頸部以下は八の字状に開く器形。	SM20	2層
	139	中国産青磁	碗	Ⅵ類	底部	—	—	5.4	胎土灰白色で灰色味がかい。全面施釉後、畳付の一部と高台内を軸剥ぎ。	SM20	3層
	140	中国産青磁	蓋	—	—	—	—	—	酒会壺の蓋。胎土灰白色。内面に牡丹文様。	SM20	3層
	141	中国産白磁	皿	E群	口縁	16.0	—	—	外反口縁。内外面被熱。	SM20	3層
	142	中国産青花	碗	明Ⅱ-1類	口縁	12.2	—	—	直口口縁。外面に波涛文。	SM20	3層
	143	中国産青磁	碗	V-3類	口縁	19.6	—	—	大振りの碗。外反口縁。内外面にヘラ描きの草花文。	SS10	—
第116図	144	中国産青花	瓶	—	口縁	6.8	—	—	口縁外反。頸部が尖まる器形。	SS16	—
	145	沖縄産無釉陶器	壺	—	底部	—	—	—	平底で外底に石灰付着。	SS16	—
	146	中国産青磁	碗	V類	底部	—	—	5.6	胎土灰白色。全面施釉後、高台内を軸剥ぎ。高台内に窯詰め痕残る。	SS17	—
	147	中国産青花	小鉢	—	口縁	9.8	—	—	外反口縁。外面の口縁下部に一条の線があり、区画文状になる。その内部を花弁文描く。	SS17	—
	148	瓦質土器	火鉢	—	口縁	—	—	—	口縁平坦に成形され、口縁下部に一条の線あり、10本前後の櫛目を施す。	SS17	—
	149	中国産白磁	皿	E群	口縁	12.2	—	—	外反口縁。	SX37	—
	150	中国産青花	碗	明Ⅱ-2類	底部	—	—	6.1	畳付軸剥ぎ。高台先端は先細る。腰から折れ、口縁にかけて直線的に開く器形。外面には花弁文。見込みは輪下に亀裂線あり。	SX37	—

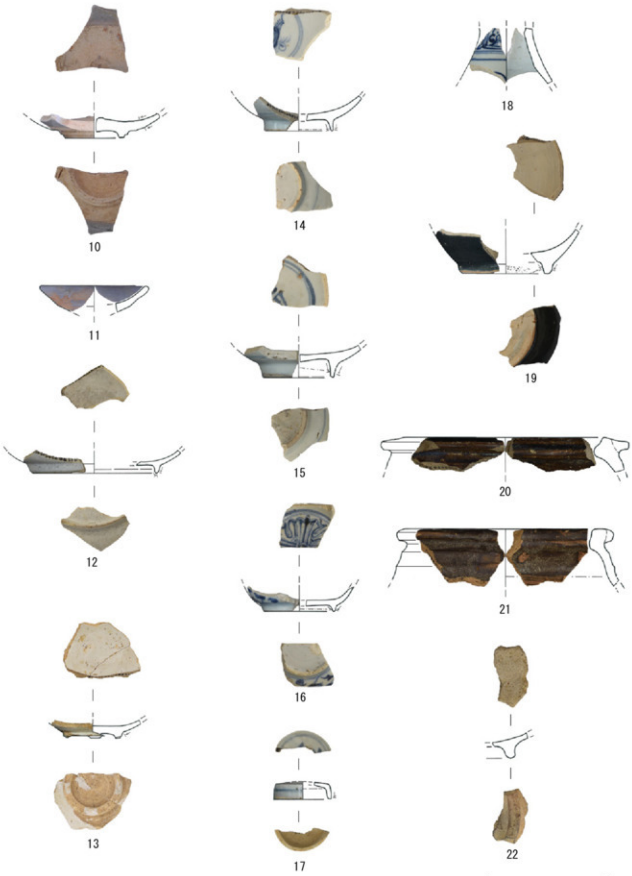
第10表　近世3　出土遺物観察一覧f

挿図番号	遺物番号	種類	器種	分類	部位	法量（cm）			観察事項	出土位置	
						口径	器高	底径		遺構	層序
第116図	151	中国産青花	小皿	明Ⅱ-1類	口～底	9.1	2.2	5.1	外反口縁。蛇行釉剥ぎ。高台先端断面は逆三角形状で外削り。内外面に貫入あり。外面に花唐草文。見込みに十字文。見込みの釉下に亀裂線あり。	SX37	—
第117図	152	中国産褐釉陶器	壺	—	底部	—	—	12.8	底部中央にかけて窪む。内外面に褐釉施釉。	SS17	—
	153	ベトナム産染付	碗	—	底部	—	—	5.8	蛇行及び外底内は露胎。見込みは蛇の目釉剥ぎ。高台内及び蛇の目釉剥ぎ部に煤付着。	SX37	—
	154	本土産陶器	擂鉢	—	口縁部	22.4	—	—	口縁逆くの字状。5本単位の櫛目を施す。	SX37	—
	155	中国産青磁	器種不明	—	不明	—	—	—	胎土灰白色。2か所の上方へと延びる部分がある。一方は接着痕が残るが、もう一方は丁寧に削り出される。積き不明のため断面実測のみ。	SA16	裏込



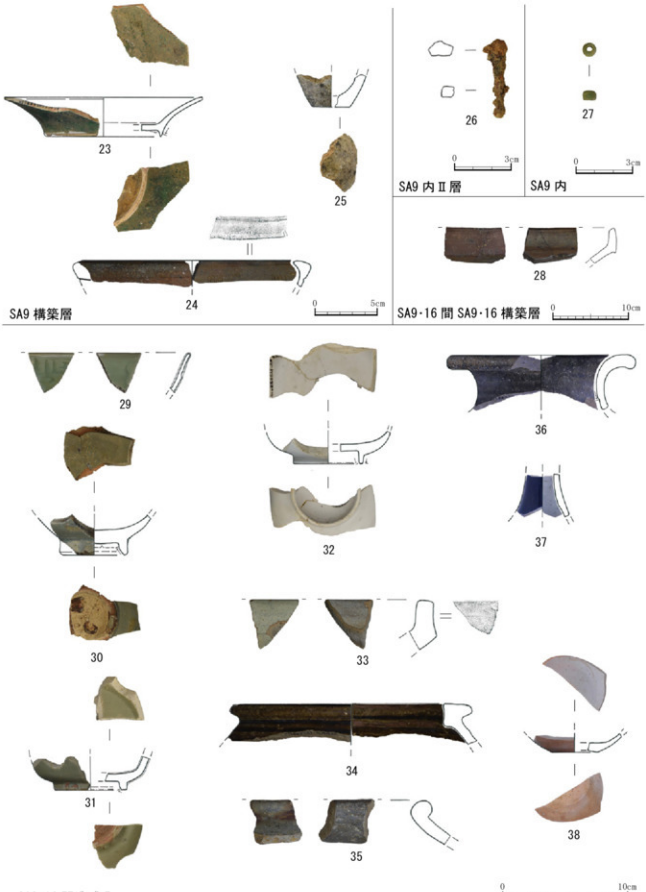
SA9 構築層

第101図　近世3の遺構出土遺物1

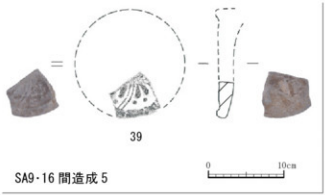


SA9 構築層

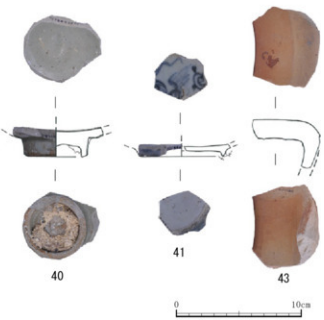
第 102 図　近世 3 の遺構出土遺物 2

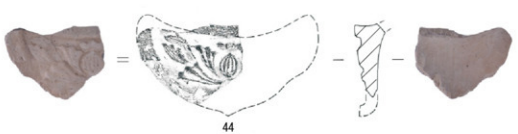


第 103 図　近世 3 の遺構出土遺物 3

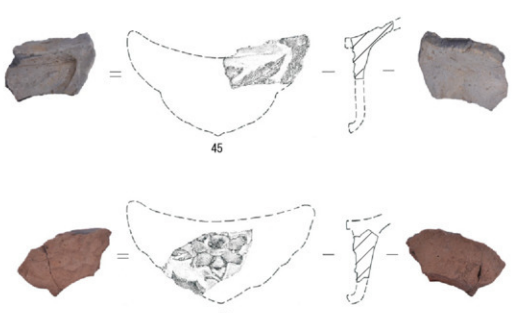


SA9・16 間造成 5



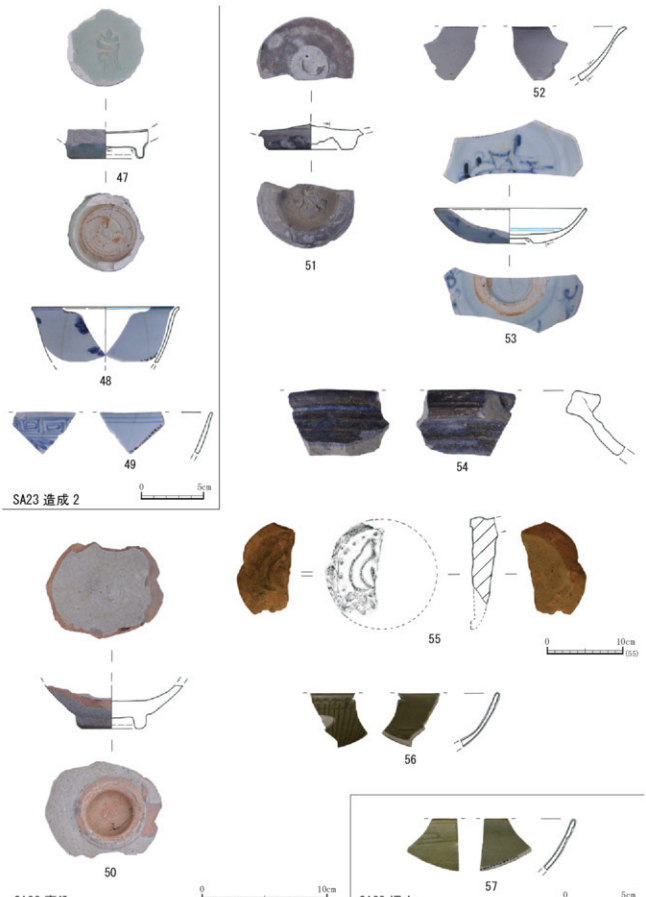


SA16 裏込

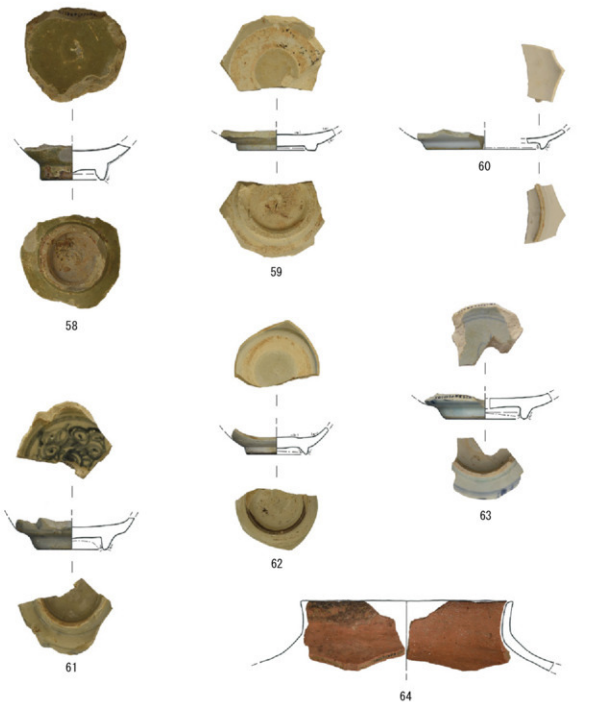


SA19 裏込

第 104 図　近世 3 の遺構出土遺物 4



第 105 図　近世 3 の遺構出土遺物 5



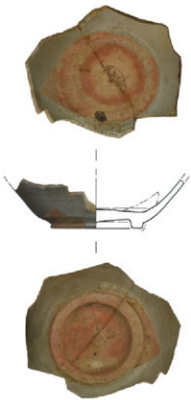
第 106 図　近世 3 の遺構出土遺物 6

66

0　5cm

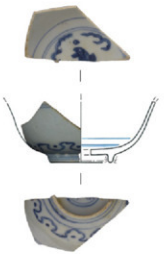
SE2 内（半裁）1 層

67



68

69



70

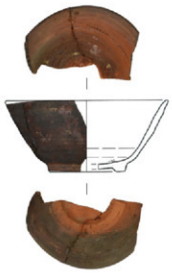
71

0　10cm (71)

0　10cm

SE2 2 層

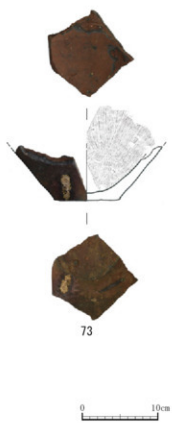
第 107 図　近世 3 の遺構出土遺物 7



SL2 2 層

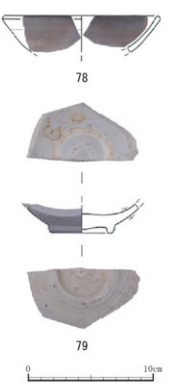
SM1

SM8 1 層

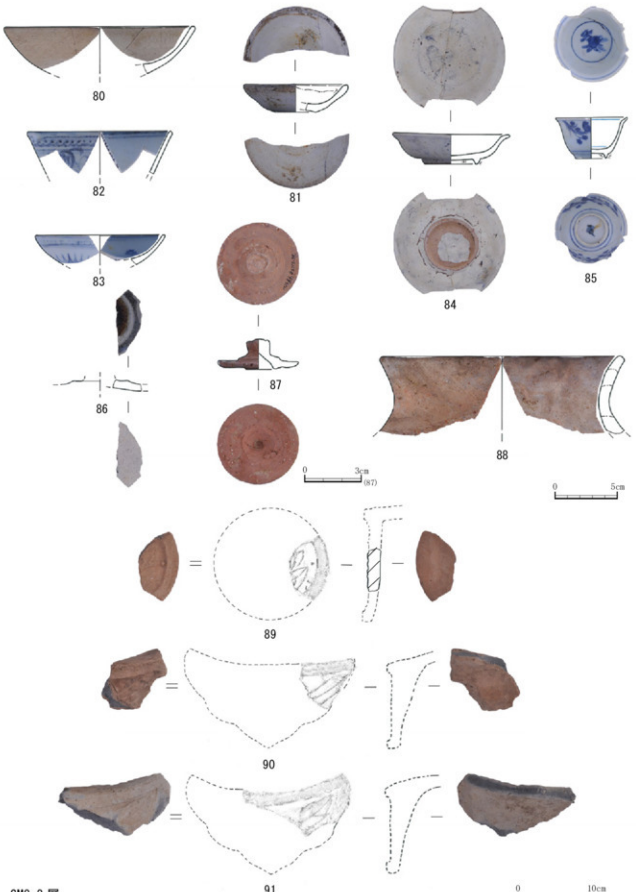


SL2

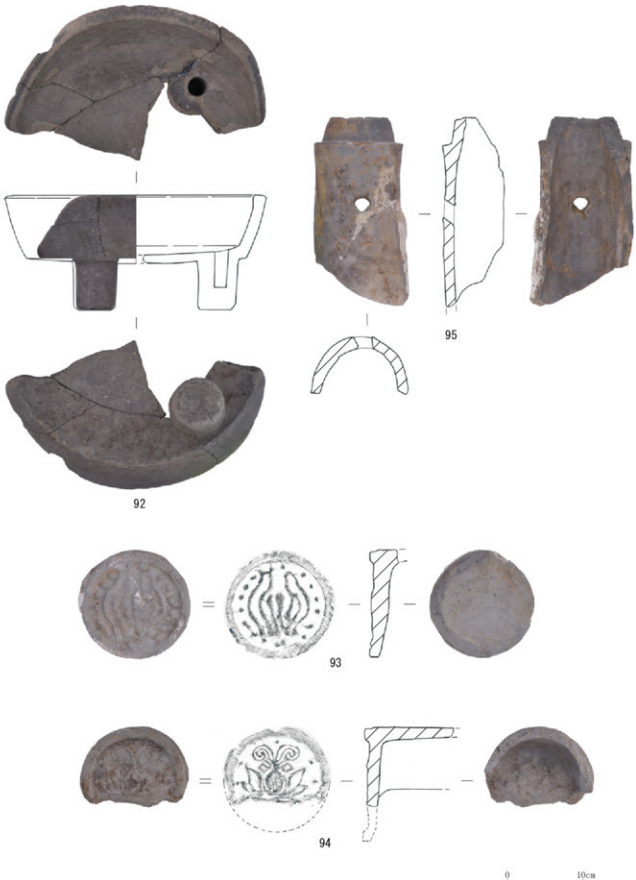
SM8 3 層



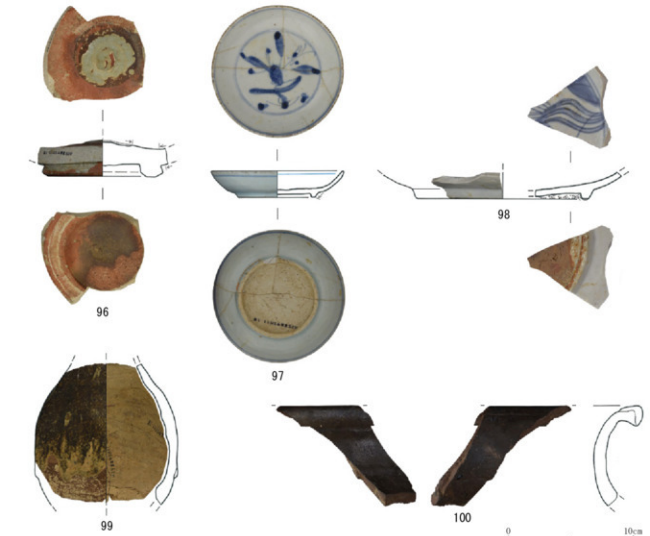
第 108 図　近世 3 の遺構出土遺物 8

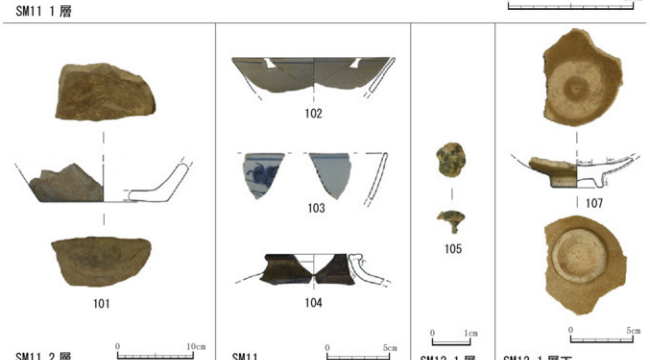


第109図　近世3の遺構出土遺物9

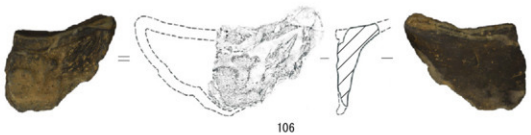


第 110 図　近世 3 の遺構出土遺物 10





第 111 図　近世 3 の遺構出土遺物 11

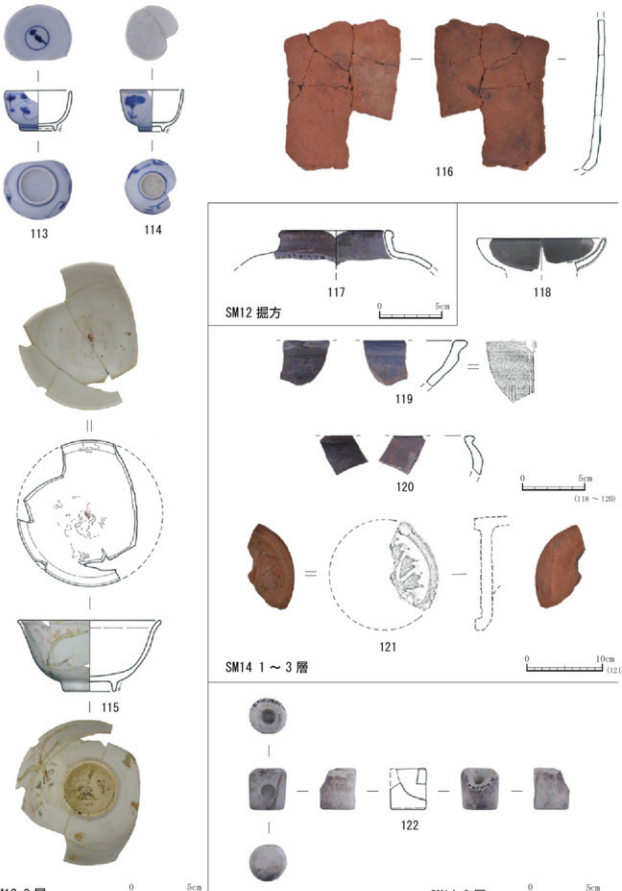


SM12 1 層

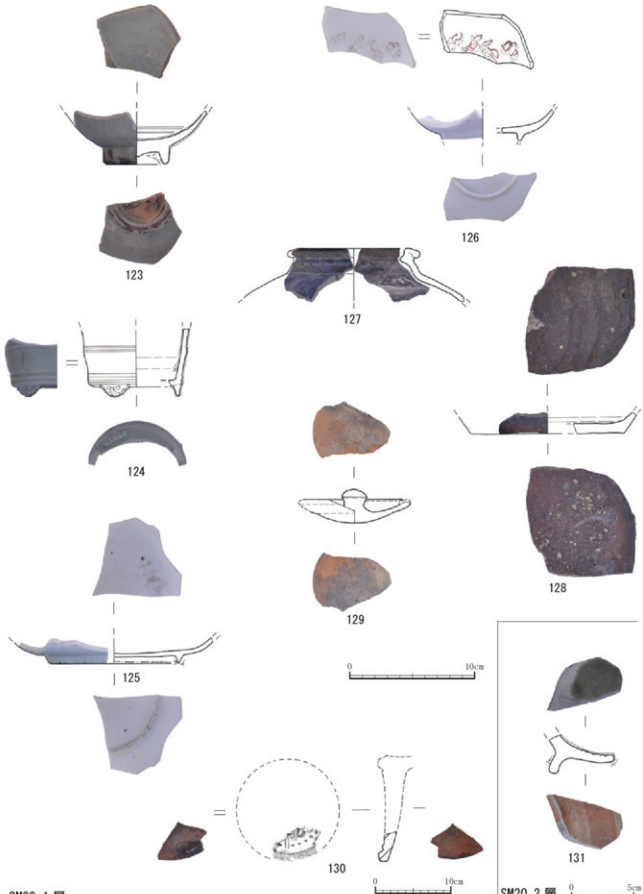
SM12 2 層

SM12 3 層

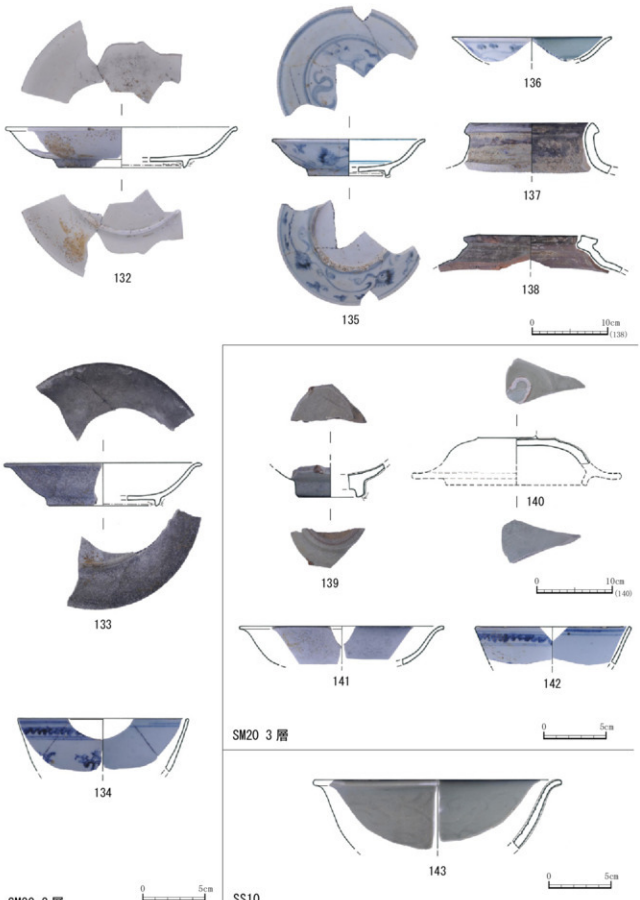
第 112 図　近世 3 の遺構出土遺物 12



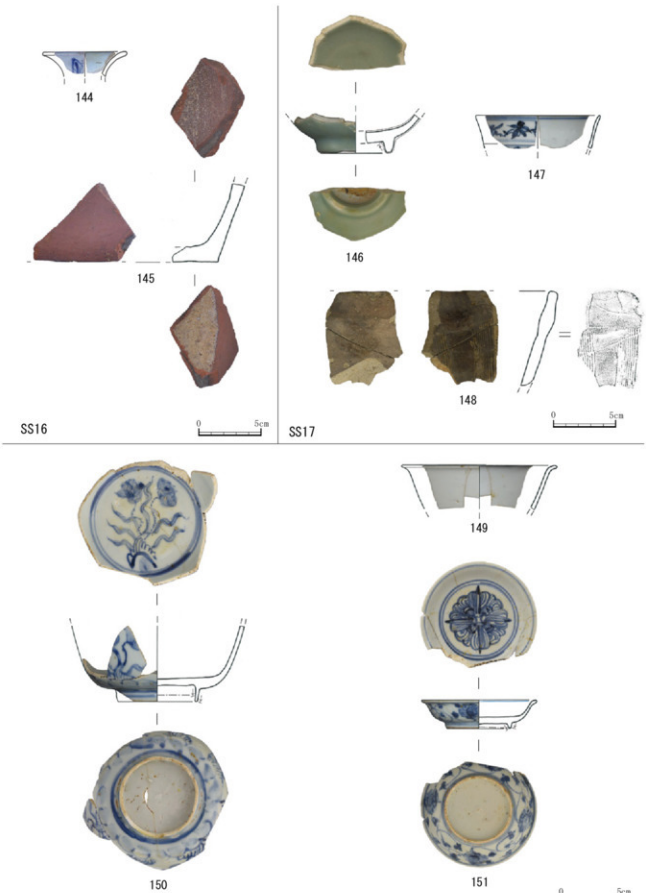
第 113 図　近世 3 の遺構出土遺物 13



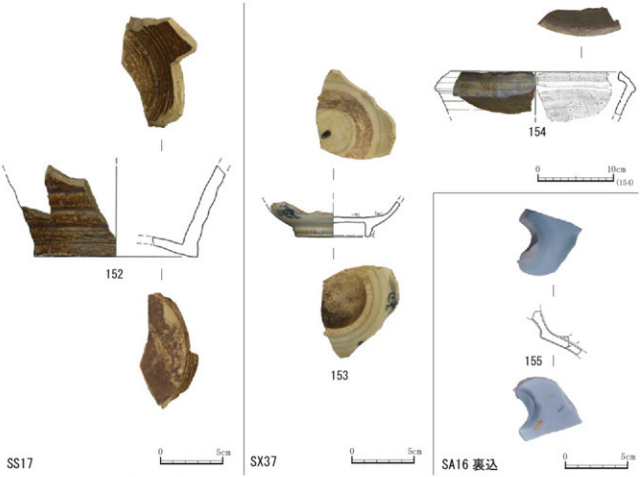
第 114 図　近世３の遺構出土遺物 14



第115図　近世3の遺構出土遺物15



第 116 図　近世 3 の遺構出土遺物 16



第 117 図　近世 3 の遺構出土遺物 17